

奈良県磯城郡田原本町

# 保津・宮古遺跡

## 第1次発掘調査報告書

2013年3月

田原本町教育委員会

奈良県磯城郡田原本町

# 保津・宮古遺跡

## 第1次発掘調査報告書

2013年3月

田原本町教育委員会



卷頭図版 1



SK-101中層遺物出土状況





木製盾



## 序

奈良盆地中央部に位置する田原本町は、町域の全体が沖積地に立地する低地部にあり、早くから農耕に適した土地として原始から発展してまいりました。特に初期農耕遺跡として著名な唐古・鍵遺跡は、弥生時代を代表する環濠集落遺跡として古代史研究に欠かせない遺跡であります。本町には、このような唐古・鍵遺跡以外にも数多くの農耕集落遺跡が存在しており、また、古社寺や仏像など歴史時代の遺産も豊富に存在しているところでもあります。

田原本町では、これら文化財の保護と啓発に努めており、そのための事業の一つとして、町内の遺跡の発掘調査と保存にも力を入れているところでもあります。

今回、ここに報告させていただくのは、国・県の補助を受けて実施しました保津・宮古遺跡の調査報告であります。古墳時代のほぼ完存する木製盾が出土し、大変貴重な成果を得ることができました。

今後、これらの成果が本町の歴史や文化を知る資料として活用され、歴史や文化財に対する理解を深める契機となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたりまして、ご指導・助言をいただいた多くの関係機関、関係各位、土地所有者及び地元の方々に深くお礼申し上げます。

平成25年 3月29日

田原本町教育委員会  
教育長 片倉照彦





## 例 言

1. 本書は、奈良県磯城郡田原本町大字宮古小字寺西257番4・258番4で実施した保津・宮古遺跡第1次発掘調査報告書である。発掘調査は、農業用倉庫建築に伴う事前調査として、1988年12月9日～12月17日に実施した。建築面積108㎡で、そのうち調査面積は38㎡である。
2. 報告書作成は平成24年度の国庫補助、県費補助事業として田原本町教育委員会事務局 文化財保存課が実施した。
3. 発掘調査は、田原本町教育委員会事務局文化財保存課 技師 藤田 三郎（現文化財保存課長）が担当した。発掘調査及び整理作業にあたっては、下記の方々の協力を得た。  
発掘調査 同志社大学学生 若林 邦彦（現 同志社大学 准教授）  
天石 夏実（現 静岡市役所）  
遺物整理作業 田中 友貴恵・奥本 英里（田原本町教育委員会事務局 臨時職員）  
江浦 至希子（田原本町教育委員会事務局 日日雇用職員）  
若林 邦彦・天石 夏実
4. 発掘調査及び報告書の作成に際して、下記の方々から格別のご指導・助言を頂いた。ここに記して感謝します（敬称略）。  
石野 博信・櫻井 久之・谷山 正道・次山 淳・寺澤 薫・橋本 達也・森下 恵介
5. 本書の執筆は、目次に記した。本書の編集は、清水 琢哉（田原本町教育委員会事務局文化財保存課 調査係長）と協議し、最終的に西岡 成晃（同 臨時職員）の協力を得て、藤田がおこなった。
6. 出土遺物及び調査関係資料は、田原本町教育委員会事務局 文化財保存課にて保管している。



# 目 次

I. 調査に至る経過と経緯 (藤田) .....	1
II. 保津・宮古遺跡の環境 (清水) .....	2
1. 地理的環境	
2. 歴史的環境	
3. 保津・宮古遺跡の学史と既往の調査	
III. 調査の方法と経過 (藤田) .....	22
1. 調査の方法と経過	
IV. 検出された遺構 (藤田) .....	24
1. 堆積土層	
2. 遺構	
V. 出土した遺物 (藤田) .....	32
1. 土器	
2. 瓦	
3. 木製品	
4. 石製品・土製品	
VI. まとめ (藤田) .....	50
1. 保津・宮古遺跡の弥生から古墳時代集落と常楽寺推定地	
2. 出土遺物について	

## 挿 図 目 次

第1図	保津・宮古遺跡の位置	2
第2図	保津・宮古遺跡周辺の遺跡	4
第3図	保津・宮古遺跡の範囲変遷図1	8
第4図	保津・宮古遺跡の範囲変遷図2	9
第5図	既往の調査位置図	11
第6図	宮古池出土土器実測図	12
第7図	興福寺雑役免坪付帳（1070年）にみられる庄園の分布図	13
第8図	泥塔実測図	14
第9図	宮古周辺の小字図	15
第10図	調査地位置図	22
第11図	基本土層柱状図	24
第12図	遺構平面図及び南壁土層断面図	25
第13図	SK-101平面図及び西壁土層断面図	27
第14図	SK-101最下層上位及び中層 遺物出土状況図	28
第15図	SK-101上層上位 遺物出土状況図	29
第16図	SK-101埋没過程変遷図	29
第17図	SK-102遺構平面図及び北壁土層断面図	31
第18図	SK-101出土土器1	33
第19図	SK-101出土土器2	35
第20図	SD-101・101W出土土器	36
第21図	搬入土器	37
第22図	SK-01出土土器	39
第23図	SK-01出土瓦1	40
第24図	SK-01出土瓦2	41
第25図	SK-01出土瓦3	43
第26図	SK-01出土瓦4	44
第27図	SK-101出土木製盾	45
第28図	木製盾模式図	46
第29図	SK-101出土曲柄平鍬・横槌	47
第30図	石製品・土製品	48
第31図	保津・宮古遺跡周辺の弥生から古墳時代の遺構・遺物分布図	51

第32図	常楽寺推定地の遺構・遺物分布図	53
------	-----------------	----

## 表 目 次

第1表	遺跡地名表	5
第2表	保津・宮古遺跡及び周辺遺跡の既往の調査一覧	16

## 写 真 目 次

写真1	保津・宮古遺跡近景	1
写真2	宝篋印塔（泥塔出土地・移設後）	14
写真3	現地説明会風景	23
写真4	SK-101出土モモ核・ウリ	30
写真5	土器3の口縁部内面の使用痕	32
写真6	土器18の軸芯痕	36
写真7	軒平瓦1の顎部接合痕	42
写真8	軒平瓦2の顎部接合痕	42

## 図 版 目 次

図版1	遺跡1
	1. 上空から見た遺跡全景1 写真上が北（1948年撮影）
図版2	遺跡2
	1. 上空から見た遺跡全景2 写真上が北（2005年撮影）
図版3	遺跡3
	1. 北西上空から見た遺跡全景3（2005年撮影）
	2. 北西上空から見た遺跡近景（2005年撮影）
図版4	遺跡4
	1. 調査前の状況
	2. 土坑調査風景
	3. 調査後の状況
図版5	遺構1
	1. 調査区全景・完掘状況（西から）
	2. 調査区全景・完掘状況（東から）
図版6	遺構2

1. 遺構検出状況（西から）
2. SK-101検出状況（南から）

図版7 遺構3

1. SK-101上層上位遺物出土状況1（南から）
2. SK-101上層上位遺物出土状況2（南から）
3. SK-101西壁土層断面（東から）

図版8 遺構4

1. SK-101中層遺物出土状況1（南から）
2. SK-101中層遺物出土状況2（東から）

図版9 遺構5

1. SK-101中層遺物出土状況1（南から）
2. SK-101中層遺物出土状況2（南から）

図版10 遺構6

1. SK-101最下層上位遺物出土状況（南から）
2. SK-101完掘状況（南から）

図版11 遺構7

1. SK-102完掘状況（北から）
2. SK-01完掘状況（南から）
3. SD-101・101W完掘状況（北東から）

図版12 遺物1 土器1（SK-101）

1・3：SK-101中層、2・4：SK-101上層上位、5：SK-101上層下位

図版13 遺物2 土器2（SK-101）

1・3～7：SK-101上層上位、2：SK-101上層下位

図版14 遺物3 土器3（SK-101）

1・2・7・8・14・15：SK-101上層下位

4・9：SK-101下層

3・5・12：SK-101最下層上位

6：SK-101上層中位

10・11・13・16：SK-101上層上位

図版15 遺物4 土器4（SD-101・101W／搬入土器）

1・2・4・5・7・9・10：SD-101第1層

3・6・8・11・17：SD-101W第1層

12・14：SK-101上層上位

18：SK-101上層中位

13・16：SK-101上層下位

- 15 : SK - 101中層
- 図版16 遺物 5 土器 5 (SK - 01)  
1 ~ 6 : SK - 01上層
- 図版17 遺物 6 瓦 1 (軒平瓦・平瓦)  
1 ~ 6 : SK - 01上層
- 図版18 遺物 7 瓦 2 (平瓦)  
1 ~ 2 : SK - 01上層
- 図版19 遺物 8 瓦 3 (平瓦)  
1 ~ 2 : SK - 01上層
- 図版20 遺物 9 瓦 4 (丸瓦)  
1 ~ 3 : SK - 01上層
- 図版21 遺物10 瓦 5 (雁振瓦・文字瓦)  
1 ~ 2 : SK - 01上層
- 図版22 遺物11 木製品 1 (木製盾)  
1. 木製盾 (A面処理前) : SK - 101中層
- 図版23 遺物12 木製品 2 (木製盾)  
1. 木製盾 (B面処理後) : SK - 101中層
- 図版24 遺物13 木製品 3 (木製盾)  
1. 木製盾 (B面右上部分 処理後) : SK - 101中層  
2. 木製盾 (B面右下部分 処理後) : SK - 101中層
- 図版25 遺物14 木製品 4 (木製盾・曲柄又鋏・平鋏・横槌)  
1. 木製盾 (B面右上部分 処理後) : SK - 101中層  
2. 木製盾 (B面右下部分 処理後) : SK - 101中層  
3. 木製盾 (A面右上部分 処理後) : SK - 101中層  
4. 曲柄又鋏 : SK - 101中層  
5. 曲柄平鋏 : SK - 101中層  
6. 横槌 : SK - 101最下層上位
- 図版26 遺物15 石製品・土製品  
1. 石製品 : SK - 01上層  
2・3. 加工土器片 : SK - 101上層中位・下位  
4. 加工円板 : SK - 01上層  
5. 加工円板 : SK - 101上層上位  
6. 砥石 : SK - 01上層





## I. 調査に至る経過と経緯

保津・宮古遺跡は、田原本町北西部に位置する弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。遺跡の内容については、「II. 保津・宮古遺跡の環境」で詳述するが、これまでに保津・宮古遺跡は、全く調査がおこなわれていないことから、遺構遺物の分布状況も把握されていないような状態であった。ただし、宮古池の南側への拡張工事に伴い土器が出土したというようなこれまでの風聞もあり、宮古池の北側に位置する当該地の状況把握は重要な課題であった。

このような状況のなか、昭和63年11月8日付けで、田原本町大字宮古259番地の田村功氏から農業用倉庫の建築に伴い、埋蔵文化財発掘届が提出された。建築場所は、宮古257番4と258番4で面積は251㎡。また、農業用倉庫の内容は、鉄筋2階建の建築面積108㎡もある大型倉庫であった。以上のような経緯のもと、田原本町教育委員会では、保津・宮古遺跡の内部にあたること、小字名が「寺西」であり中世寺院周辺の可能性があることから、発掘調査の必要があるという意見で県教育委員会に進達した。

これに対し、県からの通知は昭和63年12月16日付け、教文第1681号2で発掘調査の指示が示された。このような経緯に基づき、田村氏には発掘調査に対するご理解とご協力を賜り、記念すべき第1次の発掘調査を実施することになった。調査では、古墳時代初頭と江戸時代の井戸等を検出し、多大な成果をおさめることができた。また、発掘調査の最終日には、遺跡や発掘調査に対する理解を得るため、地元住民向けの現地説明会を開催し約30名の参加があった。



写真1 保津・宮古遺跡近景

## Ⅱ. 保津・宮古遺跡の環境

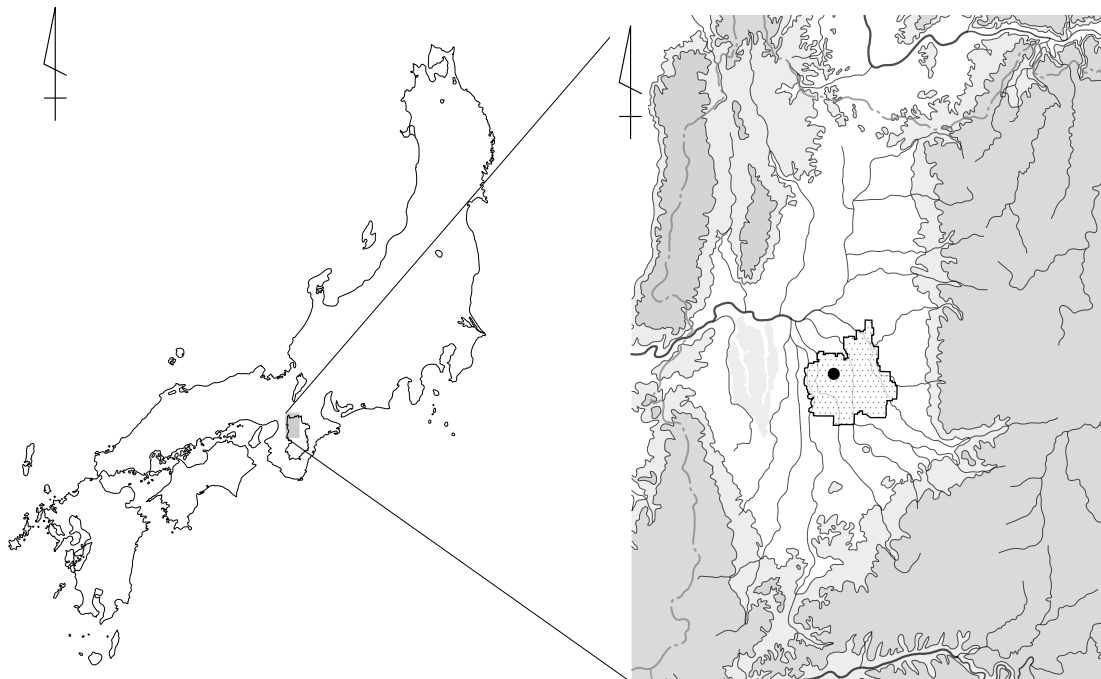
### 1. 地理的環境

奈良盆地は、東の笠置山地、北西の生駒山地、南西の金剛山地、北の奈良山丘陵、南の龍門山地によって囲まれた、南北25km、東西15km前後の盆地地形である。

奈良盆地北部からは佐保川が、東部からは布留川などが、南東部からは初瀬川・寺川が、南部からは飛鳥川・曾我川が流れ、盆地中央で合流して大和川となり、生駒山地と金剛山地の間の「亀の瀬」と呼ばれる溪谷を抜けて大阪湾へと注ぐ。

奈良盆地中央に位置する田原本町周辺は、標高50m前後の沖積平野が広がる。現況の初瀬川・寺川・飛鳥川・曾我川はいずれも南から北へとほぼ南北にまっすぐ流れ、田原本町北部～北西部で北西方向へと流れを変えて合流していく。ただし、旧地形の影響による条里の乱れや発掘調査で確認した旧河道などの情報を総合すると、田原本町付近では本来南南東－北北西を基調とした流れだったと考えられる。これが古代～中世のある時期に付け替えられ、現状の条里地割りに規制された河川へと姿を変えた。

保津・宮古遺跡は、田原本町西部、標高47m前後の沖積地に位置する。遺跡範囲は南北500m、東西1km前後の長楕円形で、西北西－東南東方向に長軸をもつ。遺跡の西側600mに飛鳥川が、東側800mに寺川がそれぞれ北流している。遺跡の現況は、これまで水田域が西側の大半を占め、中央の宮古集落と南側の保津集落が展開する形となっていたが、遺跡西部を縦断する京奈和自動車道が開通したことで急速に商業施設等の進出が進んでいる。



第1図 保津・宮古遺跡の位置

## 2. 歴史的環境

奈良盆地中央に位置する田原本町周辺では、旧石器時代の遺物の出土はほとんど知られていない。有舌尖頭器が田原本町宮古と多の2ヶ所で出土していることから、縄文時代早期頃になってようやく盆地東部または西部を生活の拠点とする人々が狩猟などの際に進出するようになったものと考えられる。

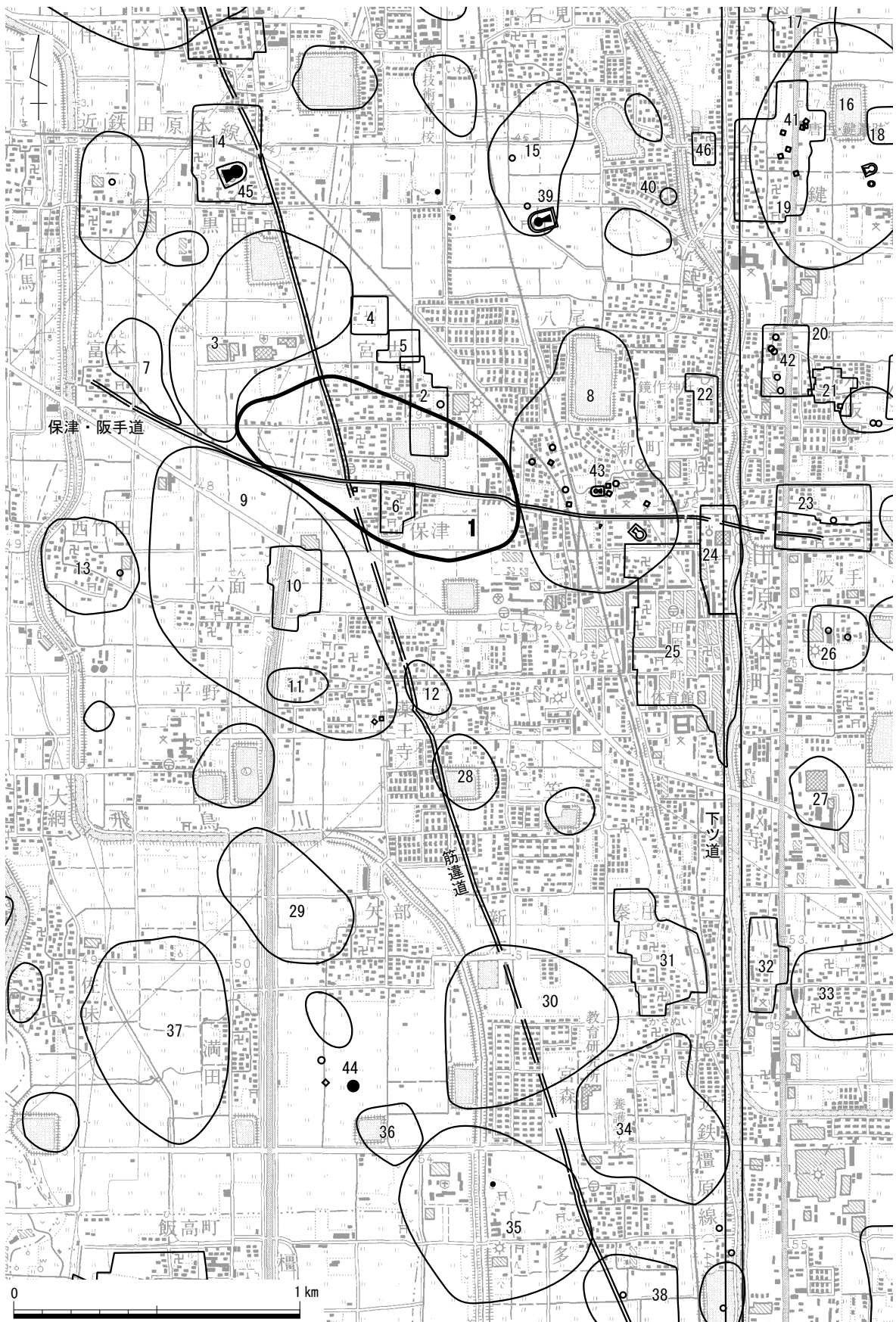
田原本町で明確な人の定住が考えられるようになるのは縄文時代後期に至ってからである。保津・宮古遺跡第14・20次調査では縄文時代後期の遺構・遺物を検出しており、小規模ながら集落が営まれていたと考えられる。遺構は明確でないが、矢部遺跡と秦庄遺跡でも縄文時代後期の深鉢などが比較的良好な状態で出土している。これまでのところ、田原本町西部～西南部に縄文時代後期の遺物出土地が偏っており、この段階の集落は現寺川以西で展開していた可能性がある。

縄文時代晩期になると、後に弥生集落が営まれる唐古・鍵遺跡や保津・宮古遺跡、さらに弥生時代中期の墓域が展開することになる阪手東遺跡や羽子田遺跡などでも土器が出土するが、明確な集落遺構としては確認していない。ただし、縄文時代後期よりも遺跡数は増加し、田原本町中央～東部にも分布するようになる。

弥生時代前期になると、唐古・鍵遺跡、多遺跡、保津・宮古遺跡などで明確な集落遺構の形成が認められるようになる。これらの初期農耕集落のうち、唐古・鍵遺跡及び多遺跡の2遺跡は、後に拠点集落へと成長し、弥生時代を通じて地域開発の中心を担うことになる。なお、縄文時代後・晩期～弥生時代前期の段階では、集落遺構の形成される微高地と河川による開析谷の高低差が大きかった可能性が高い。現在の平坦な盆地内の景観とは大きく異なっていたであろう。

弥生時代中期頃には盆地低地部で沖積作用がすすみ、自然堤防上などでも小規模な集落が多数営まれるようになるようである。唐古・鍵遺跡は幾重にも環濠を巡らせた大規模な環濠集落へと成長し、周辺に墓域や小規模な衛星集落が形成されるようになる。ただし、盆地全体が弥生時代中期末頃に大規模な洪水砂による被害を受けたとみられ、衛星集落の大半が中期後半の短期間で廃絶する。後期初頭には一部の集落が丘陵上に移るなどの変化がみられるが、この傾向は奈良盆地よりも大阪湾岸で顕著であり、和泉地域を代表する池上・曾根遺跡が丘陵上の観音寺山遺跡へと移り、摂津地域の大集落安満遺跡も丘陵上の古曾部・芝谷遺跡へと移ったと考えられている。一方、奈良盆地では東大寺山遺跡と桜井公園遺跡群で丘陵上の集落形成が認められるものの、主要な拠点集落は平野部で継続する。

弥生時代後期後半には、奈良盆地低地部で再び小規模な集落が多数出現する。そして、古墳時代前期には盆地南東部に新たな大規模集落である纏向遺跡が出現する。弥生時代を通じて栄えた唐古・鍵遺跡などは規模を縮小する形で古墳時代前期にも存続する。また、伴堂東遺跡や羽子田遺跡、三河遺跡など新たに出現する集落もみられる。



第2図 保津・宮古遺跡周辺の遺跡 (S=1/20,000)

第1表 遺跡地名表

	遺跡名	町遺跡番号	県遺跡番号	種類	時代
1	保津・宮古遺跡	34	11-C-0033	集落跡	縄文、弥生～鎌倉
2	常楽寺推定地	36	11-C-0110	寺院跡、集落	中世～近世
3	宮古北遺跡	32	11-A-0072	集落跡、農耕地	弥生、古墳、飛鳥、奈良、平安、鎌倉、室町
4	宮古前遺跡	110	11-A-0115	集落跡	古墳、鎌倉、室町
5	宮古石橋遺跡	111	11-C-0136	集落跡	中世
6	保津環濠遺跡	38	11-C-0094	環濠集落	中世～現代
7	富本遺跡	33	11-C-0028	集落跡	弥生、古墳、飛鳥、奈良、平安
8	羽子田遺跡	39	11-C-0035	集落跡、墓地、農耕地	弥生中、後、古墳前～平安、中世、江戸
9	十六面・薬王寺遺跡	73	11-C-0032	墓地、集落跡、水田	弥生、古墳後～鎌倉
10	保津氏居館推定地	74	11-C-0123	居館跡	中世
11	薬王寺推定地	75	11-C-0124	寺院跡	中世～近世
12	薬王寺東遺跡	76	11-C-0041	遺物散布地	古墳後～平安
13	西竹田遺跡	69	11-C-0030	集落跡	平安
14	黒田遺跡（法楽寺跡）	28	11-A-0083	集落跡、寺院	弥生中、後、古墳前、奈良～室町、近世
15	八尾九原遺跡	26	11-A-0038	集落跡	弥生中、古墳後～奈良
16	唐古・鍵遺跡	7	11-A-0066	集落跡、墓地	縄文晩～古墳後
17	唐古氏居館跡推定地	9	11-A-0100	中世居館、寺院	中世
18	唐古東氏居館跡推定地	10	11-A-0101	居館跡	中世
19	唐古南氏居館跡推定地	11	11-A-0089	居館跡	中世
20	小阪里中遺跡	22	11-C-0099	墓地？、集落跡？、屋敷跡、寺院	弥生、中世～近世
21	小阪安田前遺跡	113	11-C-0137	集落跡	中世
22	鏡作神社遺跡	41	11-C-0117	神社、神宮寺	奈良
23	阪手北遺跡	109	11-C-0148	環濠集落	奈良、中世、近世
24	平野氏陣屋跡	42	11-C-0095	寺院、居館、町屋、陣屋	弥生～鎌倉、室町後～江戸末
25	寺内町遺跡	43	11-C-0105	寺院、神社、町屋	中世、近世
26	阪手仁王前遺跡	47	11-C-0119	中世寺院？	中世
27	阪手遺跡	51	11-C-0074	農耕地、遺物散布地	弥生後、中世
28	薬王寺南遺跡	77	11-C-0042	遺物散布地	弥生～平安
29	矢部遺跡	83	11-C-0069	墓地群、集落跡	弥生～近世
30	宮森遺跡	87	11-C-0047	遺物散布地	古墳後～鎌倉
31	秦楽寺遺跡（秦楽寺城跡）	89	11-C-0104	寺院、居館跡	弥生～中世、中世～近世
32	日光寺推定地	100	11-C-0126	寺院	中世
33	千代遺跡（勝楽寺跡）	101	11-C-0062	寺院、遺物散布地	古墳後～室町
34	秦庄遺跡	88	11-C-0125	集落跡	縄文後、古墳中～後
35	多遺跡	90	11-C-0049	集落跡、水田跡	弥生～中世
36	矢部南遺跡	86	11-C-0046	墓地	弥生～鎌倉
37	佐味遺跡	82	11-C-0044	遺物散布地	弥生～中世
38	多新堂遺跡	93	11-C-0068	遺物散布地、中世寺院？	弥生、奈良～中世
39	笹鉢山古墳群	27	11-A-0074他	古墳群	古墳
40	石見遺跡	—	11-A-0040	古墳	古墳後
41	唐古・鍵古墳群	8	11-A-0105他	古墳群	古墳
42	小阪里中古墳群	23	11-C-0054他	古墳群	古墳
43	羽子田古墳群	40	11-C-0036他	古墳群	古墳
44	団栗山古墳	85	11-C-0071	古墳	古墳後
45	黒田大塚古墳	29	11-A-0071	古墳	古墳後
46	今里の浜遺跡	14	11-A-0102	港跡	近世

古墳時代前期末には纏向遺跡が衰退し、大和古墳群も大王墓クラスのものがみられなくなり、盆地北部、そして河内地域に王墓が移動する。その一方で、盆地低地部の川西町で全長200mの島の山古墳が築造される。この大規模古墳の築造と前後して、羽子田遺跡の集落が廃絶して墓域となり、弥生時代の拠点集落の系統を引く唐古・鍵遺跡や平等坊・岩室遺跡、坪井・大福遺跡などでも集落がほぼ途絶する形となるようであるが、多遺跡では引き続き集落が継続する。

古墳時代中期～後期には、唐古・鍵遺跡や羽子田遺跡などで小規模方墳が多数築造されて古墳群を形成する。この段階のまとまった集落としては保津・宮古遺跡、十六面・薬王寺遺跡、多遺跡及び秦庄遺跡がある。

古代の田原本町域は、盆地南部の飛鳥・藤原京、盆地北部の平城京のちょうど中間に位置してやや遺跡数は減少する。ただし、盆地を縦断する主要交通路である下ツ道、中ツ道が町の中央と東端を縦断し、さらに斑鳩と飛鳥を結んだとされる筋違道も縦断しており、交通の要衝としていくつかの官衛的施設が設置されていたようである。近年その存在が明らかとなった保津・阪手道と筋違道の交差点付近には式下郡衛が、保津・阪手道と下ツ道の交差点付近には迎賓施設である「阿斗河辺館」がそれぞれ置かれていた可能性が考えられている。遺跡としては保津・宮古遺跡が式下郡衛の候補地であり、阪手北遺跡が阿斗河辺館に何らかの関係がある遺跡と考えられている。

古代末期には、興福寺雑役免庄が奈良盆地全体に展開する。田原本町域では、北東部の糸井北庄及び竹田北庄・田中庄、北部の池辺庄、中央部の中蘭庄、南東部の八条北庄、中央南の東大垣庄などがある。保津・宮古遺跡周辺では、現宮古集落付近が池辺庄の分布域であり、現保津集落及びその東には中蘭庄及び太庄が拡がる。ただし、遺跡西部及び薬王寺・十六面・西竹田などの地域には興福寺雑役免庄の拡がり希薄で、由緒ある倭屯倉の分布地であったことを反映している可能性がある。

平安時代末期以降、荘園領主の一部は在地豪族化していったようである。中世の田原本町域では、在地有力者は大和の主導権を巡って相争った十市・筒井・箸尾・越智の4氏のいずれかに取り込まれることとなった。大和では、南北朝から戦国時代までの長期に亘って争乱の時代が続いたため、各集落は濠や土塁で防御する「環濠集落」の形態をとることが多かったようである。法貴寺遺跡や十六面・薬王寺遺跡で検出された中世の屋敷跡はいずれも濠でかこまれた環濠集落の形態であり、文献史料でも確認できる「秦楽寺城」や「金剛寺城」などはその濠が発掘調査で確認されている。

近世になると、田原本町の大半は交替寄合衆平野氏五千石の領地となった。現町役場付近に陣屋がおかれ、明治初期には1万石に石高直しされて田原本藩が成立した。しかし、ごく短期間で藩籍奉還・廃藩置県により消滅した。

### 3. 保津・宮古遺跡の学史と既往の調査

#### (1) 弥生集落としての「保津遺跡」から複合遺跡「保津・宮古遺跡」へ

保津・宮古遺跡は、はじめ保津遺跡という名称で呼ばれていた。保津遺跡が初めて学界に紹介されたのは、大正13（1924）年の勾玉・管玉の資料紹介にさかのぼることができる<sup>1)</sup>。この時紹介された硬玉製勾玉・碧玉製管玉は所属時期が明らかではないが、弥生時代のものである可能性も考えられる。

昭和37（1962）年には、小島俊次氏により弥生時代前期・中期・古墳時代前期の土器・石器の実測図が『平野村史』に掲載され、弥生時代後期のタタキ目のある土器の存在も報告されている<sup>2)</sup>。この時点では遺跡が大字宮古にも広がっていることが認識されていたが、「保津の地名で代表される遺跡」として依然として保津遺跡の名称が用いられていた。

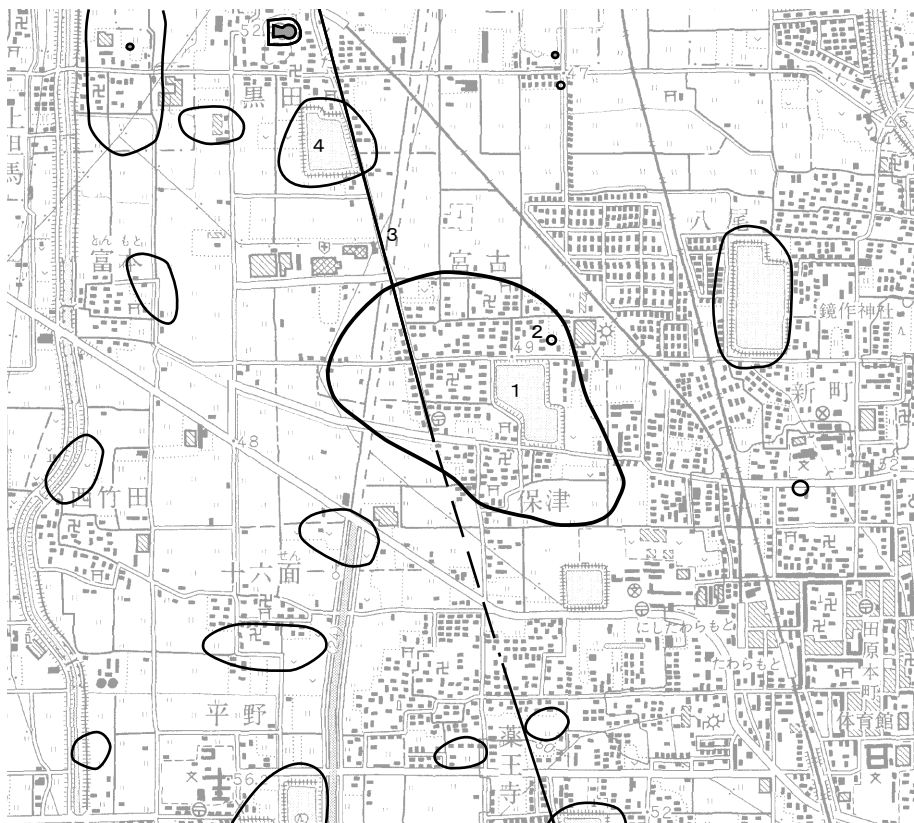
また、同じ小島氏の『奈良県の考古学』では弥生時代の遺跡として保津遺跡が紹介された<sup>3)</sup>。弥生時代前期から後期までの土器・石器が出土することが示されたほか、保津集落の北東部に広がり、宮古池の南端を北限とするという範囲認識も示されており、これは現時点での弥生前期集落範囲の認識と合致する。

これらの報告を通じて、保津遺跡が弥生時代を通じて存続する拠点的な集落と理解されるようになる。1970年代に著された石野博信・寺澤薫両氏の大和弥生集落に関する総合的な論考の中では、保津遺跡に関する情報は前述書が出典となっていたとみられる。石野氏は大和の弥生時代を論じる中で、地域開発の拠点となった奈良盆地の6つの「歴代遺跡」（「その地域に人間が定住して以降、絶えることなく構造物をつくって使用しつづけている場所」）のうちの1つとして保津遺跡を挙げている<sup>4)</sup>。また、寺澤氏は、保津遺跡を寺川デルタ地域の「母集落」（「基礎地域の核」）であり、分村をはじめとする地域の「人間行動の拠点」の役割を社会的・経済的にはたしていた集落と位置づけている<sup>5)</sup>。なお、1970年頃から作成された『奈良県遺跡地図』で保津遺跡の範囲が明示された<sup>6)</sup>。

1980年代になって、遺跡が大字宮古にも広がっていることから保津・宮古遺跡という名称が使われるようになった。寺澤薫氏などが編集した冊子『唐古・鍵遺跡－埋もれた2,000年の遺産－』では、「宮古・保津遺跡」の名が暫定的に使用されたが<sup>7)</sup>、同じ寺澤薫氏の『日本の古代遺跡5 奈良中部』では「保津・宮古遺跡」とされた<sup>8)</sup>。これ以降「保津・宮古遺跡」の名が確定し、1988年に初めて発掘調査がおこなわれた時にもこの名が使われた（第1次調査：本報告書）。1989年の第3次調査によって集落範囲が大きく北西に広がる形で拡張され、一時は田原本町屈指の遺跡占有面積を誇るようになった。その範囲は、1991年の町広報などに遺跡地図が掲載されたことにより、周知された<sup>9)</sup>。

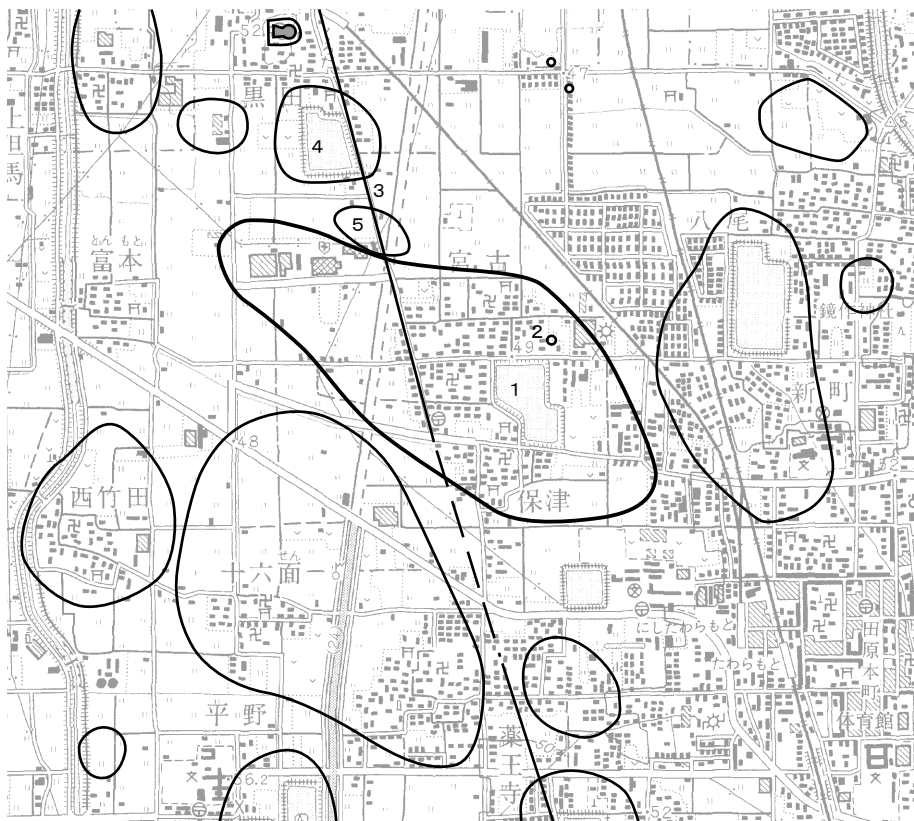
1990年代になると、遺跡西部を縦断する京奈和自動車道の工事に先立つ発掘調査が大規模におこなわれ、さらに周辺道路の拡幅や店舗・共同住宅などの新規開発が頻発するようになった。その結果、保津・宮古遺跡の本体部分と、第3・4次調査地点周辺との間に遺跡の空白部





1. 遺跡範囲の変遷1 (奈良県遺跡地図 1971年発行)

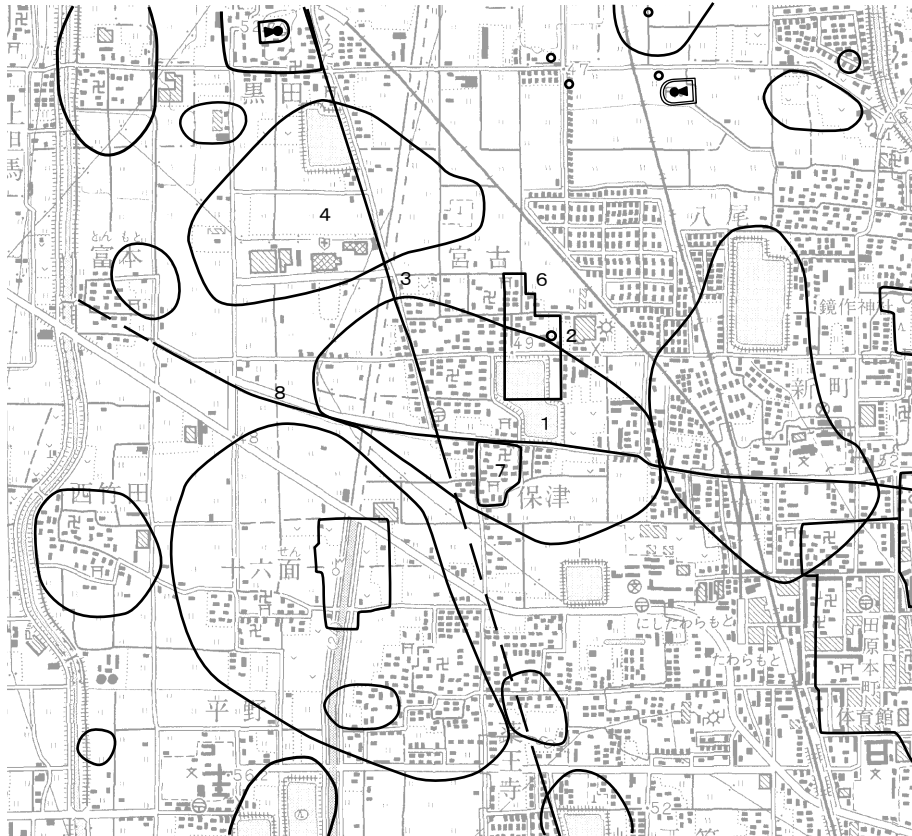
	遺跡名
1	保津・宮古遺跡
2	(泥塔出土地)
3	筋違道
4	遺物散布地



2. 遺跡範囲の変遷2 (田原本町埋蔵文化財調査年報1 1990年発行)

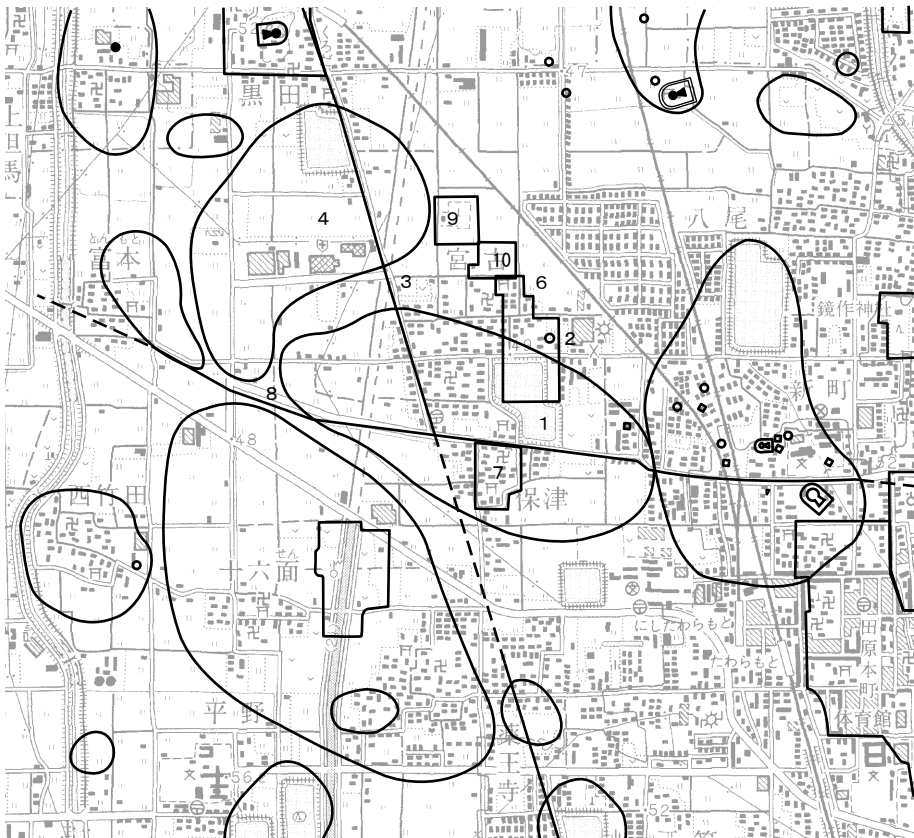
	遺跡名
1	保津・宮古遺跡
2	(泥塔出土地)
3	筋違道
4	遺物散布地
5	遺物散布地

第3図 保津・宮古遺跡の範囲変遷図1



1. 遺跡範囲の変遷3 (奈良県遺跡地図 1999年発行)

	遺跡名
1	保津・宮古遺跡
2	(泥塔出土地)
3	筋違道
4	宮古北遺跡
6	常楽寺推定地
7	保津環濠遺跡
8	保津・阪手道



2. 遺跡範囲の変遷4 (平成25年1月現在)

	遺跡名
1	保津・宮古遺跡
2	(泥塔出土地)
3	筋違道
4	宮古北遺跡
6	常楽寺推定地
7	保津環濠遺跡
8	保津・阪手道
9	宮古前遺跡
10	宮古石橋遺跡

第4図 保津・宮古遺跡の範囲変遷図2

分があることが判明し、第3・4次調査地周辺の遺構群と旧来の保津・宮古遺跡とは別遺跡として扱うことが適当と考えられるに至った。このため、90年代後半の奈良県遺跡地図の再編集作業時に、第3・4次調査地周辺と黒田池周辺の遺物散布地を統合して「宮古北遺跡」という新規名称が与えられるに至った。この時の遺跡地図修正で「常楽寺推定地」「保津環濠遺跡」も保津・宮古遺跡と重複する別遺跡として扱うこととなった。その後、宮古北遺跡東部の中世屋敷跡とみられる遺跡を「宮古前遺跡」として分離し、常楽寺推定地第5次調査で検出した中世屋敷跡とみられる遺跡を「宮古石橋遺跡」として新規確認するなどの変更がおこなわれて現在に至っている。現在、保津・宮古遺跡は第41次調査まで、宮古北遺跡は第16次調査まで、常楽寺推定地は第8次調査まで実施している。

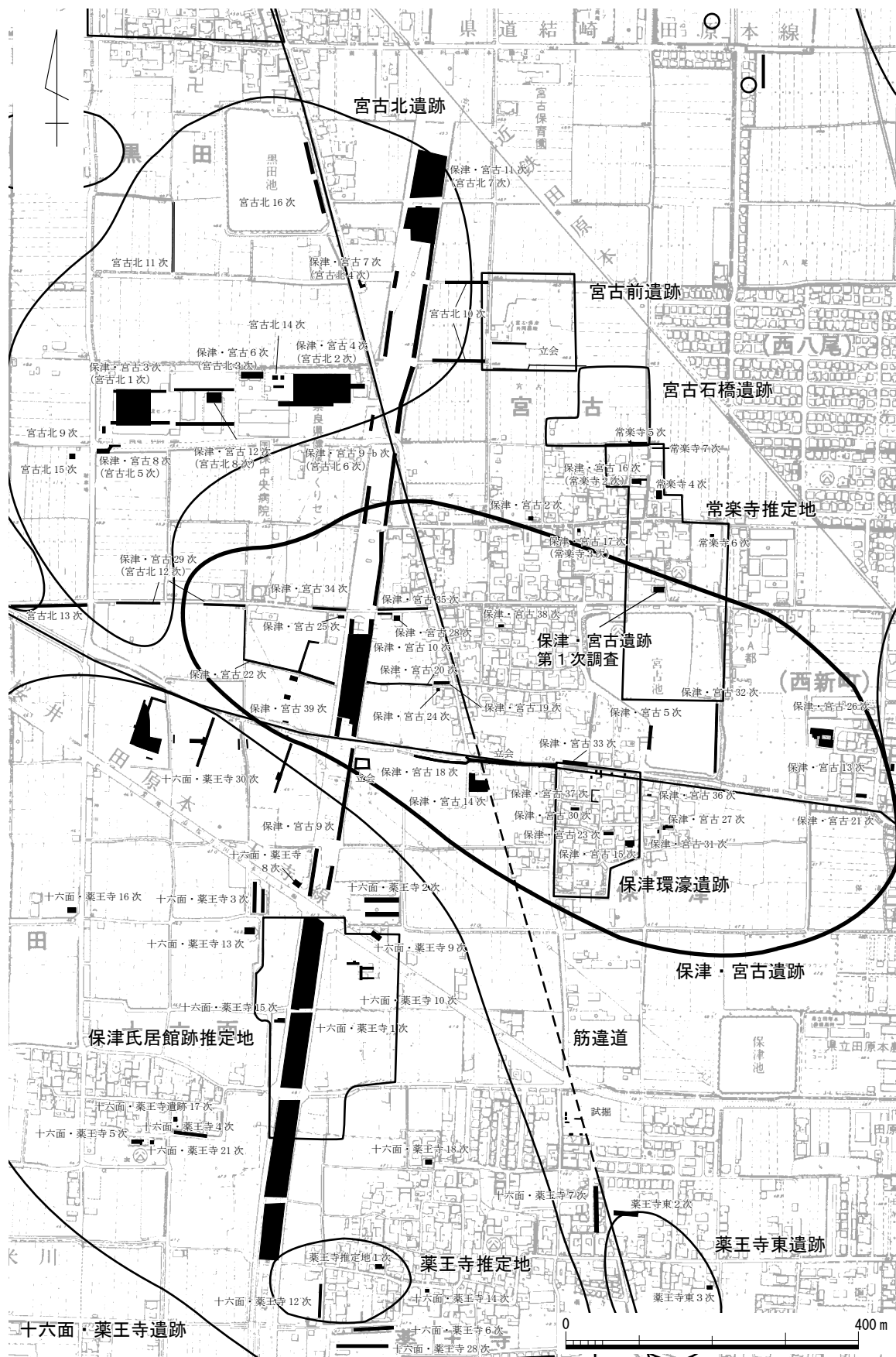
## (2) 既往の調査からみた保津・宮古遺跡とその周辺の遺跡

宮古北遺跡7次調査（保津・宮古遺跡第11次調査）では、縄文時代早期頃の有舌尖頭器が出土し、付近が盆地低地部にあつて早くから狩猟などの生活圏となった可能性がある。また、第14・20次調査などで縄文時代後期の遺構・遺物を検出しており、盆地低地部では最も早くから人が集落を営んだ場所の一つと考えられる。

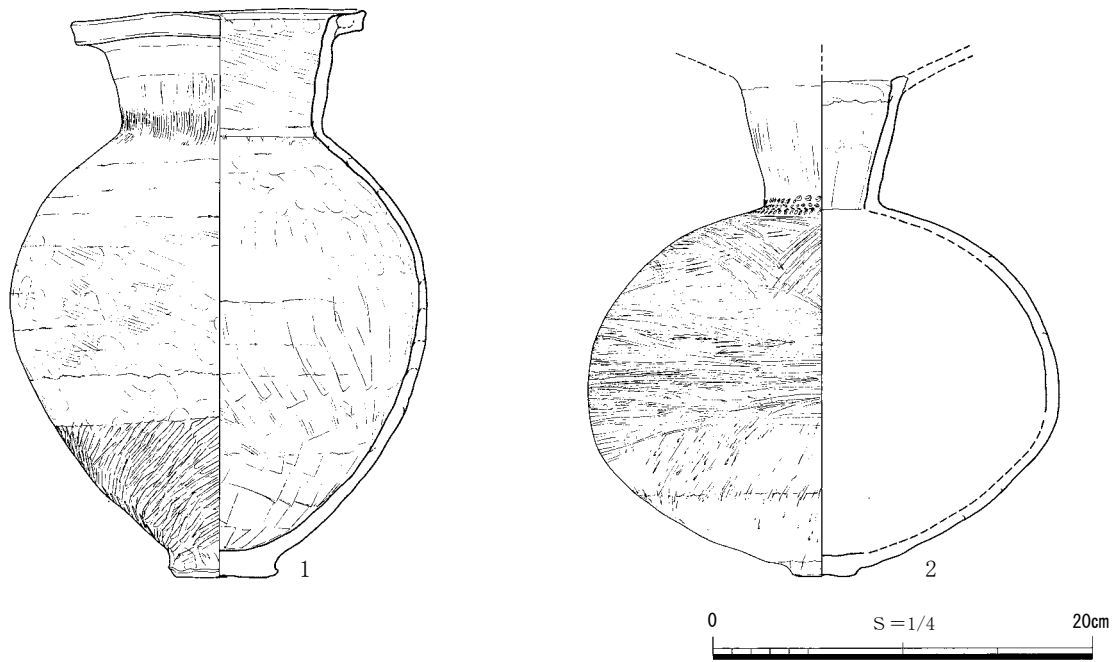
保津・宮古遺跡では縄文時代晩期の土器片も出土しているが、ごく少量であり、縄文時代晩期の集落は短期間のうちに廃絶したようである。この地で本格的な定住が始まるのは弥生時代前期からとなる。現保津集落付近では、弥生時代前期前半の大和第I-1-b様式には集落が成立していたことが知られる。前期土器の分布状況から、遺跡南東部に弥生時代前期集落が広がっていたと考えられる。弥生時代中期前半の状況は明確でないが、中期後半には遺跡北東部の常楽寺推定地、北西隣接地の宮古北遺跡などで遺構・遺物を確認している。また、小規模ながら現保津集落とその周辺でも遺構・遺物を確認している。密度は低いとみられるが、散漫な形で居住区が点在していたようである。

弥生時代後期～庄内期にかけては、遺跡南西部から宮古北遺跡にかけてやや直線的な溝が少なくとも延長500m以上にわたって掘削されていたとみられる。南東から北西に向かって第10・14・18・22次調査で同一遺構とみられる溝が確認されており、第3次調査（宮古北遺跡第1次調査）でも同一遺構となる可能性がある溝を確認している。灌漑用の水路となる可能性もある。また、常楽寺推定地を中心とする現宮古集落東部でもこの時期の遺構が点在する。特に本報告の第1次調査地点では庄内期の井戸から木製盾が良好な形で出土している。また、明治23年の宮古池拡張工事時にも弥生時代後期と庄内期の土器が出土した。この時の遺物を地元の方が保管されていたが、田原本町に寄贈されているのであわせてここに図示する（第6図）。第6図-1の広口壺は、完形品で縦長の胴部にやや外反する口頸部がつく。口縁端部は面をもつ。胴部下半には右上がりのタタキを施す。大和第VI-2様式頃であろう。2は二重口縁壺であるが、口縁部を欠失する。横長の胴部に外反する頸部がつく。全体はミガキ調整を施す。頸胴部界はヘラによる刺突文を3帯めぐらす。庄内期頃の所産であろうか。

古墳時代前期には、庄内期に引き続き常楽寺推定地付近に集落域がみられるほか、宮古北遺



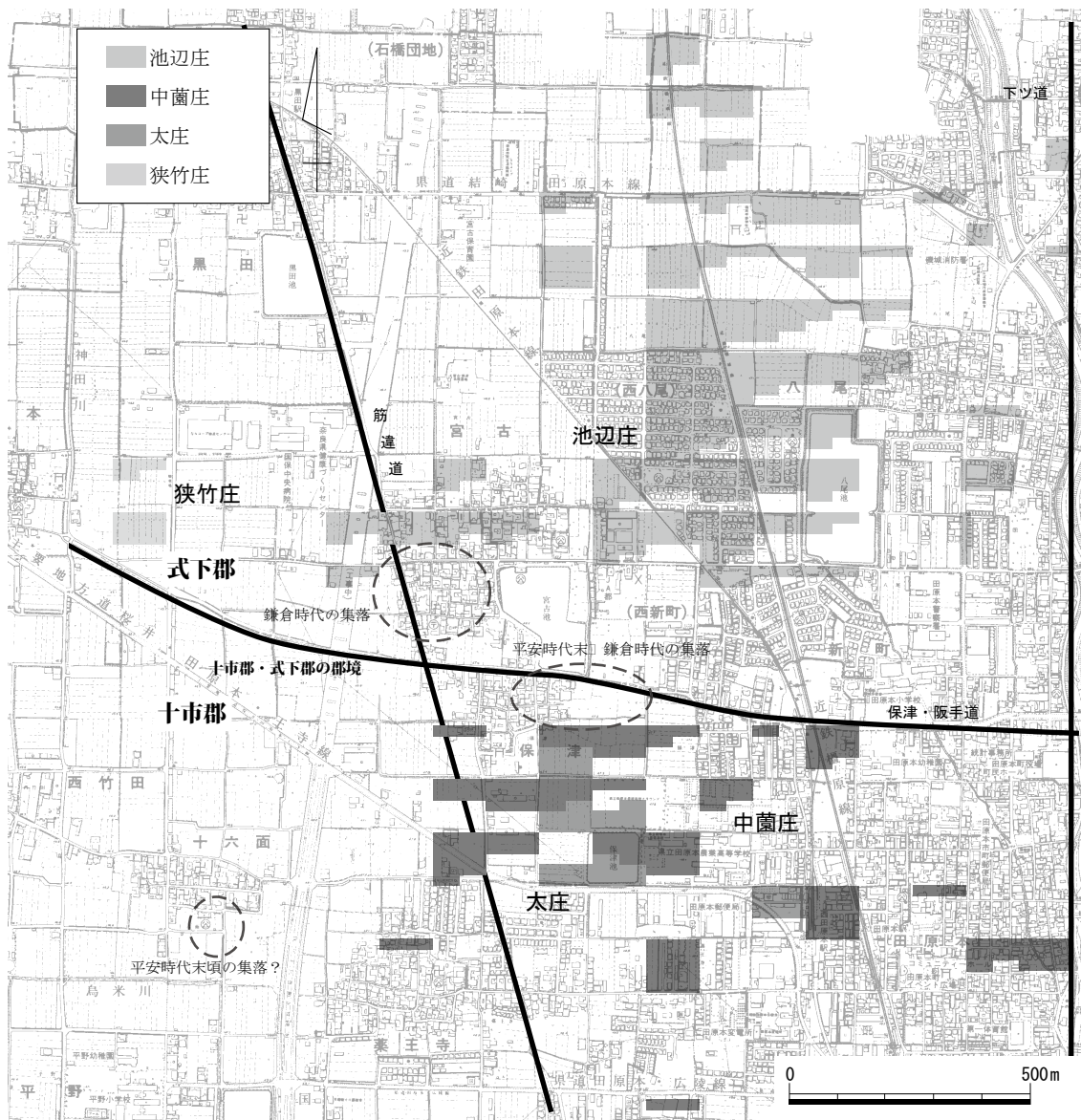
第5図 既住の調査位置図 (S=1/8,000)



第6図 宮古池出土土器実測図

跡で方形区画となる可能性がある集落が確認されている。また、第10次調査地周辺に布留1～2式頃の集落が形成されるようである。

古墳時代前期末～中期には、第22次調査で溝から滑石製模造品が多数出土しているほか、そ



第7図 興福寺雑役免坪付帳（1070年）にみられる荘園の分布図（S=1/15,000）

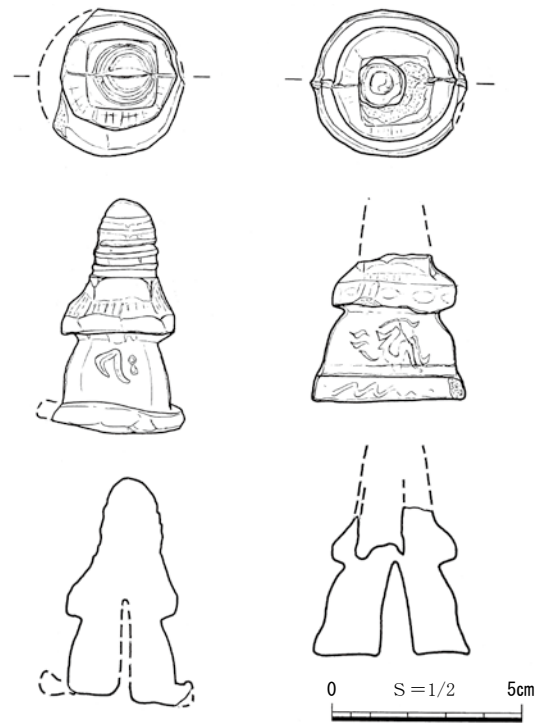
の南西200mで実施した十六面・薬王寺遺跡第30次調査で滑石製品の製作をおこなった小規模な集落を確認している。また、宮古北遺跡東部では布留3式頃を中心とする集落遺構がみられる。保津・宮古遺跡南部の第14次調査では中期の方墳1基を検出しているが、この調査区以東では古墳時代中・後期の集落遺構はみられない。なお、東側に隣接する羽子田遺跡は方墳を中心とする墓域となり、「羽子田古墳群」が形成される。

古墳時代後期は、第10・11・14・22次調査地などで土坑を検出している。基本的には中期集落を踏襲しているものと考えられる。

古代には、飛鳥と斑鳩を結ぶ北北西－南南東方向の筋違道、西北西－東南東方向の保津・阪手道が交わる交通の要衝として、保津・宮古遺跡周辺は重要な位置を占めたものとみられる。第18次調査では円面硯や人面墨画土器などが出土しているほか、保津・宮古遺跡西部から宮古



写真2 宝篋印塔（泥塔出土地・移設後）



第8図 泥塔実測図

北遺跡南東部にかけて飛鳥～奈良時代の比較的規模の大きい建物跡が多数みついている。また、河跡1条を隔てて南西に隣接する十六面・薬王寺遺跡北西部でも同時期の建物群を検出している。この付近に磯城下郡衙があった可能性もあり、検討を要する。

平安時代後期には、遺跡各所で井戸が検出されるようになる。特に、現保津集落周辺では数基の井戸を検出している。鎌倉時代に至ってもこの状況は続く。また、未調査ではあるが、保津集落の東側に一段高い畑地があり、中世の屋敷地跡である可能性が考えられる。一方、現宮古集落周辺の調査では、筋違道周辺の第19次調査や第38次調査などで鎌倉時代頃の遺構を検出しているほか、北東部の常楽寺推定地第5次調査でも屋敷地を囲むとみられる鎌倉時代の溝を検出している。いくつかの屋敷地の単位が点在している可能性も考えられるが、ごく一部の調査しかおこなわれていないため実態は明らかでない。

なお、遺跡を横断する保津・阪手道は式下郡と十市郡との郡境となっており、現大字宮古は旧式下郡、現大字保津は旧十市郡に属していた。『興福寺雑役免坪付帳』（1070年）の記録を模式的に地図上に示すと、保津・阪手道を境として現宮古集落の北側から大字八尾にかけて池辺庄の田地が拡がり、中藪庄は保津・阪手道の南側に拡がっていることが判る（第7図）。

一方、現宮古池とその北側には「寺西」「寺東」「寺垣内」などの小字名が残り、「鏡作の西」にあったとされる「常楽寺」があったと推定される。現在、平安時代の作である薬師如来坐像（重要文化財）が薬師堂に安置されており、薬師堂の場所が本来伽藍の中心であったと考えられる。寺院がいつ頃廃絶したかは判然としないが、かつては広大な寺域を誇っていた可能性が考えられる。保津・宮古遺跡第16次調査（常楽寺推定地第2次調査）では、室町時代の溝から





た可能性も考えられており、現集落の景観は近世以降のものとなるようである。現保津環濠集落内の調査でも、室町期の集落遺構がやや少ないのに対し、近世以降の井戸・土坑及び柱穴等は多数確認されている。元禄期の絵図に保津環濠集落が現在とほぼ変わらない形で描かれており、近世初期には現状の環濠集落ができあがっていたものと考えられる。

## 註

- 1) 榎本亀生 1924「大和磯城郡平野村の勾玉出土の遺跡」『古代文化研究』第1輯
- 2) 小島俊次 1962「古代・中世」『平野村史』平野村史編纂委員会
- 3) 小島俊次 1965『奈良県の考古学』吉川弘文館
- 4) 石野博信 1973「大和の弥生時代」『橿原考古学研究所紀要』第二冊
- 5) 寺沢薫 1979「大和弥生社会の展開とその特質－初期ヤマト政権成立史の再検討－」『橿原考古学研究所論集』第四
- 6) 奈良県教育委員会 1971『奈良県遺跡地図』第2分冊
- 7) 田原本町教育委員会 1981『埋もれた2000年の遺産 唐古・鍵遺跡』
- 8) 寺沢薫 1983「国中の遺跡」『日本の古代遺跡5 奈良中部』保育社
- 9) 田原本町 1991『広報たわらもと』8月号
- 10) 秋山日出雄編 1985『大和国古墳墓取調書』財団法人 由良大和古代文化研究協会
- 11) 奈良県立考古博物館 1975『大和考古資料目録』第3集
- 12) 松本俊吉 1939「宮古池の事ども」『磯城』第2巻第4号

## 参考文献

- 1) 肥後和夫 1938「日本発見の泥塔について」『考古学』第9巻第4号
- 2) 堀内義隆 1983「環濠集落について－田原本町を中心として－」『田原本の歴史』第1号 田原本町史編さん室
- 3) 宮本誠 1984「田原本の溜池」『田原本の歴史』第3号 田原本町史編さん室
- 4) 田原本町史編さん室 1986「古寺再現」『田原本の歴史』第5号 田原本町史編さん室
- 5) 池田保信他 1995「4. 奈良県の主要弥生遺跡調査概要Ⅱ」『大和の弥生遺跡基礎資料Ⅰ』大和弥生文化の会
- 6) 清水琢哉 1997「保津・宮古遺跡の変遷について」『みずほ』23号 大和弥生文化の会
- 7) 河森一浩・藤田三郎 2006『太子道の巻を掘る』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol.3
- 8) 清水琢哉・西岡成晃・藤田三郎 2010『道の考古学』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol.11
- 9) 清水琢哉 2012「田原本町における古道関連の遺構について」『田原本町文化財調査年報20 2010年度』田原本町教育委員会

第2表 保津・宮古遺跡及び周辺遺跡の既往の調査一覧

次数	調査地点	調査期間	調査の原因	調査面積 (㎡)	調査機関	担当者	主な遺構	備考	文献
1次	宮古257-4、 258-4	1988.12.9 ～ 12.17	農業用倉庫の 建築	38	田原本町	藤田三郎	古墳時代前期井戸、 近世井戸	本報告書 常楽寺推定地第1 次調査も兼ねる 庄内期の盾出土	1
2次	宮古320-3	1988.5.8	農業用倉庫の 建築	22.5	田原本町	藤田三郎	顕著な遺構なし		2
3次	宮古395-1、 404-6	1989.7.4 ～ 9.27	物流センター 建設	2,300	榎考研 田原本町	今尾文昭 藤田三郎	弥生中期河跡、布留 期溝（環濠）、古代 建物跡	遺跡名変更： 宮古北遺跡第1次	3・4

4次	宮古404-1、404-6	1989.10.2 ～ 12.22	健康づくりセンター建設	4,200	榎考研	関川尚功	古墳時代前期集落、飛鳥～奈良時代建物群	遺跡名変更：宮古北遺跡第2次	5
5次	宮古61-1他	1990.12.3 ～ 12.4	道路建設	47	田原本町	藤田三郎	顕著な遺構なし	宮古池築造による削平？	6
6次	宮古404-1	1991.5.13 ～ 6.17	病院建設	315	榎考研	今尾文昭	飛鳥～奈良時代建物群	遺跡名変更：宮古北遺跡第3次	7
7次	宮古543-2、544-1	1992.7.3 ～ 7.16	水道送水管の設置	61	榎考研	仲富美子		遺跡名変更：宮古北遺跡第4次	8
8次	宮古375-1他	1992.9.28 ～ 12.2	道路拡幅工事	195	田原本町	藤田三郎	布留期溝（環濠）	遺跡名変更：宮古北遺跡第5次	9
9次	保津字保津田～宮古字六之坪	1993.10.26 ～ 94.3.7	道路建設	5,500	榎考研	入倉徳裕		試掘調査：本調査として10・11次 宮古北6次も兼ねる	10・11
10次	保津字西吉田・字坊之北浦	1994.5.9 ～ 10.18	道路建設	3,384	榎考研	橋本裕行	弥生時代後期集落、古代建物群		11・12
11次	宮古字六ヶ坪・字外ヶ坪他	1994.8.24 ～ 12.22	道路建設	4,351	榎考研	橋本裕行	古墳時代前期集落、古代建物跡	遺跡名変更：宮古北遺跡第7次	11・12
12次	宮古404-6	1995.2.18 ～ 3.15	倉庫・事務所の建築	240	田原本町	藤田三郎	古墳時代後期溝・柱穴他	遺跡名変更：宮古北遺跡第8次	13
13次	新町190-22	1995.2.18 ～ 3.15	個人住宅の建築	190	田原本町	清水琢哉 藤田三郎	弥生末方形周溝墓、古墳後期方墳	羽子田11号墳検出	14
14次	保津166-4他	1995.10.17 ～ 11.21	個人住宅の建築	423	田原本町	藤田三郎 清水琢哉	縄文時代後期土坑、弥生時代後期溝、古墳時代初頭土坑、古墳時代後期方墳、古代溝、中世井戸	筋違道側溝検出 保津岩田古墳より家形埴輪等出土	15
15次	保津124他	1996.2.8 ～ 2.28	個人住宅の建築	124	田原本町	清水琢哉	弥生前期土坑、平安末～鎌倉期土坑、近世井戸・土坑	保津環濠集落内部の調査 近世井戸に隣接する導水遺構	16
16次	宮古291	1996.10.16 ～ 11.11	共同住宅の建築	74	田原本町	清水琢哉	室町期溝、近世溝	常楽寺推定地第2次調査	17
17次	宮古246	1996.10.21 ～ 10.28	個人住宅の建築	24	田原本町	豆谷和之	中世池状遺構	常楽寺推定地第3次調査	18
18次	保津168 北側隣接地	1997.3.3 ～ 3.22	道路建設	176	田原本町	清水琢哉	弥生後期溝、古代溝	保津・阪手道側溝検出、人面墨画土器・円面硯出土	19
19次	宮古131-1他	1997.10.13 ～ 10.24	共同住宅の建築	66	田原本町	清水琢哉	古代頃溝、鎌倉期溝、室町期井戸	古代頃の溝は筋違道西側溝か	20
20次	宮古131-14 南側道路他	1997.12.9 ～ 1.23	水路改修	160	田原本町	清水琢哉	縄文後期落ち込み、弥生後期溝、古墳時代～中世土坑	縄文後期の土器	21
21次	新町189-5	1998.7.1 ～ 7.3	個人住宅の建築	27	田原本町	豆谷和之	時期不明河跡1	保津・阪手道関連遺構？	22
22次	宮古145他	1999.1.11 ～ 3.7	用排水路改修	527	田原本町	清水琢哉	弥生後期集落、古墳時代中・後期集落、古代建物群	滑石製模造品多数出土	23
23次	保津128	1999.2.1 ～ 2.6	個人住宅の建築	25	田原本町	清水琢哉	弥生中期土坑・溝、中世土坑・溝、近世建物跡・土坑	弥生中期土器棺？	24
24次	宮古22-2	1999.4.22 ～ 4.24	個人住宅の建築	10	田原本町	清水琢哉	鎌倉時代頃井戸1		25
25次	宮古136-4	1999.8.2 ～ 8.4	農業用倉庫の建築	25	田原本町	清水琢哉	奈良時代溝1		26
26次	新町190-21	1999.10.29 ～ 11.26	分譲住宅の建築	290	田原本町	清水琢哉	弥生後期土坑・方形周溝墓、古墳中・後期埴輪棺・方墳	方墳は羽子田11号墳（保津・宮古第13次調査）	27
27次	保津96	2001.3.12 ～ 3.23	個人住宅の建築	65	田原本町	清水琢哉	弥生中期溝、平安末～鎌倉時代井戸3		28
28次	宮古136-2	2001.4.5 ～ 4.17	個人住宅の建築	113	田原本町	清水琢哉	中世土坑、近世土坑（野井戸）		29
29次	宮古151-1他	2002.1.10 ～ 1.22	道路の建設	231	田原本町	藤田三郎 豆谷和之	弥生時代後期土坑・溝、古墳時代後期溝	第2トレンチは宮古北遺跡第12次調査とする	30
30次	保津139-1	2003.6.7 ～ 6.12	個人住宅の建築	27	田原本町	清水琢哉	鎌倉時代土坑・溝、室町時代井戸		31
31次	保津123	2004.1.22 ～ 1.27	個人住宅の建築	11	田原本町	清水琢哉	弥生前期土坑、鎌倉時代土坑、近世溝		32

32次	宮古61-1	2004.12.6 ～ 12.20	池堤防改修	270	榎考研	相見梓			33
33次	宮古47-3	2004.12.7 ～ 12.10	道路拡幅工事	96	田原本町	清水琢哉	縄文？土坑1		34
34次	宮古地内	2006.4.4 ～ 5.16	道路拡幅工事	214.4	榎考研	岡田・重見・松浦	弥生・古墳～古代		35
35次	宮古地内	2006.10.6 ～ 10.17	道路拡幅工事	207	榎考研	岡田・重見・松浦	弥生・中世		35
36次	保津120	2007.5.15 ～ 5.18	個人住宅の建築	12	田原本町	奥谷知日朗	中世以前柱穴		36
37次	保津135-2	2010.2.8 ～ 2.12	農業用倉庫の建築	37	田原本町	奥谷知日朗	近世末頃溝、近世後期集落		37
38次	宮古120、121	2010.6.21 ～ 7.1	個人住宅の建築	34	田原本町	清水琢哉	鎌倉時代大溝、室町時代小溝群他		38
39次	宮古6-1	2011.10.17 ～ 11.2	賃貸住宅の建築	109	田原本町	奥谷知日朗	古墳～古代土坑・柱穴、中世土坑他		39
40次	宮古151-1	2012.7.9 ～ 7.11	公共下水道工事	13	田原本町	奥谷知日朗	弥生時代落ち込み、古墳時代溝、古代？溝、中世溝・小溝		
41次	宮古136-4、北側道路	2013.1.15	公共下水道工事	6	田原本町	奥谷知日朗 奥本英里	古代以前小溝・柱穴、中世小溝		

次数	調査地点	調査期間	調査の原因	調査面積 (㎡)	調査機関	担当者	主な遺構	備考	文献
宮古北9次	宮古395-1	1999.5.25 ～ 6.1	地下重油タンク設置	56	田原本町	豆谷和之	古墳時代前期溝		40
宮古北10次	宮古529-1 南側水路	1999.12.1 ～ 12.16	農業用水路の建設	230	田原本町	清水琢哉	古代小溝1、近世野井戸		41
宮古北11次	黒田195-1 西側道路	2000.11.7 ～ 12.1	農業用水路の建設	245	田原本町	清水琢哉	中世溝	坪境の溝か足跡多数検出	42
宮古北12次	宮古151-1他	2002.1.10 ～ 1.22	道路の建設	231	田原本町	藤田三郎 豆谷和之	古墳時代後期溝	保津・宮古29次の第2トレンチ	30
宮古北13次	宮古172-1 北側道路	2002.10.18 ～ 10.31	道路拡張工事	180	田原本町	豆谷和之 奥谷知日朗	弥生前期土坑、布留期土坑・溝		43
宮古北14次	保津404-1	2004.7.12 ～ 7.26	病棟の増築	171	田原本町	清水琢哉	顕著な遺構なし		44
宮古北15次	宮古377-1	2009.5.18 ～ 6.2	携帯電話無線基地局の建設	68	田原本町	奥谷知日朗	古墳時代前期集落、古代溝		45
宮古北16次	黒田地内	2009.10.13 ～ 10.29	黒田池堤防改修工事	300	榎考研	佐藤麻子	顕著な遺構なし		46

次数	調査地点	調査期間	調査の原因	調査面積 (㎡)	調査機関	担当者	主な遺構	備考	文献
常楽寺4次	宮古288-2、-4	1999.10.25 ～ 10.28	共同住宅の建築	48	田原本町	清水琢哉	顕著な遺構なし		47
常楽寺5次	宮古293-4他	2005.11.21 ～ 12.19	道路建設	143	田原本町	奥谷知日朗	弥生中期井戸、古墳前期井戸、鎌倉期溝、中世～近世大溝		48
常楽寺6次	宮古280-2	2008.4.7 ～ 4.9	個人住宅の建築	7	田原本町	清水琢哉	顕著な遺構なし		49
常楽寺7次	宮古466 南側道路	2011.1.7 ～ 1.17	農業用水路建設	57	榎考研 (田原本町)	水野敏典 奥谷知日朗 大谷博則	顕著な遺構なし		50
常楽寺8次	宮古455-2、457-2	2012.10.25 ～ 10.26	公共下水道工事	7	田原本町	奥谷知日朗	中世～近世大溝		

次数	調査地点	調査期間	調査の原因	調査面積 (㎡)	調査機関	担当者	主な遺構	備考	文献
保津環濠1次	保津157、158	2004.12.14 ～ 12.20	道路拡幅工事	14	田原本町	清水琢哉	中世後期の大溝		51
保津環濠2次	保津132他 北側水路	2011.1.18 ～ 1.20	水路改修	11	田原本町	清水琢哉 大谷博則	近世～近代大溝		52

次数	調査地点	調査期間	調査の原因	調査面積 (㎡)	調査機関	担当者	主な遺構	備考	文献
宮古前 立会	宮古528	2004.1.28 ～ 1.30	道路拡幅工事	77	田原本町	清水・豆谷・ 奥谷	弥生後期土坑、古墳 後期溝、鎌倉時代 溝、室町時代井戸		53
	宮古488他	2004.11.23 ～ 11.24	水路改修	63	田原本町	清水琢哉 奥谷知日朗	中世大溝・柱穴・不 明遺構	遺跡名変更： 宮古前遺跡	54

※1 保津・宮古遺跡は、宮古北遺跡との分離、重複する常楽寺推定地などとの関係などがやや複雑となっている。宮古北遺跡は第9次調査から、常楽寺推定地は第4次調査から遺跡別の調査次数を付与する形となったが、それ以前の調査については保津・宮古遺跡として実施しているものがある。一方、保津環濠遺跡は保津・宮古遺跡に重複する遺跡であるが、環濠部分での調査時のみ独自の遺跡名による次数を付与している。

※2 表中の文献に記載した番号は、後述する調査関連文献一覧に対応するものである。

## 調査関連文献一覧

### 保津・宮古遺跡の発掘調査関連文献

- 1) 藤田三郎 1990「保津・宮古遺跡第1次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報1 1988・1989年度』田原本町教育委員会
- 2) 藤田三郎 1990「保津・宮古遺跡第2次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報1 1988・1989年度』田原本町教育委員会
- 3) 藤田三郎 1990「保津・宮古遺跡第3次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報1 1988・1989年度』田原本町教育委員会
- 4) 今尾文昭・藤田三郎 2003『保津・宮古遺跡第3次発掘調査報告』奈良県文化財調査報告書第100集 奈良県立橿原考古学研究所
- 5) 関川尚功 1990『保津・宮古遺跡第4次発掘調査報告』奈良県文化財調査報告書第59集 奈良県立橿原考古学研究所
- 6) 藤田三郎 1991「保津・宮古遺跡第5次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報2 1990年度』田原本町教育委員会
- 7) 今尾文昭 1992「保津・宮古遺跡第6次発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報1991年』（第一分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 8) 仲富美子 1993「保津・宮古遺跡第7次発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報1992年』（第一分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 9) 藤田三郎 1994「保津・宮古遺跡第8次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報4 1992・1993年度』田原本町教育委員会
- 10) 入倉徳裕 1994「保津・宮古遺跡 —国道24号線橿原バイパス建設に伴う平成5年度試掘調査報告—」『奈良県遺跡調査概報1993年』（第一分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 11) 橋本裕行 1995「保津・宮古遺跡 第9-b次・第10次・第11次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1994年』（第一分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 12) 橋本裕行 2009『保津・宮古遺跡第10・11次調査報告』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第104冊
- 13) 藤田三郎・清水琢哉 1996「保津・宮古遺跡第12次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報5 1994・1995年度』田原本町教育委員会
- 14) 藤田三郎・清水琢哉 1996「保津・宮古遺跡第13次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報5 1994・1995年度』田原本町教育委員会
- 15) 藤田三郎・清水琢哉 1996「保津・宮古遺跡第14次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報5 1994・1995年度』田原本町教育委員会
- 16) 清水琢哉 1996「保津・宮古遺跡第15次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報5 1994・1995年度』田原本町教育委員会
- 17) 清水琢哉 1997「保津・宮古遺跡第16次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報6 1996年度』田原本町教育委員会

- 18) 豆谷和之 1997「保津・宮古遺跡第17次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報6 1996年度』田原本町教育委員会
- 19) 清水琢哉 1997「保津・宮古遺跡第18次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報6 1996年度』田原本町教育委員会
- 20) 清水琢哉 1998「保津・宮古遺跡第19次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報7 1997年度』田原本町教育委員会
- 21) 清水琢哉 1998「保津・宮古遺跡第20次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報7 1997年度』田原本町教育委員会
- 22) 豆谷和之 1999「保津・宮古遺跡第21次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報8 1998年度』田原本町教育委員会
- 23) 清水琢哉 1999「保津・宮古遺跡第22次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報8 1998年度』田原本町教育委員会
- 24) 清水琢哉 1999「保津・宮古遺跡第23次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報8 1998年度』田原本町教育委員会
- 25) 清水琢哉 2000「保津・宮古遺跡第24次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報9 1999年度』田原本町教育委員会
- 26) 清水琢哉 2000「保津・宮古遺跡第25次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報9 1999年度』田原本町教育委員会
- 27) 清水琢哉 2000「保津・宮古遺跡第26次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報9 1999年度』田原本町教育委員会
- 28) 清水琢哉 2001「保津・宮古遺跡第27次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報10 2000年度』田原本町教育委員会
- 29) 清水琢哉 2002「保津・宮古遺跡第28次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報11 2001年度』田原本町教育委員会
- 30) 藤田三郎・豆谷和之 2002「保津・宮古遺跡第29次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報11 2001年度』田原本町教育委員会
- 31) 清水琢哉 2004「保津・宮古遺跡第30次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報13 2003年度』田原本町教育委員会
- 32) 清水琢哉 2004「保津・宮古遺跡第31次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報13 2003年度』田原本町教育委員会
- 33) 相見梓 2005「保津・宮古遺跡第32次調査」『奈良県遺跡調査概報 2004年』（第一分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 34) 清水琢哉 2006「保津・宮古遺跡第33次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報14 2004年度』田原本町教育委員会
- 35) 岡田憲一・松浦憲治・重見泰 2007「保津・宮古遺跡第34・35次調査」『奈良県遺跡調査概報 2006年』（第一分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 36) 奥谷知日期 2009「保津・宮古遺跡第36次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報17 2007年度』田原本町教育委員会
- 37) 奥谷知日期 2011「保津・宮古遺跡第37次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報19 2009年度』田原本町教育委員会
- 38) 清水琢哉 2012「保津・宮古遺跡第38次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報20 2010年度』田原本町教育委員会
- 39) 奥谷知日期 2013「保津・宮古遺跡第39次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報21 2011年度』田原本町教育委員会

#### 隣接遺跡の調査

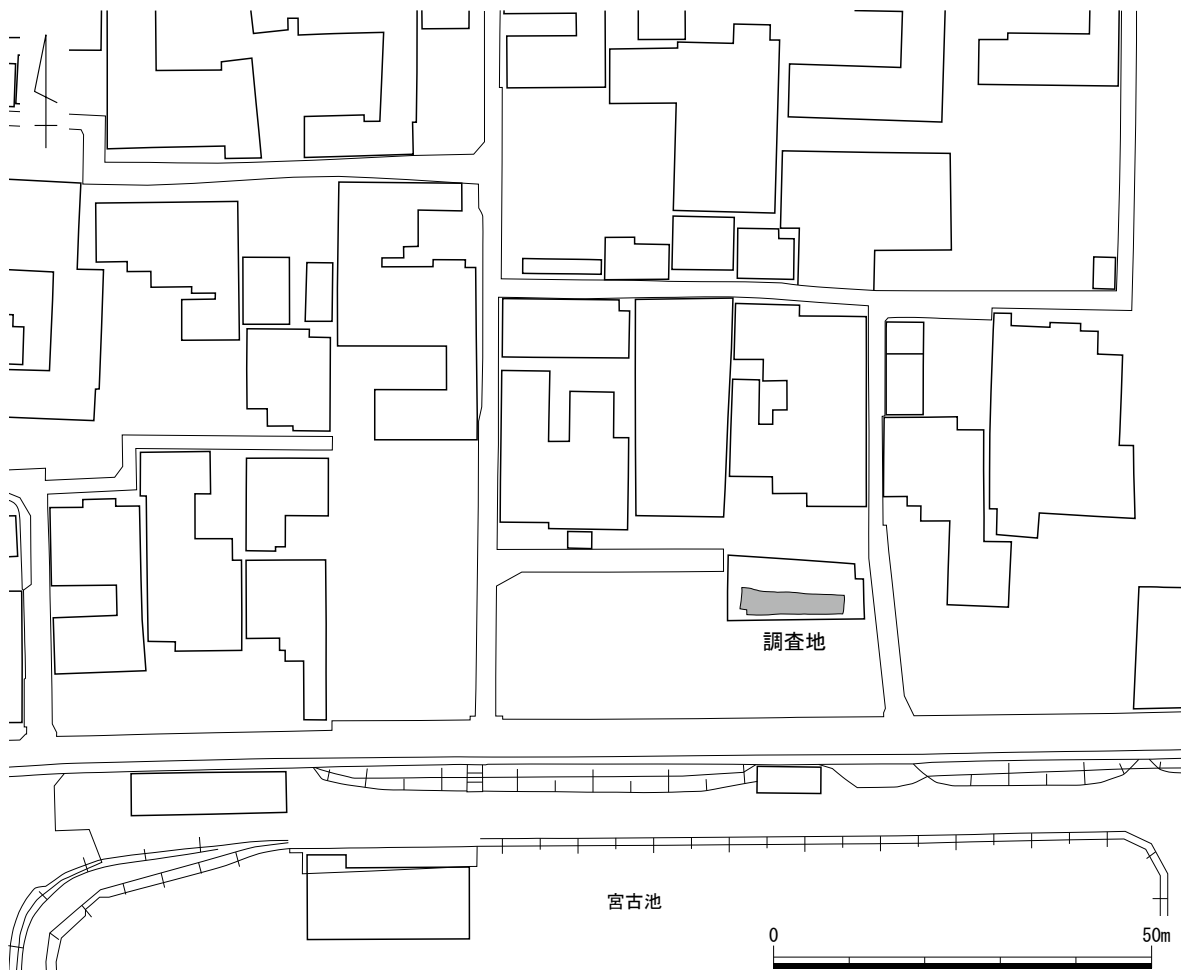
- 40) 豆谷和之 2000「宮古北遺跡第9次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報9 1999年度』田原本町教育委員会
- 41) 清水琢哉 2000「宮古北遺跡第10次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報9 1999年度』田原本町教育委員会
- 42) 清水琢哉 2001「宮古北遺跡第11次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報10 2000年度』田原本町教育委員会
- 43) 豆谷和之・奥谷知日朗 2003「宮古北遺跡第13次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報12 2002年度』田原本町教育委員会
- 44) 清水琢哉 2006「宮古北遺跡第14次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報14 2004年度』田原本町教育委員会
- 45) 奥谷知日朗 2011「宮古北遺跡第15次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報19 2009年度』田原本町教育委員会
- 46) 佐藤麻子 2010「宮古北遺跡第16次調査」『奈良県遺跡調査概報 2009年度』（第三分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 47) 清水琢哉 2000「常楽寺推定地第4次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報9 1999年度』田原本町教育委員会
- 48) 奥谷知日朗 2006「常楽寺推定地第5次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報15 2005年度』田原本町教育委員会
- 49) 清水琢哉 2010「常楽寺推定地第6次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報18 2008年度』田原本町教育委員会
- 50) 水野敏典 2011「常楽寺推定地第7次調査」『奈良県遺跡調査概報 2010年度』（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 51) 清水琢哉 2006「保津環濠遺跡第1次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報14 2004年度』田原本町教育委員会
- 52) 清水琢哉 2012「保津環濠遺跡第2次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報20 2010年度』田原本町教育委員会
- 53) 清水琢哉 2004「〔4〕宮古北遺跡 工事立会」『田原本町埋蔵文化財調査年報13 2003年度』田原本町教育委員会
- 54) 清水琢哉 2006「宮古北遺跡（新規 宮古前遺跡）工事立会」『田原本町文化財調査年報14 2004年度』田原本町教育委員会

### Ⅲ. 調査の方法と経過

#### 1. 調査の方法と経過

発掘調査は、農業用倉庫建築地にあたる場所に東西125m、南北2.2~2.8mのトレンチを設定し、バックホーにより表土を除去した。その後、人力による遺構の検出・遺構掘削等の調査をおこなった。特に古墳時代初頭の井戸は、豊富な遺物を含んでいたため、遺物検出や写真撮影、実測等を慎重に繰り返しおこなった。

発掘調査の期間は、昭和63（1988）年12月9日~12月17日までの実労働7日間で、調査面積は38㎡をおこなった。



第10図 調査地位置図 (S= 1/1,000)

## 調査日誌抄

### 12月9日（金）小雨

小雨のため、午後から作業開始。調査区を設定し、バックフォーにより表土層を掘削。表土層等は約0.6mで遺物包含層はなく、すぐに最終遺構面に達する。土坑2～3基が存在する模様。

### 12月12日（月）晴

作業員2名・午後から同志社大学生若林君

調査区の清掃作業を開始し、遺構検出をおこなう。調査区東よりで近世の土坑（SK-01）、中央で古墳時代初頭の小溝（SD-101・101W）と小土坑（SK-102・103）、西端で古墳時代初頭の土坑（SK-101）を検出する。西端の土坑は、土坑の一部のみであったため、全容を把握するため、西側に1.3×2.6mを拡張し、土坑の全体を検出した。

### 12月13日（火）晴のち曇り

作業員2名

近世の土坑（SK-01）の調査。素掘りの井戸で深さ2mまで掘り下げるが、坑底に達せず壁崩落の危険があるため、掘り下げを中止する。上層に多量の瓦が投棄されており、コンテナ3箱に及ぶ。SK-102は、遺物少なく完掘する。SK-101は第1層の調査。西半から完形の甕や台付壺が出土。

### 12月14日（水）晴

作業員2名・同志社大学生若林・天石君

SK-101の調査。中央に残した南北の土層観察用アゼが邪魔になってきたので、土層図を作成しアゼを除去する。ほぼ完存する盾と思われる木製品が現れる。一枚板で多数の小孔あり。また、周辺から箆や曲柄又鍬も出土し、図面作成をおこなう。トレンチ南壁の土層図も作成する。

### 12月15日（木）晴（寒波）

作業員2名・若林君

石野博信氏・寺澤薫氏来訪し、盾等観察される。

SK-101の調査。盾及び周辺遺物の出土状況写真を撮る。午後から遺物の取上作業をおこなう。その後、さらに掘り下げをおこなう。横槌1点が単独出土。

### 12月16日（金）早朝降雪、寒波強し晴

作業員2名・若林君

除雪作業後、SK-101を完掘する。最下層は細く深くなる。深さ2mに達する。全景写真を撮る。午前で掘削作業すべて終了する。午後より図面作成と平板測量をおこなう。

### 12月17日（土）曇り

午前10時から地元向けの現地説明会を開催する。地元住民約30名参加。

午後からバックフォーにより埋め戻し作業をおこない、すべての調査を終了する。



写真3 現地説明会風景



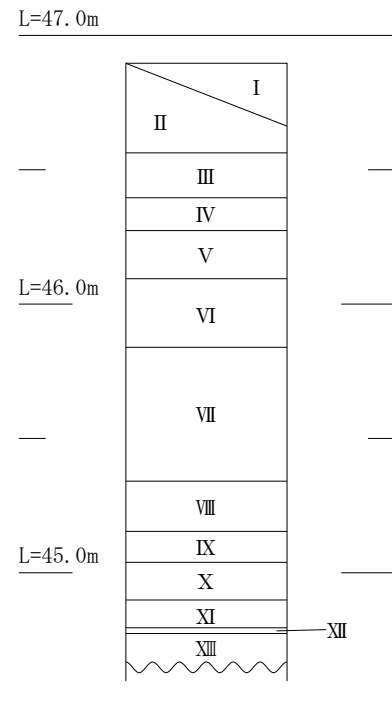
## IV. 検出された遺構

### 1. 堆積土層

本調査地の基本的な堆積土層を調査区西端でみると、下記のとおりである。第Ⅰ層：暗黄灰色粘質土層、第Ⅱ層：黄褐色砂質土層、第Ⅲ層：暗灰色粘質土層、第Ⅳ層：灰褐色粘砂層、第Ⅴ層：明褐色微砂層、第Ⅵ層：黒色粘土層、第Ⅶ層：青灰色微砂層、第Ⅷ層：青灰色微砂層と淡灰色細砂層の互層、第Ⅸ層：灰黒色粘土層、第Ⅹ層：淡灰色粘土層(黒色粘土ブロック含)、第Ⅺ層：灰緑色粘土層(黒色粘土ブロック含)、第Ⅻ層：灰褐色微砂層である。

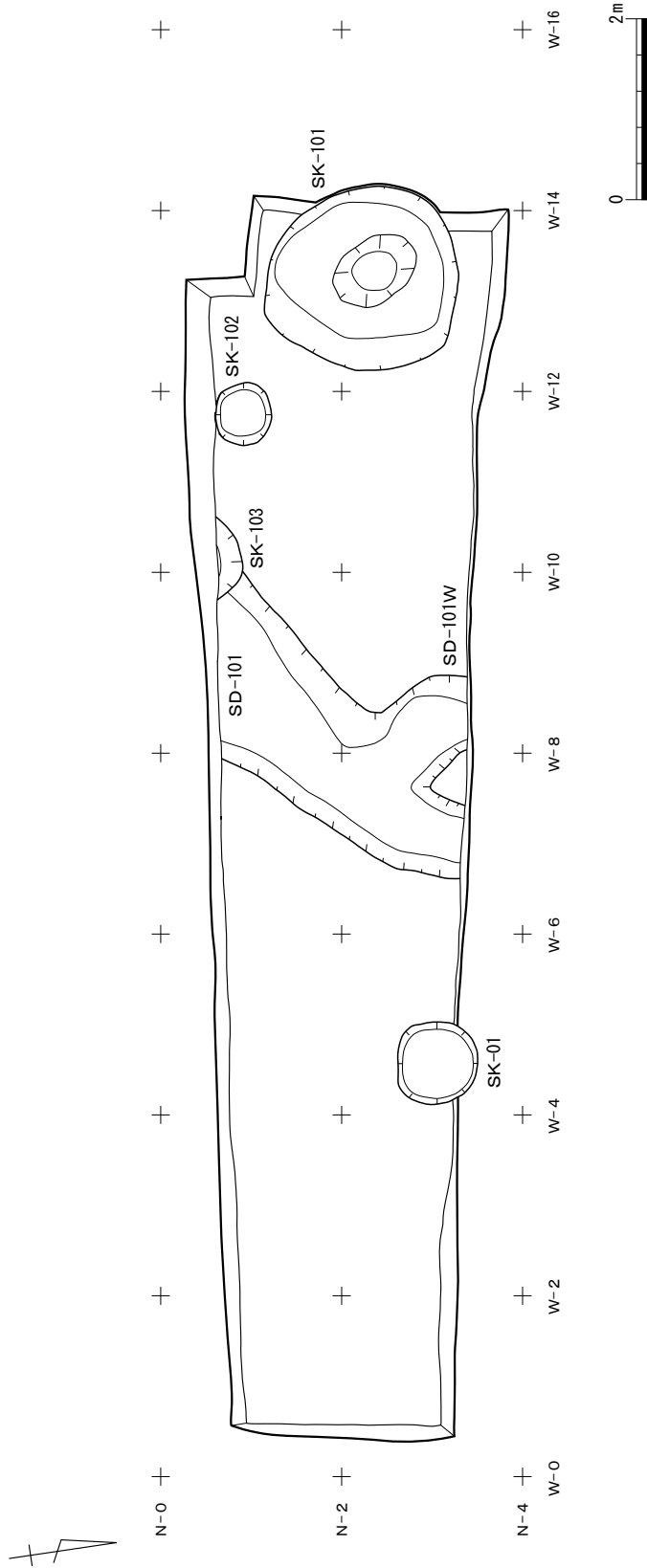
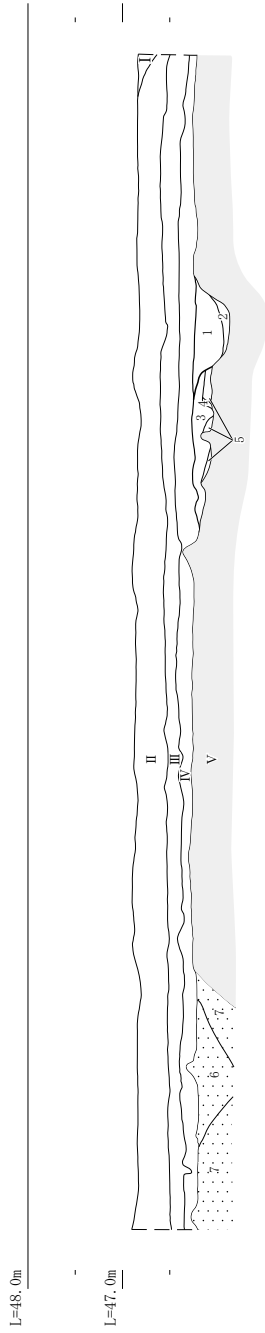
本調査地は、もと水田であったところに客土(第Ⅰ・Ⅱ層)約0.4mを造成している。このため、第Ⅲ層が本来の水田であった地層で、水田耕土層にあたる。この地層は、調査区の設定位置により田の畝の下部分にあたり、土層の厚みはなく0.1~0.2mほどとなっているが、畝の上部分での計測では0.3mほどになることから、本来の土層の厚みは0.2mほどと考えられる。第Ⅳ層は水田床土層で0.2mほどの厚みがある。第Ⅴ層以下は、縄文時代以前に形成された土層で無遺物層となる。粘土層・微砂層・細砂層が沖積作用によって互層に堆積した地層である。0.1~0.5m前後の厚みを有する。なお、第Ⅻ層は火山灰を含んだ厚み5cmほどの薄い土層で、標高44.8mに堆積している。本調査地の北方200mで実施した常楽寺推定地第5次調査でも同様な火山灰を包含した土層を確認している。これまで本地周辺の調査でも始良(AT)火山灰を確認しているが、この火山灰はその直下にミツガシワ種子を含む泥炭層が伴うことが多く、やや状況は異なる。田原本町北西部の広範な地域で検出されている始良火山灰について、今後、その堆積過程の検討が必要になってくるであろう。

さて、遺構を検出した土層は第Ⅴ層の明褐色微砂層上面であり、古墳時代初頭から江戸時代までの遺構が、この土層上面で検出されたことになる。遺構検出面の標高は、約46.3mである。田原本町域での縄文時代から江戸時代の各時代の遺構検出面は、土層の厚みに違いがみられるが、おおよそ3面前後の遺構面を形成しているのが一般的である。しかし、この宮古地区周辺のほとんどの調査区では、1面乃至2面である。これはこの地域が他の地域より標高が高かったことを示しており、弥生時代以降の耕地化に伴い削平を受けたことを示しているのであろう。



第11図 基本土層柱状図

- I. 暗黄灰色粘質土 (表土)
  - II. 黄褐色砂質土 (客土)
  - III. 暗灰色粘質土
  - IV. 灰褐色粘砂
  - V. 明褐色微砂 (ベース)
- 
- 1. 暗灰褐色砂質土
  - 2. 暗灰色粘質土
  - 3. 暗灰色砂質土
  - 4. 暗褐色粘土
  - 5. 暗黄褐色砂
  - 6. 灰色細砂
  - 7. 灰褐色粗砂



第12図 遺構平面図及び南壁土層断面図 (S=1/80)

## 2. 遺構

本調査で検出された遺構は、古墳時代初頭の井戸1基・小溝1条、中世と思われる小土坑2基、江戸時代の井戸1基である。

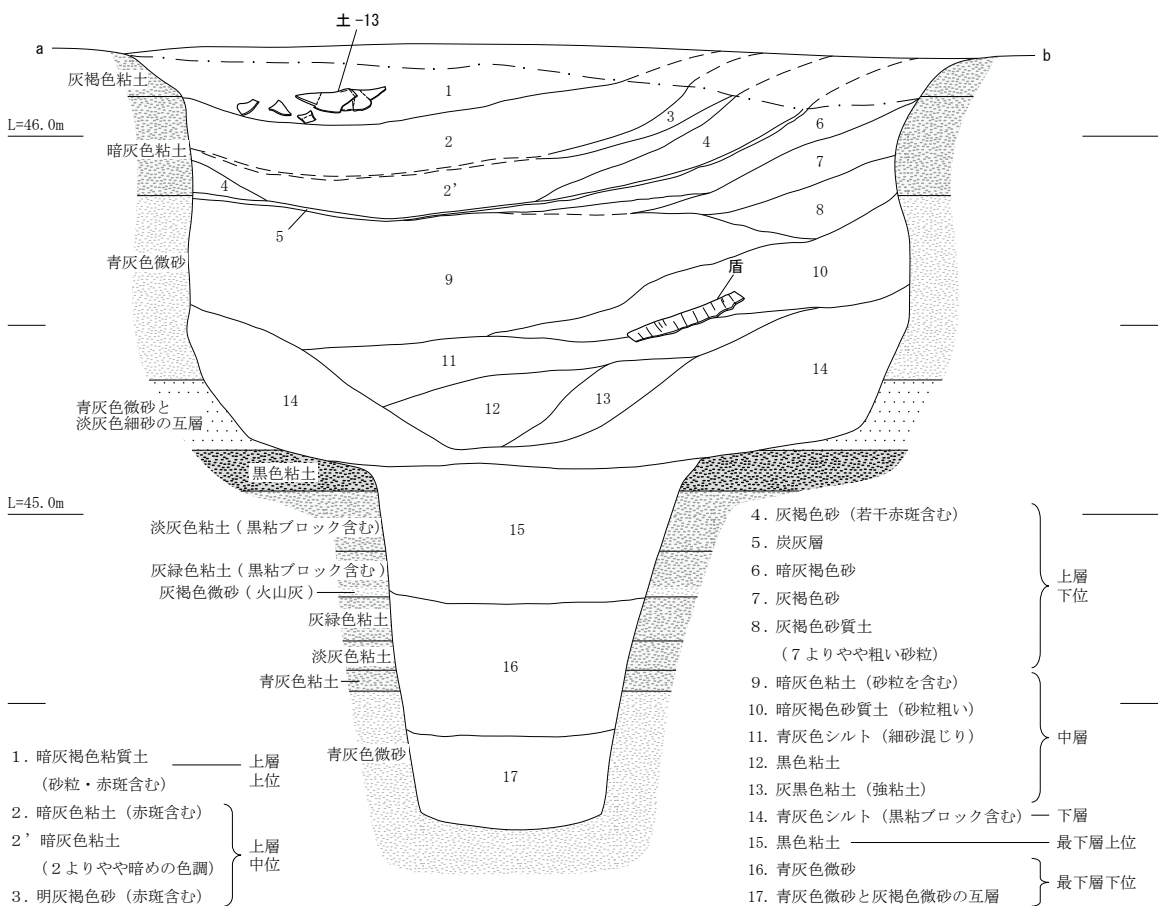
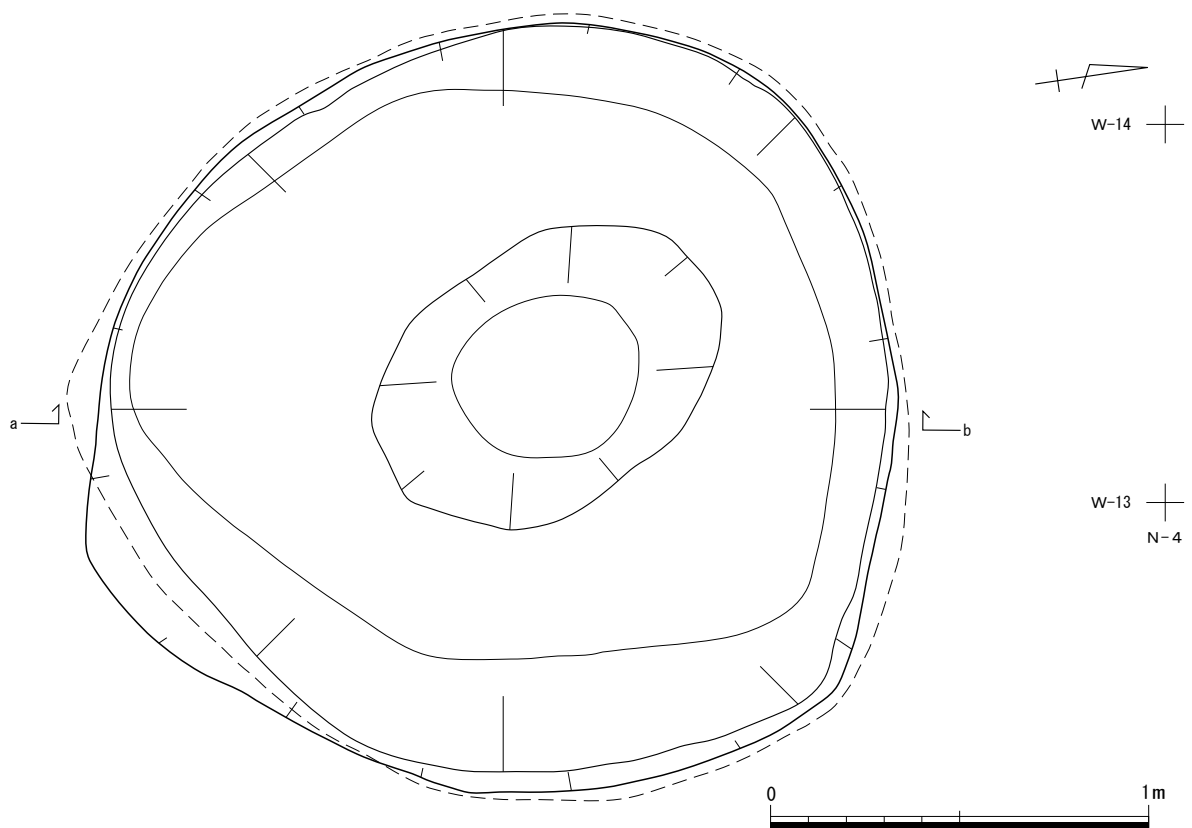
**SK-101** SK-101は、調査区の西端で検出した大型土坑である。当初、調査区西端で土坑の約1/4を検出し、上層の掘削をおこなった結果、甕や高坏の完形品が出土したので、さらに調査区を西側に東西1.3m、南北2.6m拡張し、土坑の全体を把握した。土坑の平面形態は、上面が長軸2.2m、短軸2.1mのほぼ円形を呈する。土坑は2段の円筒形を重ねたような形態で、深さは2.05mである。上部の円筒部は直径約2m、深さ1.1m、下部の円筒部は上面長軸1m×短軸0.7m、下面直径約0.5mで、深さ0.95mを測る。土坑下部は、やや下が小さくなった円筒形を呈している。上部の円筒部は微砂層に掘削していることから、滞水によりその壁面が崩落し袋状になっている。堆積土層は大きく4分層され、土坑の形態と堆積土層の関係を整理すると、土坑上部の円筒部に堆積した3層（上層・中層・下層）と下部円筒部に堆積した1層（最下層）に分けることができる。

下部円筒部に堆積した最下層はさらに3層に細分される。下から青灰色微砂と灰褐色微砂の互層（0.25m）・青灰色微砂層（0.35m）・黒色粘土層（0.35m）である。青灰色微砂と灰褐色微砂の互層と青灰色微砂層は、土坑上部や最下部の壁面になっているベース層（基本土層第Ⅶ・Ⅷ層等）が崩落によって坑底に堆積した最初の土層である。その後、土坑内部は安定し黒色粘土層が形成された。この粘土層上部から完形の木製横槌1点が出土している。

下層は、上部円筒部の下部に堆積した土層で、黒色粘土ブロックを含む青灰色シルト層である。土坑の壁面ちかくが厚く0.35m堆積しており、壁面のベース層（基本土層第Ⅶ・Ⅷ層）が崩落した土層であるため、中央部は薄く壁面ちかくが厚く堆積しているであろう。

中層は、下から灰黒色粘土層（0.2m）・黒色粘土層（0.15m）・暗灰褐色砂質土層（0.2m）・暗灰色粘土層（0.35m）で構成されるが、暗灰褐色砂質土層は土坑北側に偏っており、北側からの流入土であろう。他の土層は、基本的に粘土で構成されていることから滞水状態で形成された土層と思われる。黒色粘土層の最上部から木製盾・曲柄平鍬・又鍬各1点・笊断片がまとまって出土した。いずれもほぼ完形であることから、一括投棄された遺物と考えられる。盾はほぼ水平の状態出土したが、盾北側の縦方向1/3の一側辺が盾の下に重なるとともに、その一側辺の一隅は逆に盾の上に重なるような状態で出土した。このような折れ重なる出土状態から類推するに、盾自体が湾曲しており盾の北側側辺が下になるような投棄であったと思われる。また、このことから出土した上面が盾の表面であると考えておきたい。盾の南側側辺の東と西の角からは曲柄平鍬と又鍬が、また、盾の西南側隅と北東側隅から笊と思われる断片が出土した。このほか、盾の下からは二重口縁壺の上半部（土-3）が出土している。

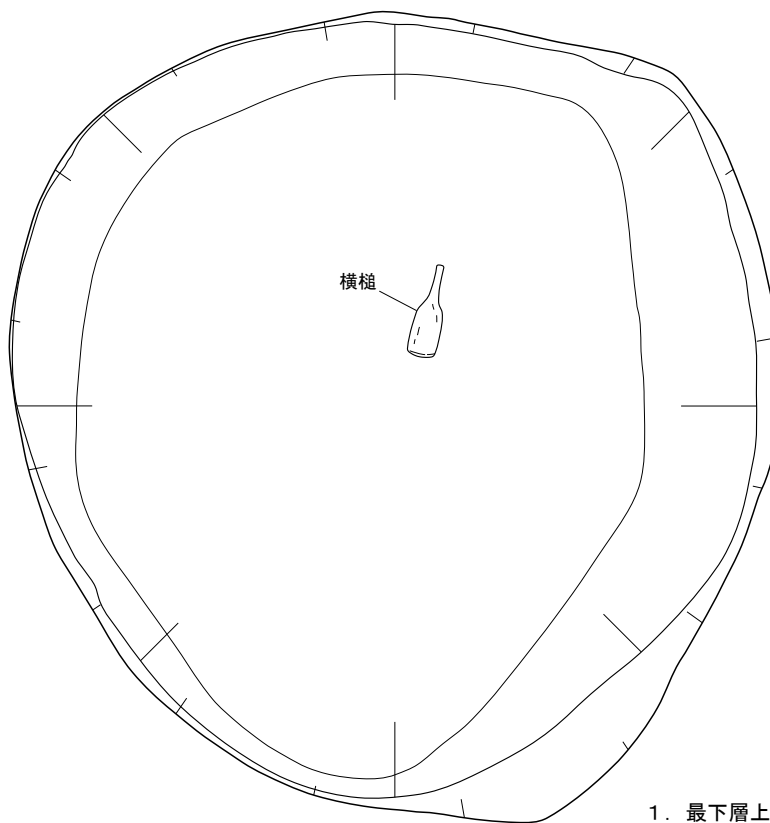
上層はさらに9層に細分されるが、基本的には3層で灰褐色砂層等の砂で構成された流入土とその後に堆積した暗灰色粘土層と暗灰褐色粘質土層である。砂層の流入は、土坑の北側に



第13図 SK-101平面図及び西壁土層断面図 (S= 1/20)

W-15  
+

W-12  
N-3 +

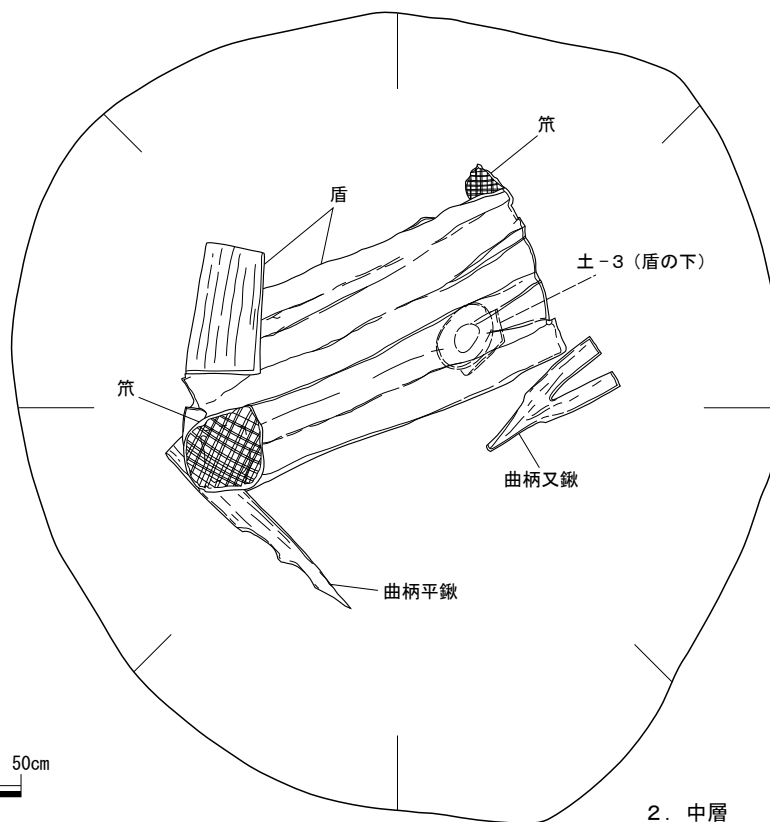


1. 最下層上位

N-1 +

W-15  
+

W-12  
N-3 +



2. 中層

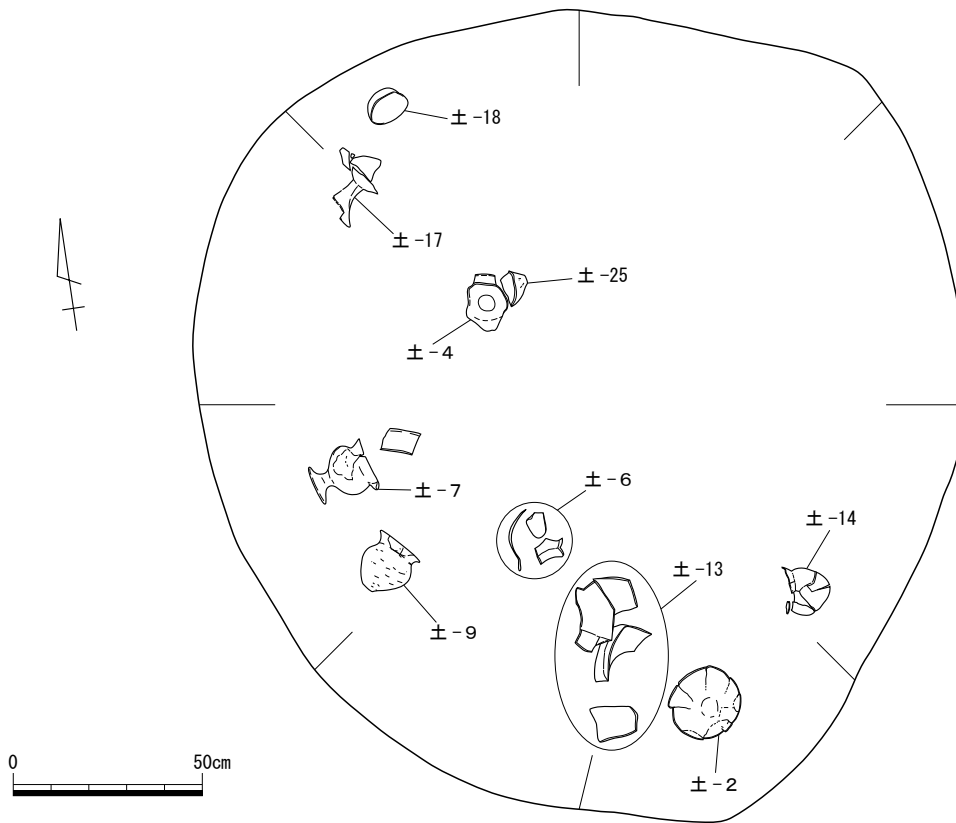
0 50cm

第14図 SK-101最下層上位及び中層 遺物出土状況図 (S= 1/20)

N-1 +

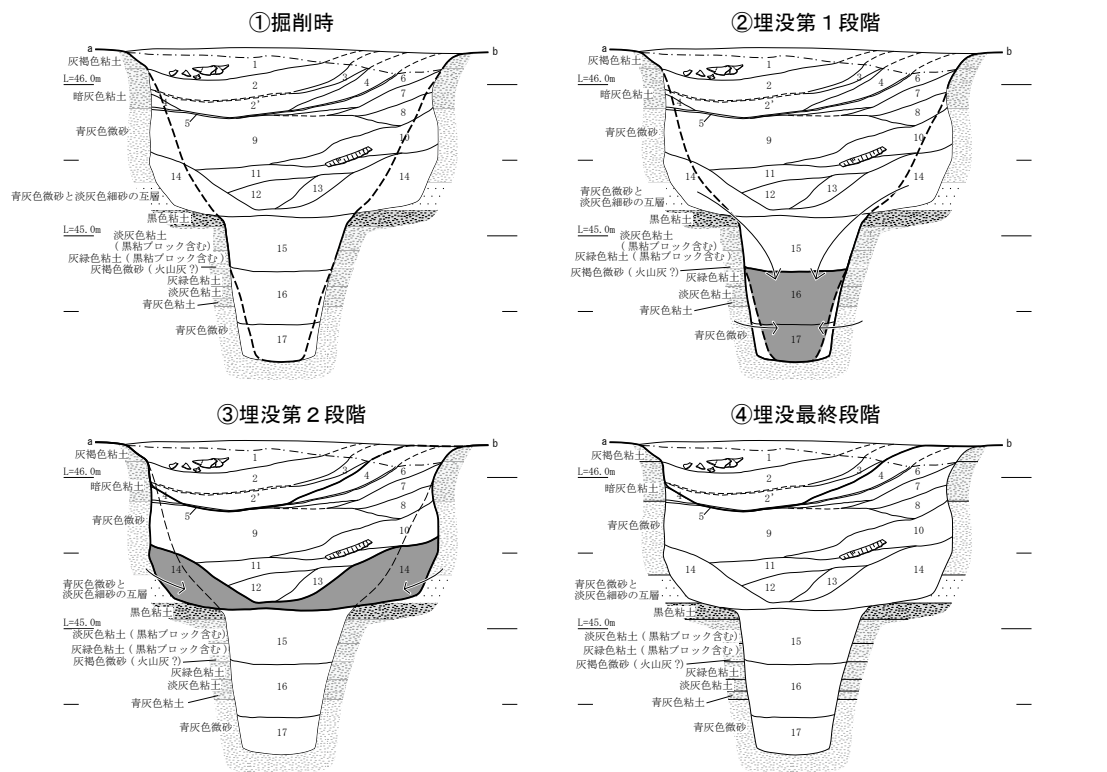
W-15  
+

W-12  
N-3  
+



第15図 SK-101上層上位 遺物出土状況図 (S= 1/20)

N-1  
+



第16図 SK-101埋没過程変遷図 (S= 1/50)



偏っていることから、土坑の北側から流入するような自然現象があったと推察される。砂層流入後、滞水状態となり粘土層が形成されるが、最上層にあたる暗灰褐色粘質土層からは壺や甕、高坏などの完形土器、土器片が多く出土した。土器類は、土坑の南東から北西部の土坑南西半から出土していることから、南西方向から土坑に土器を投棄したと考えられる。なお、上層上位と中層からウリ、上層中位からモモ核1点が出土している（写真4）。

以上、土坑の堆積土層と遺物の出土状況を整理すると、以下のとおりである。深さ2mの1段の円筒状の土坑を掘削するが、湧水により土坑壁面のシルト・微砂層が崩落し、土坑最下部が埋没する。一時期の滞水後、横槌を投棄する。その後、大規模な壁面の崩落によって土坑中位は大きくなり、2段の円筒形を呈するようになるとともに、滞水状態となり盾・曲柄平鍬などの投棄がおこなわれる。滞水状態が続くが、砂層の流入によりほぼ機能が失われ、窪地となり土器の投棄をもって土坑が完全埋没することになる。本土坑は、その形態から井戸と考えられ、その後、遺物の投棄場所になったのであろう。時期は、古墳時代初頭の纏向2・3式である。

**SD-101・101W** SD-101・101Wは、調査区の中央で検出した溝である。南西から北東方向に走向し、調査区のやや北側で北西方向に分岐する。この溝をSD-101Wとする。調査区南端では溝幅1.5m、北端では幅0.8mで細くなる。また、分岐したSD-101Wは幅0.9mでやや弧を描くように北方向に走行する。深さはいずれも0.2m前後である。

堆積土層は、下層が暗黄褐色砂、上層が暗灰色砂質土で、上層が大半を占める。SD-101とSD-101Wは、堆積土から同時に開口していたと考えられる。遺物は、両溝の上層から土器片が散在状況で出土した。

時期は、前述SK-101と同時期で古墳時代初頭の纏向2・3式で、溝の性格は不明である。

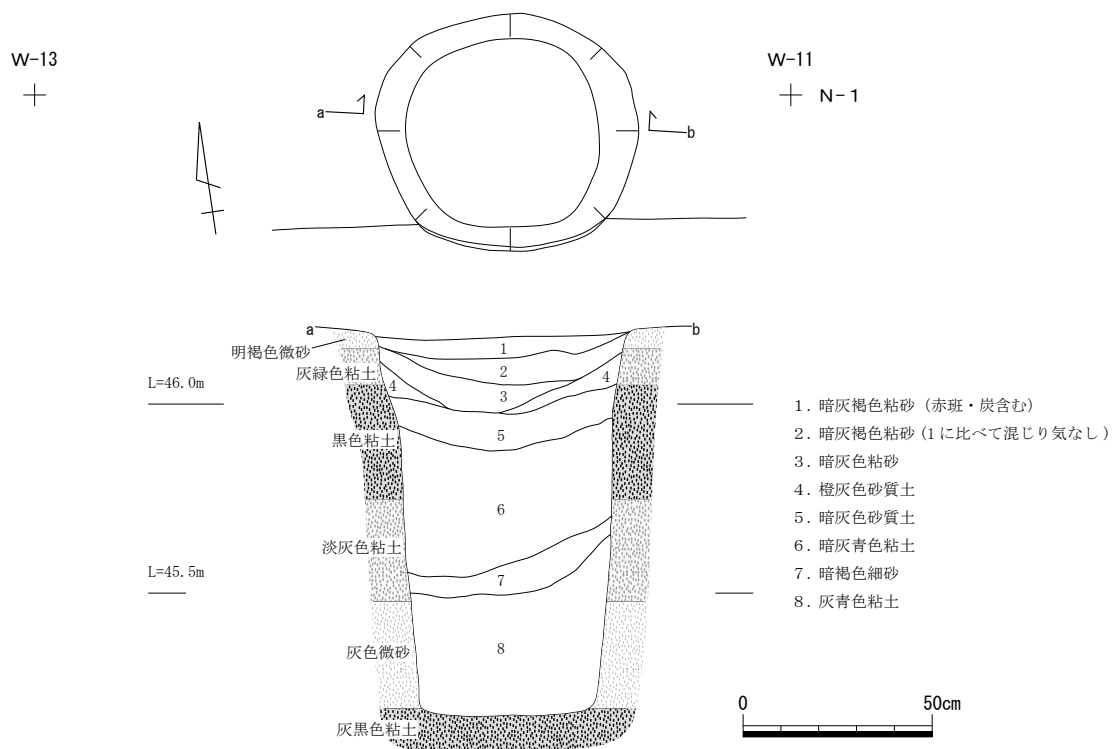
**SK-102** SK-102は、調査区の西端で検出した土坑で、前述SK-101の東南1mに位置する。土坑の平面形態は、上面が長軸0.7m、短軸0.6mのほぼ円形を呈する。土坑の形態は円筒形で、深さは約1mである。土坑底は直径約0.5mであるためほぼ垂直にちかい円筒状である。

堆積土層は大きく3分層される。下層と中層はその間に暗褐色細砂層を挟み、灰青色粘土層と暗灰青色粘土層が0.3~0.4m堆積する。上層は、暗灰色砂質土層や暗灰色粘砂層など砂を含む5層で構成され、厚さ0.1m程度である。

遺物は少なく小袋程度で、上層・中層から古式土師器小片を含みながら中世と思われる土師器小皿小片や羽釜？小片が2点出土している。したがって、時期の特定は難しいが、古式土師



写真4 SK-101出土モモ核・ウリ



第17図 SK-102遺構平面図及び北壁土層断面図 (S= 1/20)

器片は周辺に当時期の土坑や溝が存在することから混在したものと推定でき、前述の土師器小片2片をもって、中世以降の遺構としたい。土坑の性格は、その形状から井戸と考えられる。

**SK-103** SK-103は、調査区の西端で検出した土坑で、SK-102の東0.4mに位置する。土坑は北端1/3程度を検出したのみで、調査区外の南側に広がっており、全容は不明である。土坑の平面形態は、ほぼ円形を呈すると思われる。長軸1m以上、深さ0.4mを測る。土坑底まで調査している可能性があり、そうであると浅い土坑になる。堆積土層は、下層が暗灰色粘質土で土坑底に薄く堆積する。上層は主要な堆積で、暗灰褐色砂質土0.3mで構成される。前述のSD-101西側肩を切る。

遺物は、上下層から各2点出土している。いずれも小片で瓦器碗底1点、土師器小皿と思われる小片3点である。小片のため時期の特定をすることは難しいが、これをもってするならば13~14世紀頃であろう。小片であることから混在の可能性もあり、それ以降の可能性もある。

**SK-01** SK-01は、調査区の中央やや東側で検出した土坑で、SD-101の東0.6mに位置する。土坑は南端2/3程度を検出し、他の部分は調査区外の北側に広がっていたが、土坑を掘削する過程でほぼ全体を調査した。土坑の平面形態は、直径0.9mのほぼ円形を呈する。深さ1.8m以上あり、ほぼ円筒状を呈する。本土坑は、その径が小さく約1.8mまで調査したが、危険なため、それ以上の調査は断念した。堆積土層は、灰青色粘土層の単一層である。遺物は、上面から約0.9mまで瓦を多く含んでいたが、それより下層は少なくなった。瓦はコンテナ3箱に及ぶ。瓦以外に若干の陶磁器類を含む。土坑の性格は井戸で、時期は江戸時代である。



## V. 出土した遺物

### 1. 土器

#### (1) SK-101 出土土器

第18図-1～11・第19図-12～25は、SK-101出土土器で、10・16・19は最下層上位、1・3は中層、5・7・8・11・12・15・23・24は上層下位、上記以外は上層上位から出土した。

1は保存状態が良好な小形壺で、口縁部を欠失するが球形の胴部2/3が残存する。底部は突出しない。胴部は上半にタタキを残すが、下半は粗いハケとなでるようなケズリによって仕上げる。器壁は厚く、やや鈍重な感がある。胴部上半にはヘラによる斜格文を廻らせ、その文様の下位に横線1条を引く。胴部中央には横位方向の細条のミガキが施されているため、前述の線刻の一部は消えている。内面は、底部から胴部中央にかけてヘラ状工具による掻き取り痕がみられる。また、胴部上半は接合痕跡と指頭圧痕が明瞭に残る。

2は広口壺で、口縁部から胴部の約1/3を欠失する。保存状態は悪い。球形の胴部に小さな底部が作り出されている。底部の縁辺は、使用による磨耗のため、丸くなっている。口頸部は緩やかに外反する。胴部は下半にケズリ痕がみられるが、全体はミガキ調整によって丁寧に仕上げている。内面はハケ後、丁寧にナデ調整で仕上げる。器壁は薄い。

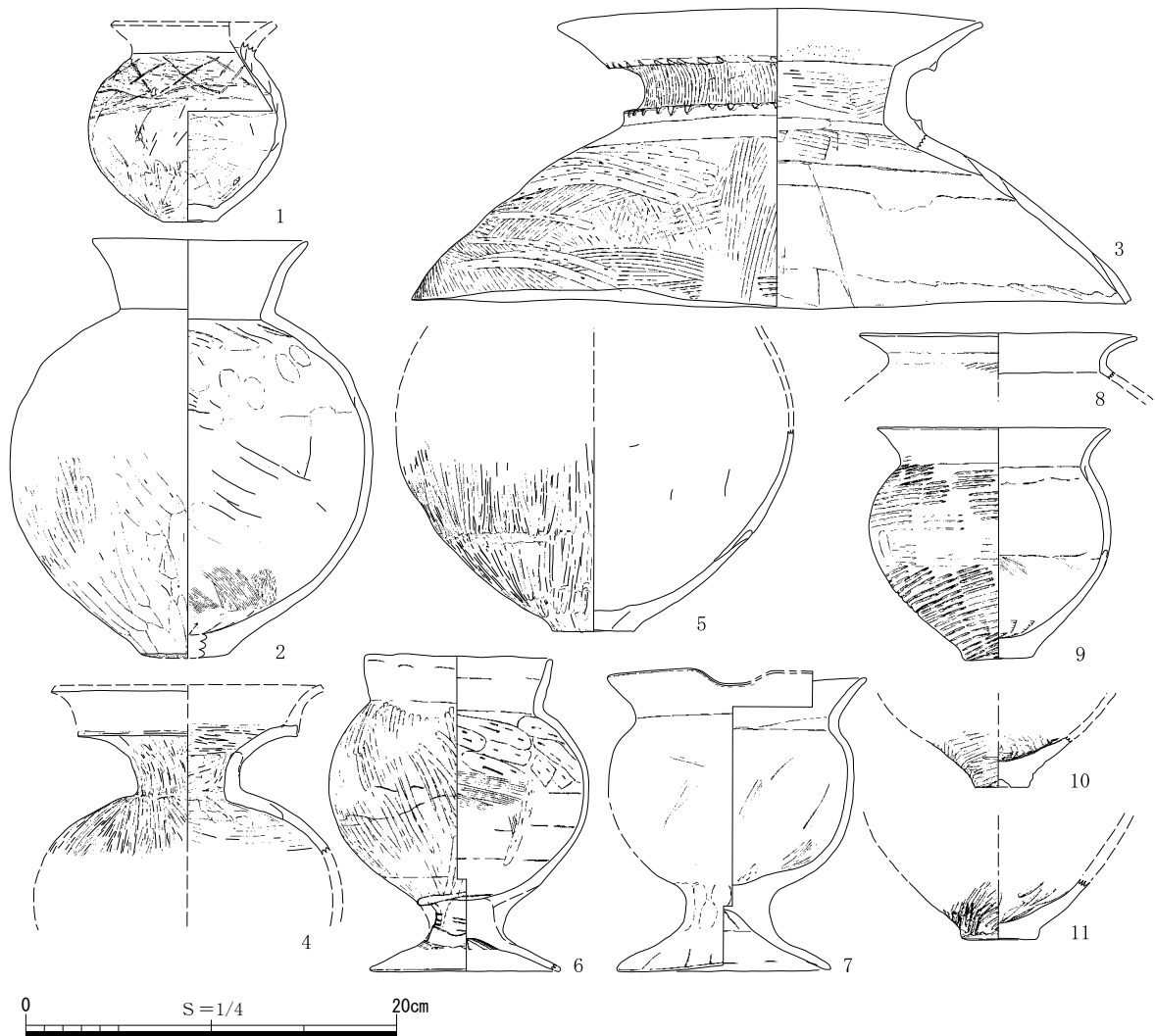
3は大形の二重口縁壺で、胴部の上半から口縁部にかけて残存する。短く直立する頸部に大きく外反する口縁部がつく。口縁部はナデ調整によって仕上げる。口縁部と頸部界、頸部と胴部界には粘土紐を貼付けて凸帯とし、その上にヘラで刻目を廻らせている。頸部から胴部は粗いハケ調整を施す。さらに胴部はナデと薄いケズリによって器面を整える。

注目されるのは、口縁部内面の頸部界ちかくの屈曲部上面で、幅1.5cmほど円を描くように帯状に磨耗していることである（写真5）。胴部欠損後、胴部上半のみを使用して器台として転用したのであろう。胴部下位の欠損部分は、本来の接合部分での欠損であるが、破面は全体に磨耗しており、器台転用時の痕跡と考えてよからう。

4は小形の二重口縁壺の上半部の破片である。横長の球形の胴部に大きく外反する頸部と口縁部がつくと考えられるが、口縁部は疑口縁部で剥離・欠失している。外面は頸部・胴部ともに縦位のミガキを施すが、頸部にはミガキの下にハケ調整が残る。胴部の内面は横位のハケ後、丁寧にナデ調整を施すが、頸部ちかくは接合痕跡とシボリ痕がみられる。頸部は細条のミガキを横方向に廻らせる。胎土は角閃石を含み、色調は暗褐色を呈することから、盆地東南部産と考えられる。



写真5 土器3の口縁部内面の使用痕



第18図 SK-101出土土器 1

遺物番号 写真番号	器種	遺構	取上層位	法量 (cm)	調整・文様 他
第18図-1 図版12-1	小形壺	SK-101	中層 (第4層)	胴径：10.7 底径：3.0	(外) 胴部下半：右上がりハケ後強い縦方向のナデ。上部に粗い横位ミガキ 胴部上半：横位タタキ後斜格文をめぐらす (内) 胴部下半：ナデ。上半は横位ハケと左上がりのハケ。頸部：ナデ。指頭圧痕
第18図-2 図版12-2	広口壺	SK-101	上層上位 (第1層)	口径：11.6 胴径：19.6	(外) 胴部下半：ケズリ後縦位ミガキ。口頸部：磨滅のため不明 (内) 胴部：ハケ後ナデ。口頸部：磨滅の為不明
第18図-3 図版12-3	二重口縁壺	SK-101	中層 (第4層)	口径：22.9	(外) 胴部上半：粗いハケ後ナデと横位ケズリ。頸部：縦位ハケ。口縁部：ヨコナデ (内) 胴部上半：ハケ後強い縦位ナデ。胴部上端は横位ハケ。頸部：横位ハケ後ナデ
第18図-4 図版13-1	二重口縁壺	SK-101	上層上位 (第1層)		(外) 口縁屈曲部：横位ミガキ。他、ハケ後縦位ミガキ (内) 胴部上半：横位ハケ。頸部：指頭圧痕。頸部：ハケ後粗い横位ミガキ
第18図-5 図版13-2	壺	SK-101	上層下位 (第3層)	胴径：21.5 底径：4.4	(外) ケズリ後縦位ミガキ。底部底面：ケズリ (内) 丁寧なナデ
第18図-6 図版12-4	台付壺	SK-101	上層上位 (第1層)	器高：17.2 胴径：14.3	(外) 脚裾部：ナデ。上部：タタキ。胴部ケズリ後縦位ミガキ。口頸部：ヨコナデ (内) 脚裾部：ナデ、ハケ。胴部下半：ナデ。胴部上半：横位ケズリ。口頸部：ヨコナデ
第18図-7 図版12-5	台付壺	SK-101	上層下位 (第3層)	器高：16.4 胴径：13.2	(外) 脚裾部・胴部：ナデ。口頸部：ヨコナデ。煤附着 (内) 脚部：ナデ。胴部：ハケ後ナデ。口頸部：ヨコナデ
第18図-8 図版14-2	甕	SK-101	上層下位 (第3層)	口径：14.6	(外) 口縁部：ヨコナデ。胴部：タタキ (内) 口縁部：ヨコナデ。胴部：ナデ
第18図-9 図版13-3	甕	SK-101	上層上位 (第1層)	器高：12.6 胴径：13.0	(外) 胴部下半：右上がりタタキ。胴部上半：横位タタキ後ナデ。口縁部：ヨコナデ (内) 胴部：ハケ後ナデ。口縁部ヨコナデ
第18図-10 図版14-4	甕	SK-101	最下層上位 (第6層)	底径：2.8	(外) タタキ。底部底面：植物繊維圧痕 (内) ハケ
第18図-11 図版14-8	甕	SK-101	上層下位 (第3層)	底径：4.0	(外) タタキ (内) ケズリ

5は壺の胴部下半の破片である。球形の胴部に突出しない底部がつくが、底面はケズリによって平底を明瞭にしている。胴部下半の中位は接合痕跡が明瞭に残る。外面はミガキ、内面は丁寧なナデ調整を施す。

6・7はほぼ完形の台付壺である。低脚の脚台に球形の胴部がつく。6の口縁部は上方に直口し、7は外反する。6は全体に作りが粗雑で、脚台部と胴部の中心線がずれている。外面の胴部器面は凹凸になっているため、ミガキ調整をおこなうがあまり効果はみられない。内面はナデ調整が主であるが、胴部上半は薄くケズリをおこなう。胴部下半には煤の付着がみられることから、煮沸に使われたと推定できる。7も6と同様に脚台部と胴部の中心線がずれており、作りは粗雑である。内外面ともにナデ調整で仕上げる。口縁部には片口を設けている。

8～15は甕で、8は口縁部、10～12は底部である。9は完形の小形甕で、球形の胴部に短く外反する口縁部がつく。底部はその端部までタタキが施されているため、ほとんど突出しない。外面は、胴部中央の接合部でタタキの方向が変わる。胴部下半が右上がりのタタキ、胴部上半がほぼ水平あるいはやや右上がりのタタキとなる。内面はナデ調整によってハケを消す。胎土は角閃石を含み、色調は暗褐色を呈することから、盆地東南部産と考えられる。

10・11とも甕の底部で底面には製作時の植物圧痕が残る。両者ともタタキが底部ちかくまで施されているため、底部は小さくなっている。12は中形甕の底部である。球形の胴部に小さく突出した底部がつく。底部底面には微かな植物繊維圧痕を残すが、中央部は凹んでいることから底部側面に粘土紐を付加して底部を作っている可能性がある。タタキは胴部下半が水平、胴部中央は右上がりである。外面には煤が付着する。内面には、底部ちかくに炭化物が付着する。

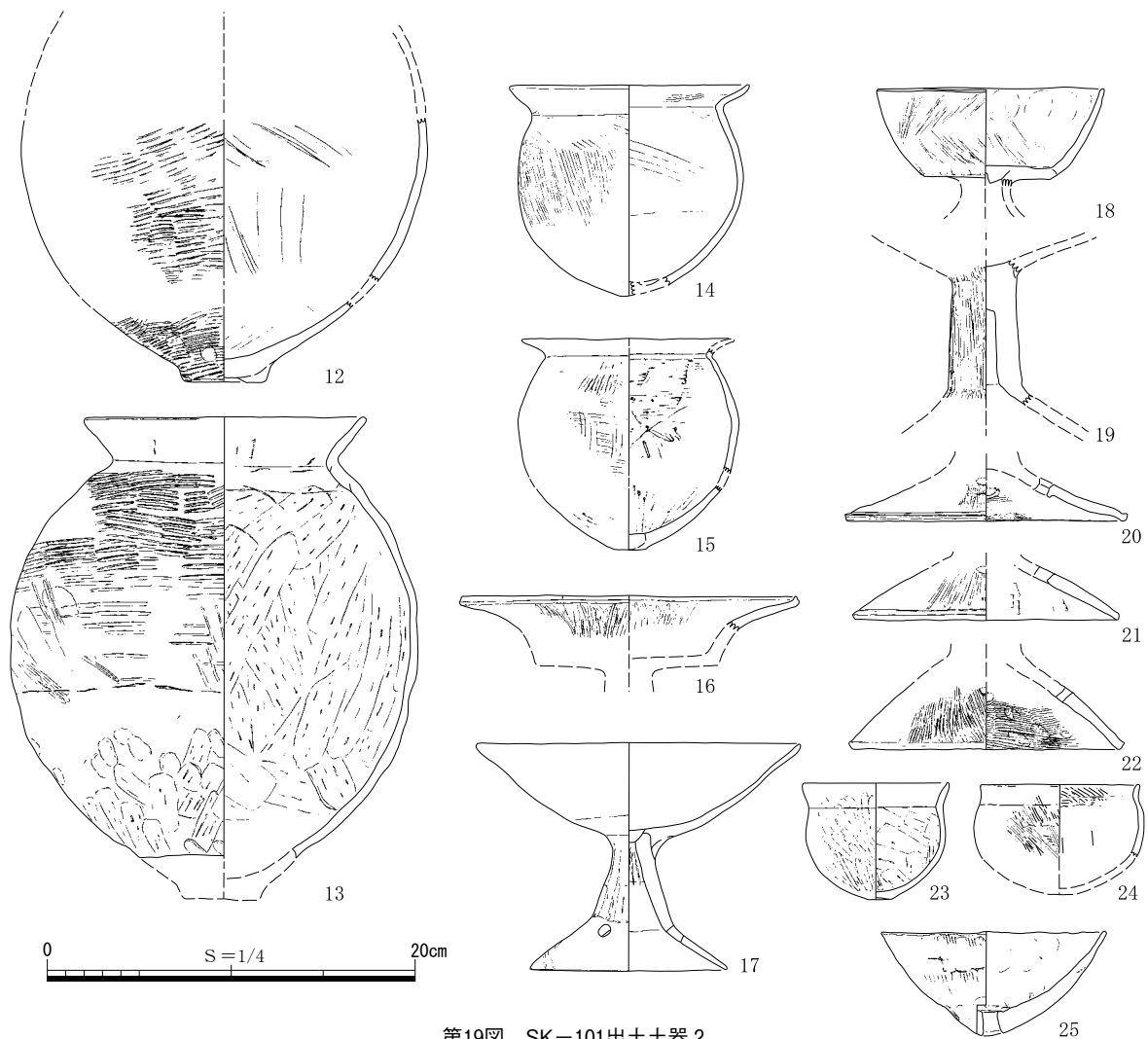
13は底部と胴部の一部を欠くが、ほぼ全体のわかる中形甕である。やや縦長の球形の胴部の器面は凹凸があり、作りが粗雑である。胴部下半はケズリ、上半は水平タタキによって仕上げている。内面は右上がりのケズリを施す。胴部下半から中央にかけて煤が付着する。

14は完形の小形甕であるが、保存状態が悪いため、調整痕は不明瞭である。球形の胴部に短く内湾ぎみに立ち上がる口縁部がつく。口縁部の端面は鋭い。底部は小さくほとんど消失している。外面は細条のハケ、内面はハケ後ナデ調整を施す。外面には煤の付着がみられる。

15も14と同様の形態の小形甕である。外面はハケ、内面にはケズリを施す。

16～22は高坏である。16は有段口縁を有する坏部片である。口縁端部は、上方へ突出する。内外面ともミガキ調整を施す。17は完形の高坏であるが、保存状態は悪く、調整痕が残っていない。全体に淡赤褐色を呈し、特に脚部は淡灰褐色を呈していることから脚部を中心に被熱している可能性が高い。「ハ」の字状にひらく脚部に浅い椀形の坏部がつく。坏部の口縁部は鋭い。脚部の屈曲部には透孔が3つあけられている。

18はほぼ坏部が完存する高坏である。小形で上方に口縁部が立ち上がるやや深みのある坏部で、東海系と考えられる。保存状態が悪く、外面にはミガキ調整が微かに見えるが、内面は不明である。坏部の外面底面にはケズリが施されている。脚部との接合部には小さな円盤充填があり、脚部側からみると小さな軸芯痕が残っている（写真6）。



第19図 SK-101出土土器 2

遺物番号 写真番号	器種	遺構	取上層位	法量 (cm)	調整・文様 他
第19図-12 図版14-1	甕	SK-101	上層下位 (第3層)	胴径:22.2 底径:4.3	(外) 胴部下半:横位タタキ。胴部上半:右上がりタタキ。胴部下半:煤付着、底部一部磨減 (内) 胴部下半:煤付着の為不明。胴部上半:左上がりハケ
第19図-13 図版13-4	甕	SK-101	上層上位 (第1層)	口径:14.8 胴径:22.2	(外) 胴部下半:ケズリ後ナデ。胴部上半:右上がりタタキ。口縁部:ヨコナデ (内) 胴部:ケズリ。口縁部:ヨコナデ
第19図-14 図版13-5	甕	SK-101	上層上位 (第1層)	口径:12.8 胴径:12.3	(外) 胴部下半:被熱の為調整不明。胴部上半:右下がりハケ。口縁部:ヨコナデ (内) 胴部下半:ハケ後ナデ。胴部上半:左上がりハケ。口縁部:横位ハケ
第19図-15 図版14-3	甕	SK-101	上層下位 (第3層)	胴径:12.0 底径:1.6	(外) 胴部:ハケ。表面被熱と煤の付着 (内) 胴部下半:縦位ケズリ。胴部上半:横位ケズリ
第19図-16 図版14-9	高坏	SK-101	上層上位 (第1層)	口径:18.0	(外) 口縁端部:一条のミガキ。以下縦位ハケ後縦位ミガキ (内) 口縁部:ヨコナデ。以下縦位ミガキ
第19図-17 図版13-7	高坏	SK-101	上層上位 (第1層)	器高:12.5 口径:17.4	(外) 脚裾部:右下がりミガキ。上部:縦位ケズリ。坏部被熱の為、不明 (内) 脚裾部:ヨコナデ。脚部:横位ケズリ。坏部被熱の為、不明
第19図-18 図版13-6	高坏	SK-101	上層上位 (第1層)	口径:12.1	(外) 坏底部:ケズリ後粗いミガキ。坏部下半:左上がりミガキ。坏部上半:左下がりミガキ (内) 磨減の為不明。ミガキカ
第19図-19 図版14-12	高坏	SK-101	最下層上位 (第6層)		(外) 縦位ミガキ。一部に煤付着 (内) ナデ
第19図-20 図版14-11	高坏	SK-101	上層上位 (第1層)	裾径:15.2	(外) 裾端部:強いヨコナデ。他縦位ハケと指頭圧痕 (内) 横位ハケ後ナデ
第19図-21 図版14-10	高坏	SK-101	上層上位 (第1層)	裾径:14.2	(外) 裾端部:強いヨコナデ。裾部:縦位ミガキ (内) 横位ハケ後ナデ
第19図-22 図版14-13	高坏	SK-101	上層上位 (第1層)	裾径:14.4	(外) 裾端部:粗いミガキ。他縦位ハケ。透孔残存1。一部に煤付着 (内) 横位ハケ
第19図-23 図版14-15	小形丸底鉢	SK-101	上層下位 (第3層)	口径:7.7 底径:1.2	(外) ケズリ後粗い縦位ミガキ。口縁部:ヨコナデ。一部に煤付着 (内) 胴部下半:左上がりケズリ。胴部上半:横方向ケズリ。口縁部:ヨコナデ
第19図-24 図版14-14	小形丸底鉢	SK-101	上層下位 (第3層)	口径:7.8	(外) 胴部上半:左上がりハケ。口縁部:ヨコナデ。煤付着 (内) 胴部上半:ナデ。口縁部:ハケ後ヨコナデ
第19図-25 図版14-16	有孔鉢	SK-101	上層上位 (第1層)	器高:5.7 口径:11.9	(外) ハケ後ナデ。被熱 (内) ハケ後ナデ

19～22は、脚部の破片である。19は柱状の脚部、20～22は脚裾部の破片である。19～21の外面はミガキ調整、22はハケ調整で仕上げる。22の脚部は、内湾ぎみに立ち上がり、裾端部は、面をもつ。

23・24は小形鉢、25は有孔鉢である。23は球形の胴部に短く外反する口縁部がつく。底部は小さく形骸化している。外面はハケ後、丁寧なナデ調整を施す。内面はケズリによって器壁を薄くする。24は小形鉢の口縁部で、口縁部の屈曲は緩やかで外反する。外面はハケ、内面はナデ調整を施す。25は尖り底ぎみで、底部に0.7cmほどの小孔を内面から外面に向かってあける。保存状態が悪いが、内外面ともナデ調整で仕上げる。

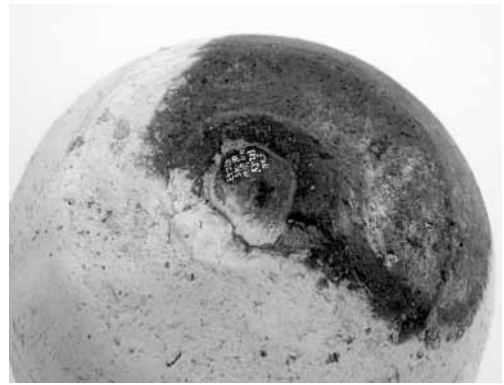


写真6 土器18の軸芯痕

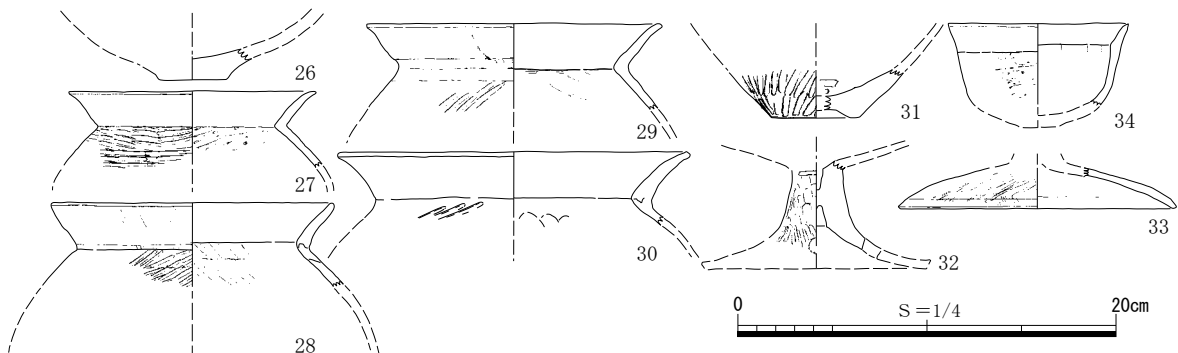
## (2) SD-101・101W 出土土器

第20図-27・28・31・33・34はSD-101第1層、26・29・30・32はSD-101W第1層出土の土器である。

26は壺の底部で、ほとんど突出しない形態の底部である。27～30は甕の口縁部、31は甕の底部である。27の口縁部の屈曲は、胴部内面のケズリによって明瞭である。胎土は角閃石が少ないが、色調が暗褐色を呈することから、盆地東南部産と考えられる。28～30の甕は、右上がりのタタキを施す。30の口縁部は、強くヨコナデをおこなっており、胴部からの内面の屈曲は明瞭である。31の底部は、タタキが底部端まで及んでいるため、底部の突出がない。また、底面中央が凹んでいる。

32・33は高坏脚部である。32は裾部を欠失しているが脚柱部から大きく広がると思われる。4方向に透孔をもつ。内外面ともナデ調整で仕上げる。脚柱部は丸棒状工具で上下方向から突き刺しているが、貫通はしていない。33は脚裾部で、内湾ぎみに立ち上がる。内外面はおもにナデ調整であるが、外面には僅かにミガキ調整がみられる。

34は小形鉢である。胴部から僅かな屈曲によって口縁部を形成する。胴部外面は軽くケズリをおこなう。内面はナデ調整で仕上げる。

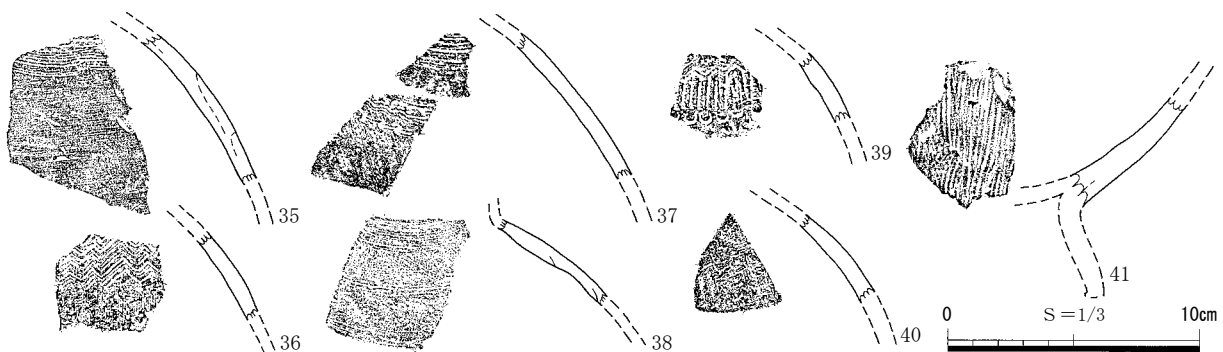


第20図 SD-101・101W 出土土器

### (3) 搬入土器

第21図-35~41は搬入土器、あるいは在地でなく他地域から影響を受けたと考えられる土器である。37はSD-101W第1層から出土したもので、それ以外はSK-101から出土した。36は中層、35・39は上層下位、41は上層中位、38・40は上層上位から出土した。これらの土器はいずれも広口壺と考えられる胴部の破片で、胴部上半に櫛描文様を施したものである。文様構成は、破片のため、その全容がわかるものはない。35~37は最下段の文様で、35は直線文、36は波状文、37は直線文2帯・簾状文（左→右）である。38は直線文と波状文を細条の櫛原体で交互に施文したものである。39は波状文・刺突文（左→右）・竹管文、40は波状文が施されている。

41は、台付甕の脚台部ちかくの破片と考えられる。外面は粗いハケ調整を施す。内面はナデ調整で仕上げるが、胴部ちかくはケズリがみられる。器壁は厚い。



第21図 搬入土器

遺物番号 写真番号	器種	遺構	取上層位	法量 (cm)	調整・文様 他	
第20図-26 図版15-8	壺	SD-101W	第1層	底径:3.6	(外) ナデ (内) ハケ後ナデ	
第20図-27 図版15-1	甕	SD-101	第1層	口径:12.6	(外) 胴部上半:横位タタキ。口縁部ヨコナデ (内) 胴部上半:ケズリ。口縁部ヨコナデ	外面煤付着 盆地東南部産
第20図-28 図版15-2	甕	SD-101	第1層	口径:14.6	(外) 胴部上半:右上がりタタキ。口縁部ハケ後ヨコナデ (内) 胴部上半:ハケ後ナデ。口縁部ヨコナデ	外面煤付着
第20図-29 図版15-3	甕	SD-101W	第1層	口径:15.2	(外) 胴部上半:タタキ。頸胴屈曲部及び口縁部ヨコナデ (内) 胴部上半:ハケ後ナデ。口縁部ヨコナデ	
第20図-30 図版15-6	甕	SD-101W	第1層	口径:18.2	(外) 胴部上半:タタキ。口縁部ヨコナデ (内) 胴部上半:ナデ。口縁部ヨコナデ	
第20図-31 図版15-5	甕	SD-101	第1層	底径:4.5	(外) 右上がりタタキ (内) ハケ後ナデ	被熱の為、赤変する
第20図-32 図版15-11	高坏	SD-101W	第1層		(外) 裾部:縦位ミガキ。脚上部ケズリ後ナデ (内) 裾部:ナデ	透孔4 外面一部被熱
第20図-33 図版15-9	高坏	SD-101	第1層	裾径:14.5	(外) 裾部:ヨコナデ。他ハケ後粗い縦位ミガキ (内) 裾部:ヨコナデ。他ハケ後ナデ	
第20図-34 図版15-10	小形鉢	SD-101	第1層	口径:9.0	(外) 胴部:ケズリ後ナデ。口縁部ヨコナデ (内) 胴部:ナデ。口縁部ヨコナデ	
第21図-35 図版15-13	壺	SK-101	上層下位 (第3層)	縦:7.1 横:5.8	(外) 横位ミガキ。櫛描直線文(原体11本?/1.2cm) (内) ナデ	搬入土器(伊勢湾岸系)
第21図-36 図版15-15	壺	SK-101	中層 (第4層)	縦:4.5 横:4.6	(外) 縦位ミガキ。櫛描波状文(原体9本/1.3cm) (内) ナデ	搬入土器(伊勢湾岸系)
第21図-37 図版15-17	壺	SD-101W	第1層	縦:7.0 横:5.9	(外) ハケ後縦位ミガキ。櫛描直線文・簾状文(簾状文原体8本/1.3cm) (内) ナデ	搬入土器(伊勢湾岸系)
第21図-38 図版15-12	壺	SK-101	上層上位 (第1層)	縦:5.4 横:5.9	(外) ナデ。櫛描直線文(原体9本/1.1cm)・波状文(原体6本/0.7cm) (内) ナデ	搬入土器(伊勢湾岸系)
第21図-39 図版15-16	壺	SK-101	上層下位 (第3層)	縦:3.6 横:4.0	(外) ナデ。櫛描波状文・刺突文・竹管文(刺突文原体10本/1.3cm) (内) 磨滅の為、不明	搬入土器(伊勢湾岸系)
第21図-40 図版15-14	壺	SK-101	上層上位 (第1層)	縦:4.2 横:3.8	(外) ナデ?。櫛描波状文(原体は磨滅のため不明) (内) 横位ハケ	搬入土器(伊勢湾岸系)
第21図-41 図版15-18	台付甕	SK-101	上層中位 (第2層)	縦:5.9 横:4.2	(外) 縦位ハケ (内) ナデ・上部にケズリ	搬入土器(伊勢湾岸系)

#### (4) SK-01出土土器

第22図-42～49は、SK-01の上層から出土したものである。

42は肥前染付碗である。外面にはコンニャク印判での文様が1ヶ所みられる。内面の見込み部分には蛇の目釉剥ぎをおこなっている。高台の端部は、使用時に磨かれているため、磨滅している。43・44は、鉄釉を内外面に施した壺の胴部片である。45は信楽焼の播鉢で、口縁部は短く外反するとともに内面側で段をもつ。内面には6条一単位の櫛描き揺り目をほぼ等間隔に入れる。

46は、土師器の羽釜の口縁部である。口縁部は胴部から大きく屈曲し、端部は上方へ肥厚する。この口縁端部の形状は、折り曲げた端部が形骸化したものである。胴部の器壁は薄い。

47・48は瓦質の大鉢で、胴部下半の破片である。いずれも内外面に丁寧なナデ調整をおこなう。48の底部底面は、使用による磨滅がみられる。

49は、瓦質の竈あるいは火鉢と考えられる厚手の破片である。やや内方ぎみに立ち上がり、上端が内側に肥厚し、上面が平坦になっている。外面は丁寧な縦位のミガキ、内面は僅かにケズリがみられるが全体はナデ調整で、その後、丸棒状の工具による横方向の撫でつけが乱雑になされている。煤の付着は、内面の口縁部から外面の口縁上面にみられ、特に上面の中央は輪状に厚めに付着している。この煤の付着状況から羽釜がこの上に乗せられていた可能性が高い。また、口縁端部は使用による傷みがみられる。

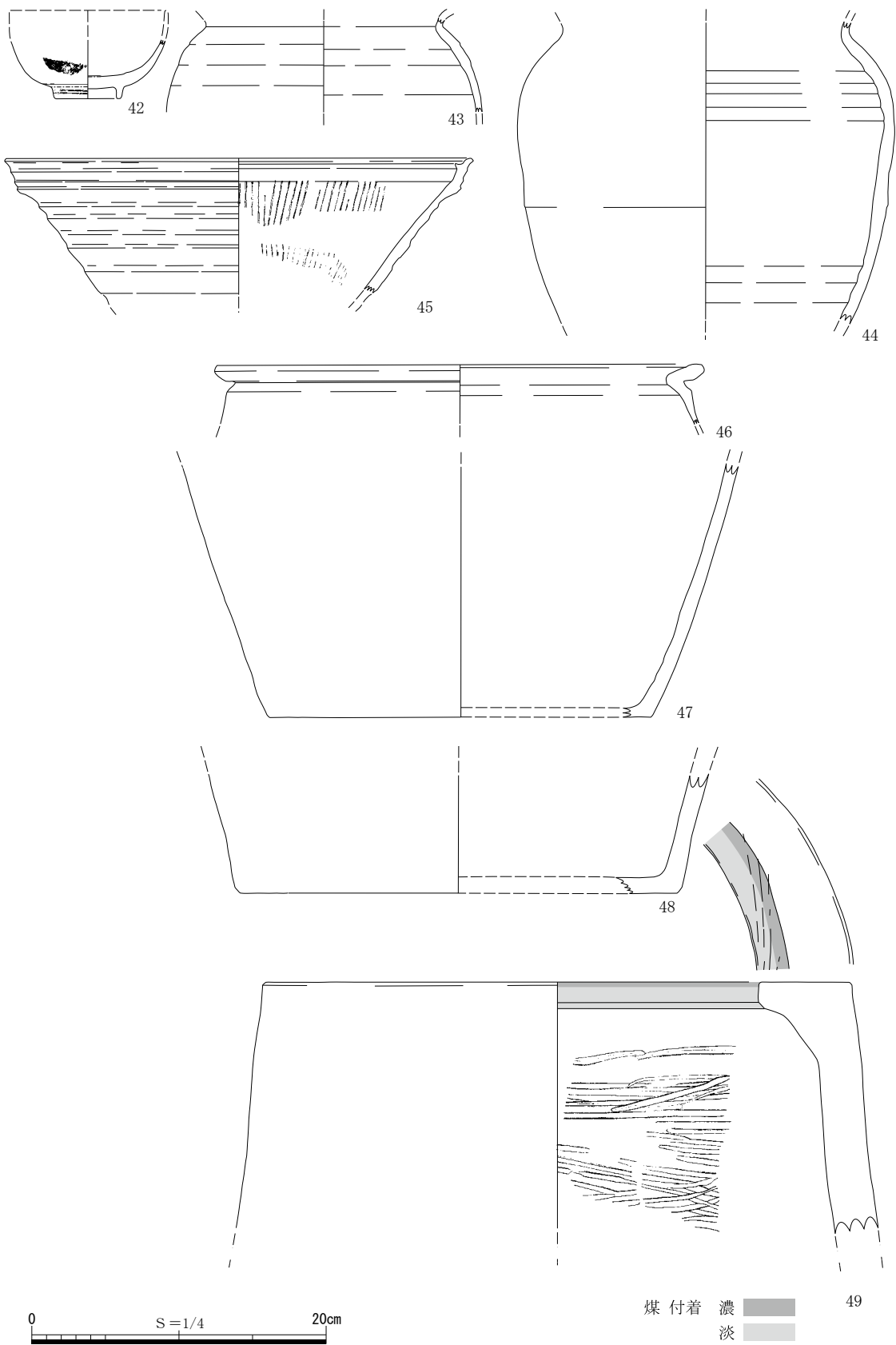
## 2. 瓦

### (1) 軒平瓦・平瓦

第23図-1・2は軒平瓦、第23図-3～8、第24図-9～12は平瓦である。いずれもSK-01の上層から出土した。1の軒平瓦は、瓦当がほぼ残存するが、平瓦部の末端は欠失している。瓦当面は、1条の圏線による内区に5弁の半截菊花文を中心飾りとする均正唐草文を配する。圏線左右端は消失しているが、それと同時に唐草文の端部も外縁部によって切れている。唐草の巻きは比較的強く、先端は丸く膨らんで収まる。唐草は中心から左右端に3条・2条・1条と本数を減らしている。顎部は、平瓦部の厚みとほぼ同じ厚みである。平瓦広端凸面側を斜めに削り、そこに瓦当用粘土を接合している(写真7)。平瓦部の凹面は、縦方向の丁寧なナデを施すが、瓦当ちかくの端部では僅かに布目圧痕が残る。西大寺の軒平瓦(345B)とほぼ同じで、15世紀後半であろう<sup>1)</sup>。

2は軒平瓦の瓦当部の破片で、右半分が残る。平瓦部との接合面で剥離しており、顎貼り付け式段顎である(写真8)。瓦当の文様は、圏線はなく唐草文が配されている。中心飾りの一部が残るが意匠は不明。唐草は太めの輪郭で、3回反転する。右端の巻きは弱い、残り2つの巻きは強い。瓦範にハナレ砂を使っていると思われる。外縁部の側辺部は幅広となっている。

3・4は凸面にタタキを残すものである。小片のため、その全容はわからないが、3条?の

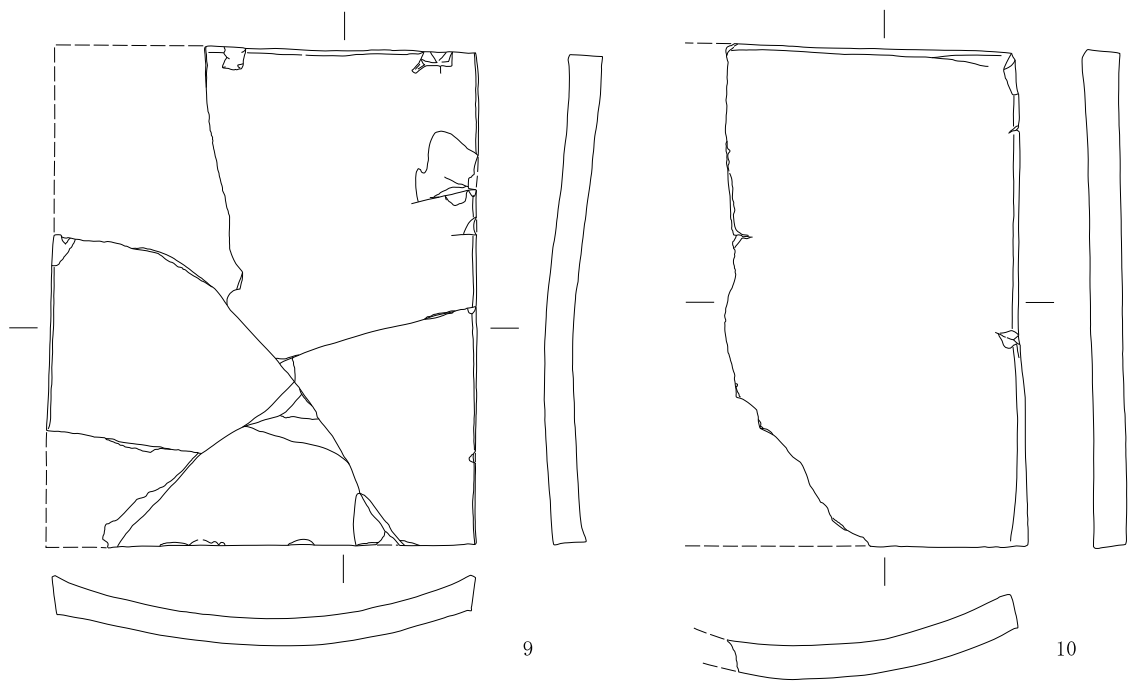


第22図 SK-01出土土器



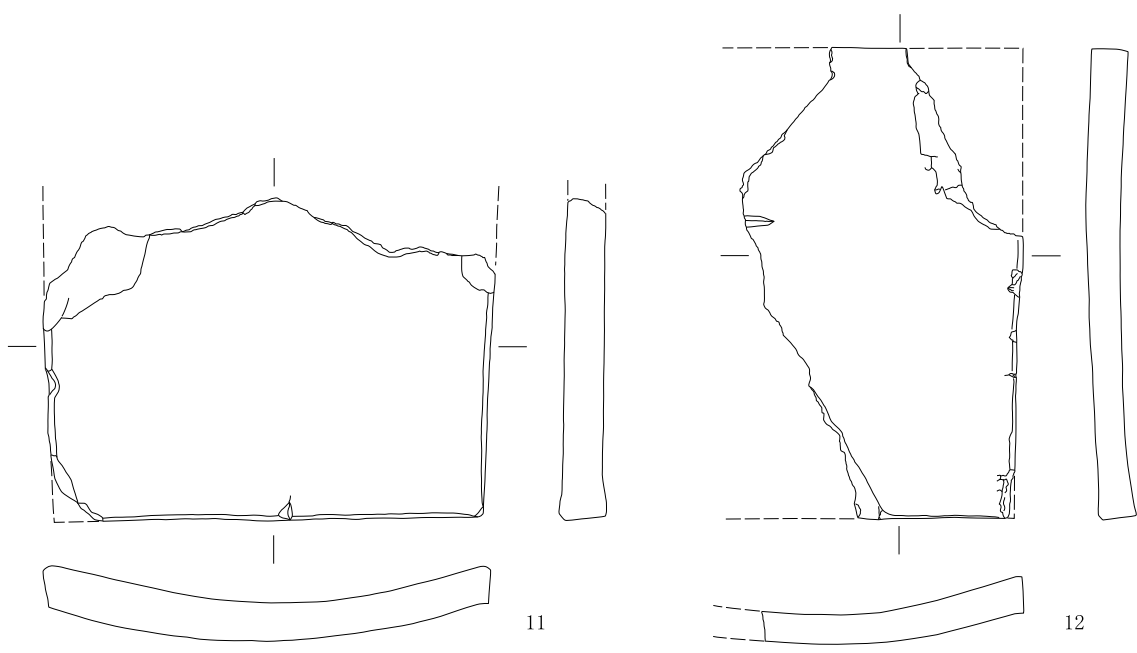


第23图 SK-01出土瓦 1



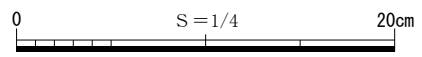
9

10



11

12



第24図 SK-01出土瓦 2



写真7 軒平瓦1の顎部接合痕



写真8 軒平瓦2の顎部接合痕

横線とX文様を単位としているようである。凹面には僅かに布目痕がみられる。

5・6は凸面に糸切り痕跡を残すものである。凹面はナデ調整で仕上げる。

平瓦は、7と8、9～12の2つのタイプがある。前者の平瓦は、長さ33cm以上、幅23cm、厚みが2.5cm前後の大きさと長方形の形態を呈し、一側辺が短く折れ曲がっているものである。この端部の跳ね上がりは1cmほどで凸面の端部は鋭いが、凹面側はあまい。また、凹面は丁寧なナデ調整をおこなうが、凸面側の調整は判然としない。後者の平瓦は、長さ25～26.5cm、幅22.5～23.5cm、厚み1.5cmほどの大きさとほぼ正方形にちかいものである。いずれも凹面は丁寧なナデ調整をおこなうが、凸面側の調整は判然としない。

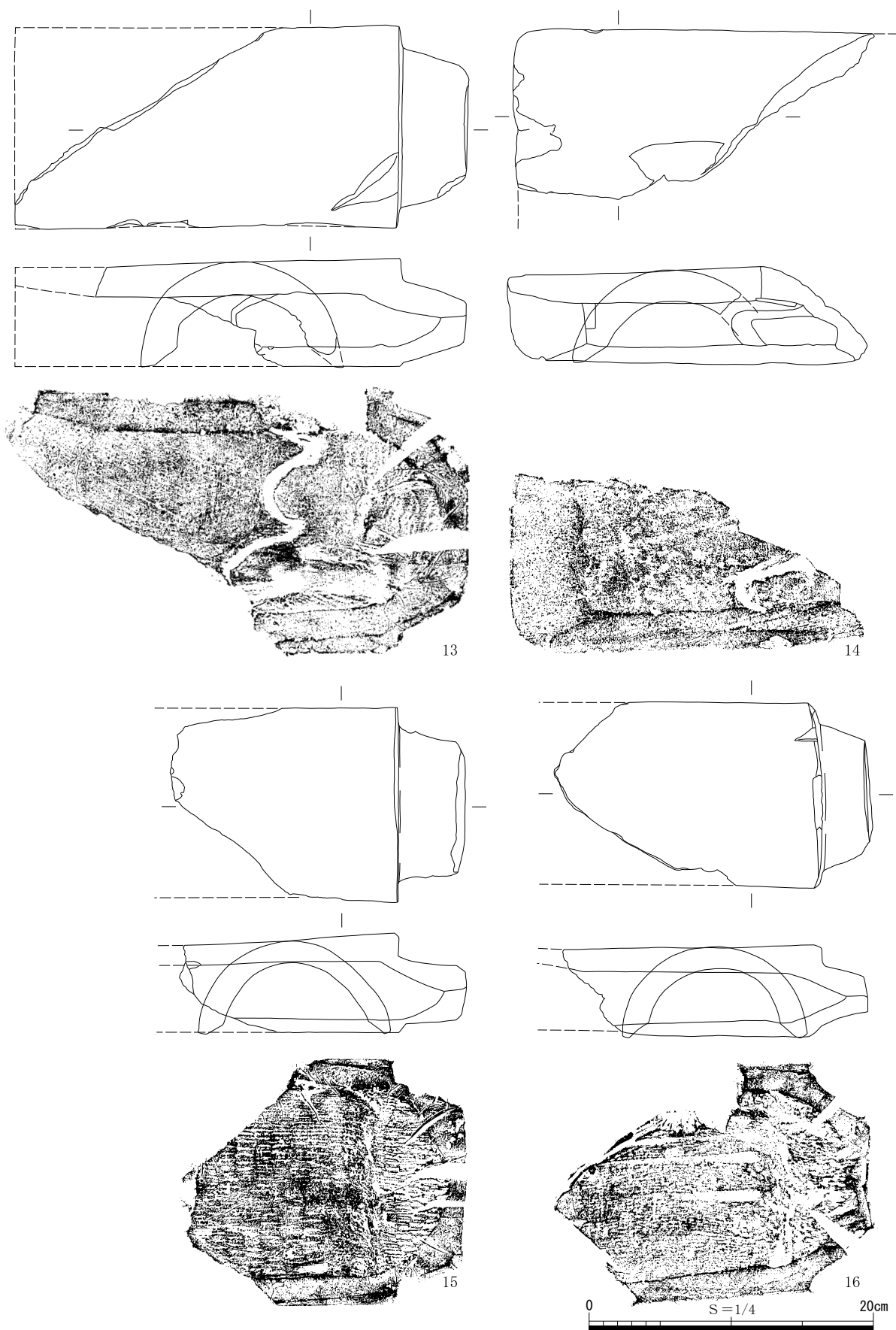
## (2) 丸瓦・雁振瓦・文字瓦

第25図-13～16は丸瓦で、大きさから2タイプに分けることができる。1つは13・14で、長さ32cm、幅14cmほどの丸瓦で、厚みが2.5cm弱のものである。2つ目は15・16で、長さは不明、幅13～13.5cm、厚さ1.5cmほどのものである。ただし、後者では15と16の玉縁部の長さが異なり、15では5cm、16では3.5cmほどで短く、かつ玉縁の取り付け角度も下がっているため、この2つは細分される可能性がある。

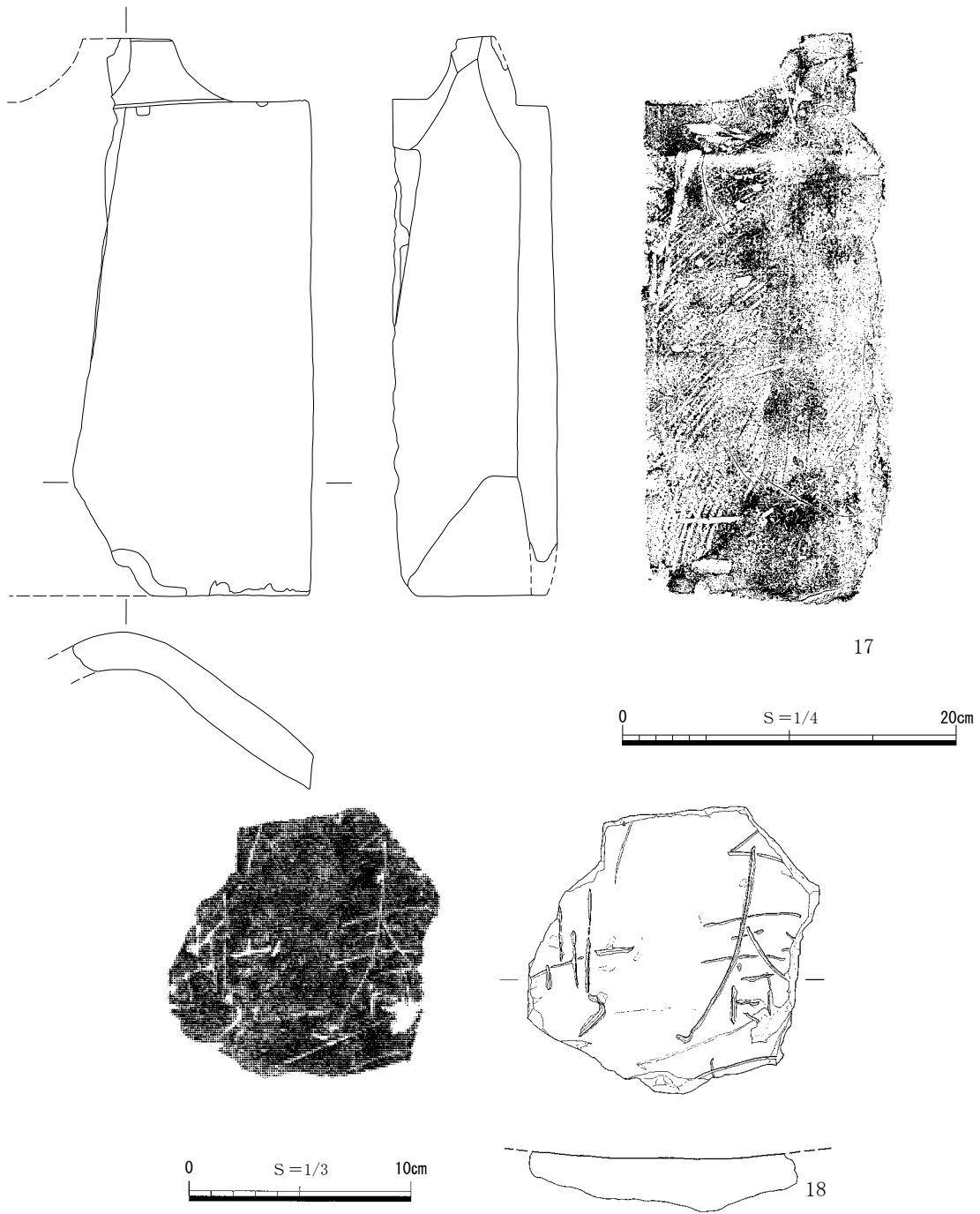
13・14の外面は、全体にナデ調整をおこなうが、縄目タタキ痕跡が僅かに残っている。内面には布目圧痕が残る。側端面と小口面の大半は大きく面取りされる。15・16の外面は、縦位のヘラナデで仕上げる。内面と側端面と小口面の状態は、前者と同様である。ただし、16の小口部には僅かに面取りが残っているため、長さは25cmほどと推定される。

第26図-17は、棟の最上を葺く雁振瓦である。断面が山形を呈し、一方に玉縁が付くものである。長さ34cmほどであるので、丸瓦13・14とセットになるものであろう。外面はナデ調整、内面は全体に布目圧痕が残るが、側辺部ちかくは糸切り痕がみられる。側辺部の面取りはないが、小口部の中央部では8cmほど幅広く削っている。玉縁部も僅かに面取りをする。

第26図-18は、平瓦凹面に書かれた文字瓦である。全容は不明であるが、**此春**の漢字が判読できる<sup>2)</sup>。また、**此**の上、**春**の上下・右側にも判読不明のヘラ描きが残る。



第25図 SK-01出土瓦 3

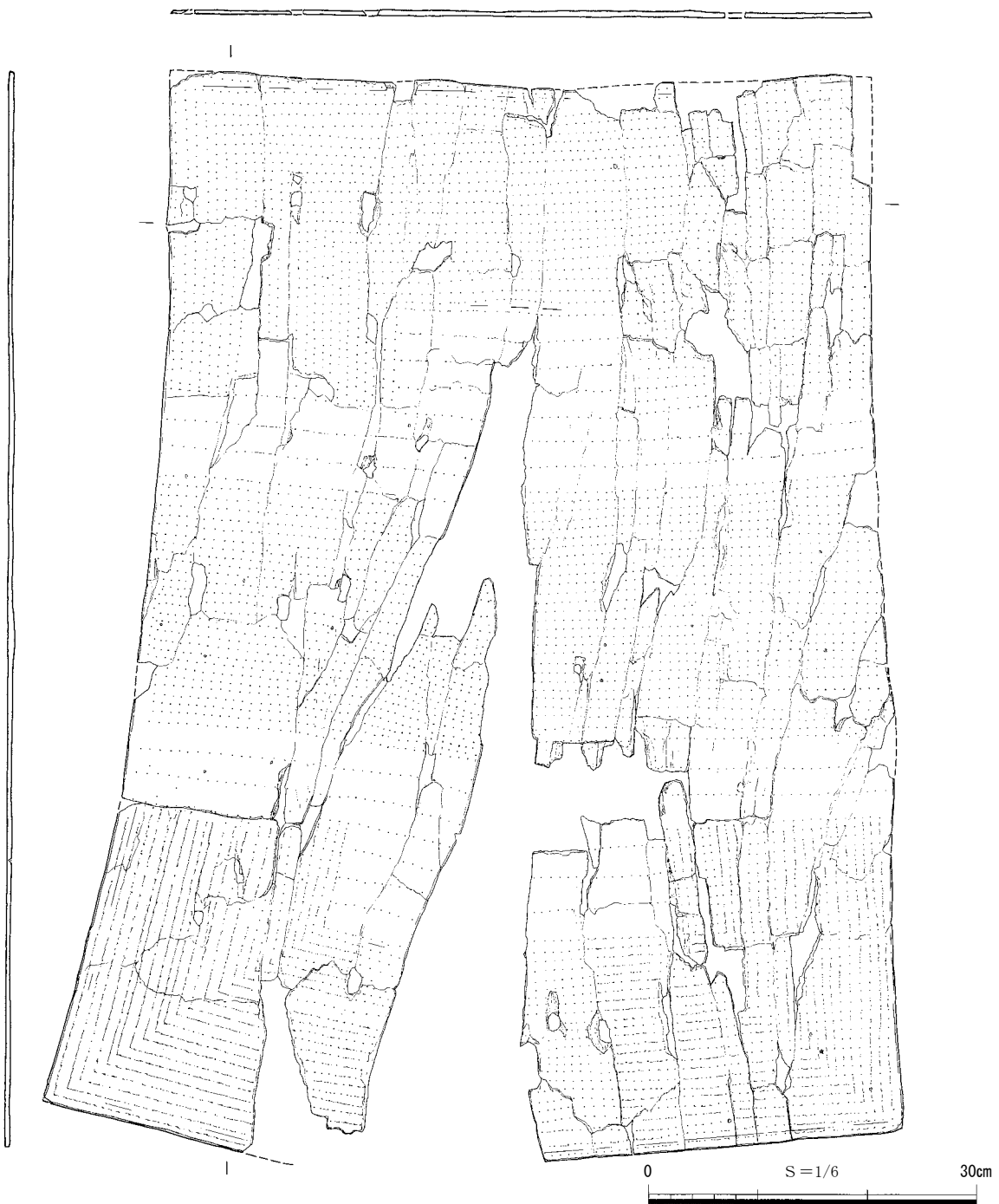


第26図 SK-01出土瓦4

### 3. 木製品

#### (1) SK-101出土木製品

SK-101の中層から一括して、木製盾・曲柄平鍬・曲柄又鍬・笊状編物が各1点、最下層上位から横槌1点が出土している。いずれも古墳時代初頭の遺物である。曲柄又鍬・笊状編物については、保管・管理が徹底できていなかったため、乾燥してしまい写真のみである。

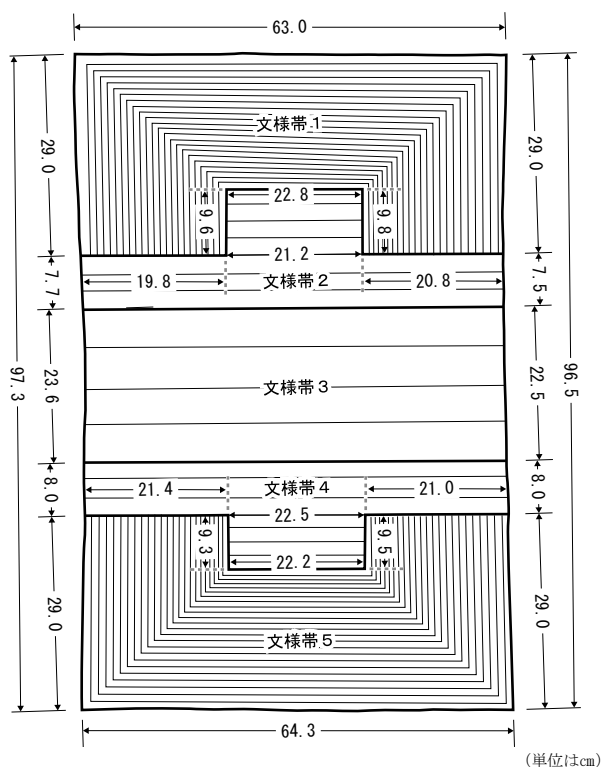


第27図 SK-101出土木製盾

第27図はオニグルミの一枚板を利用した木製盾で、ほぼ完存する。盾の厚みは0.5~0.8cmほどで、大きさに対して均一に薄く削り出している。盾は、出土時には縦1/3が重なって出土したが、ほぼ全体が揃っていた。ただし、土圧によって、その全体は細かく割れており、左半分の保存状態は悪い。これら破片はいずれも各接合面で全て接合するが、平面的に並べた場合、全体としては隙間があくことから、盾は甲張り状を呈していたと考えられる。表裏あるいは天地について、盾本体から判断する視点はなく、把手の痕跡も不明である。計測値は甲張りを呈

していたと考えられるため、湾曲度の復元が困難であり、平面での各辺を密着させて接合した場合の数値を示しておく（第28図）。上下辺はほぼ直線で水平になっているが、左右辺は中央で内湾する。

全面には、糸（紐）によって綴じたと考えられる直径0.1cmにも満たない貫通した小孔、やや楕円形を呈する孔が整然とあけられている。この小孔の大半は0.1cmほどの孔となっているが、所々でさらに小さい小孔2つが近接しているところがみられる（図版25-3）。これは、表側から綴じた時と、反対に裏側から綴じた時の孔が少しずれたためであろう。逆に同じ位置に綴じ孔がきた場合は大きな0.1cmほどの孔となったと考えられる。また、孔の形は糸の緊縛方向に拡がったものと考えられる。孔の配



第28図 木製盾模式図

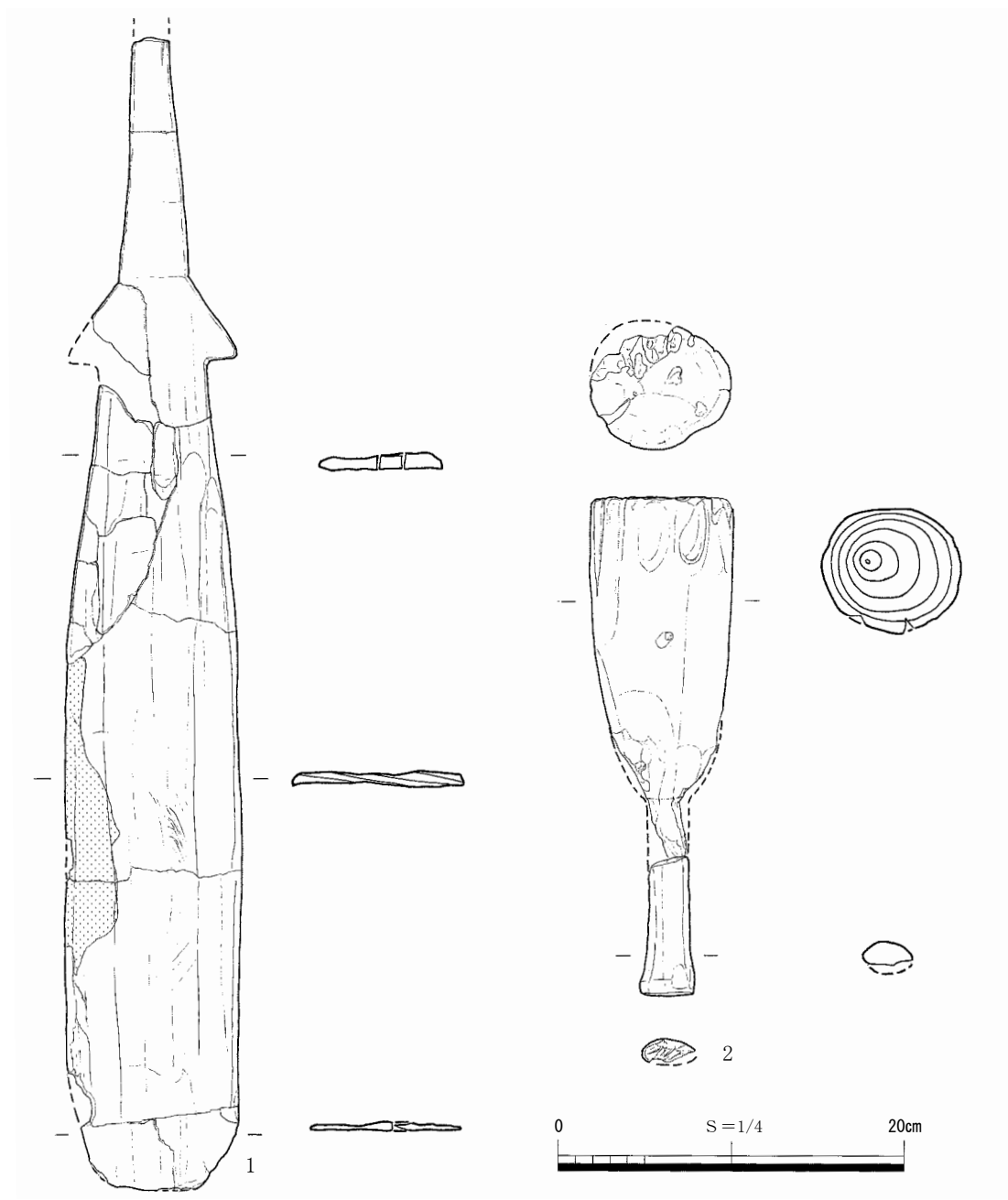
列は0.8cm前後の間隔で縦・横が微妙にずれていることから、綴じ方向が縁辺に沿っていることがわかる。これら孔の配列から文様帯は縦方向に5段で構成されている（第28図）。上から2段目に凸状、4段目到下向きの凸状空間を配する上下対称の文様で、いわゆる「鍵手文」<sup>3)</sup>、「矩形対称文」<sup>4)</sup>と呼ばれている文様を形作っている。また、この凸状部分の輪郭部分にはケビキが所々にみられるため、全体の文様構成の割付が計画的であったことがわかる。ケビキは、上記部位のほか、上・下辺端の1列目孔部分にもみられる（図版25-1・2）。上から文様帯1～5として説明する。なお、上記の小孔以外にもランダムなやや大きい孔があるが、植物の根などによるものと判断した。

文様帯1と文様帯5は、24条から成る孔列で上辺と左右辺、下辺と左右辺がともに平行するように孔列が並んでいることから、逆「凹」・「凹」形の文様帯となっている。いずれも文様帯2と文様帯4に接する孔列は、横方向で文様を画する区画線となっている。

文様帯3は盾中央の文様帯で、28条から成る横直線文様である。ただし、両側辺部の孔列1条は横方向でなく側辺に平行して縦方向に並んでおり、区画線となっている。

文様帯2と文様帯4は、「凸」・逆「凸」形でその内部も前者と同様に横方向に孔列が並び、孔列の間隔も0.8cm前後である。横直線文の上下間の間隔は、2.5cmほどと広い。両側辺まで及ぶ横直線文は2条、凸部の横直線文は4条で構成されている。

第29図-1は曲柄平鋏の身部で、ほぼ完存している。刃部は、その側辺がほぼ平行してのびるタイプで、軸部に比較してかなり長い。軸部と笠部の屈曲部は明瞭である。樹種はイチイガ



第29図 SK-101出土曲柄平鋤・横槌

シの可能性がある。全長約66.6cm、身部幅10.1cmである。

第29図-2は横槌で、ほぼ完存しており、敲打部と柄部から成る。敲打部は、基部に向かって緩やかに細くなっており、ちょうど砲弾を逆さにした形態である。敲打部の頂部は平坦に仕上げている。敲打部には、使用による凹み等はみられない。柄部は敲打部に対して細い棒状で、その界は明瞭に作っている。柄の基部は肥厚し、基部の底面は平坦である。全長29.0cm、敲打部の厚み8cm、柄部の厚み2.9cmである。



## 4. 石製品・土製品

### (1) 石製品

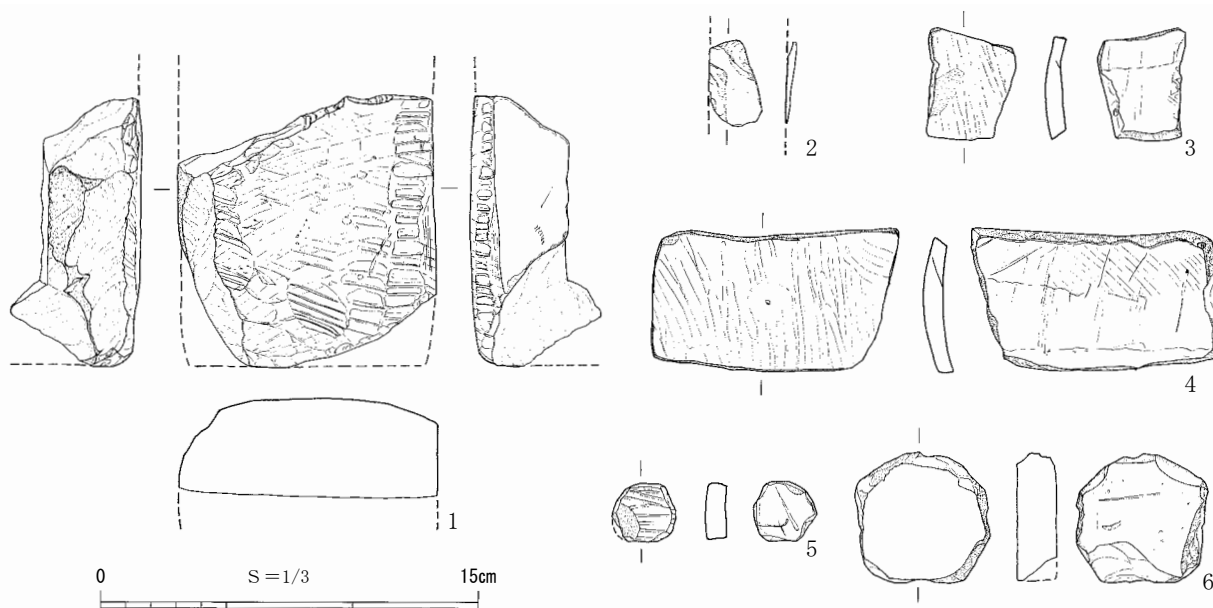
石製品は2点のみである。第30図-1は、用途不明の石製品である。欠損部分が多く全体は不明であるが、直方体状を呈するようである。立方体の3面は残存しており、中央の幅広の面はやや膨らみながら上方へ伸びる。この面は、横位方向のケズリの鑿痕跡が明瞭に残るが、中央部はこの痕跡を消すように磨いている。両側辺は、平滑で丁寧な磨かれている。下面は、中央面から僅かな屈曲面がみられるため、底部ちかくであることがわかる。その他の面は石の摂理面で欠損している。SK-01の上層から出土したもので江戸時代の所産と考えられる。

第30図-2は砥石である。上面と1側面のみが残存する小片で、長方形を呈する可能性がある。微細粒の砥石で、研ぎ面は平滑になっている。SK-102の第1層から出土したもので、遺構からは中世以降であるが、砥石の形態・石質から江戸時代の可能性が高い。

### (2) 土製品

土製品は4点出土した。第30図-3・4はいずれもSK-101出土で、3は上層下位、4は上層中位から出土した。同一個体の壺胴部片で、壺胴中央部の接合部から上半にかけての破片である。いずれもそれほど顕著でないが、土器破面の周囲を磨いて長方形の形態にしている。これが、土器破損後の自然的な磨耗なのかどうか検討は必要だが、土器の内外面には磨耗がなく破面のみであることから、人為的なものと判断した。

第30図-5・6は円板である。5はSK-101の上層上位出土で、遺構・層位からは古墳時代初頭になるが、円板は須恵質の中世陶器片と推定されることから、中世以降の遺物でSK-101には混在したものであろう。打ち割って円板状にしたもので、破面には研磨痕はみられない。土器外面にはタタキ痕、内面はナデである。6はSK-01上層から出土したもので、平瓦を打ち割って円板状にしたものである。破面には一部、研磨がみられる。



第30図 石製品・土製品

## 註

- 1) 山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊 奈良国立文化財研究所
- 2) 天理大学教授 谷山正道先生の判読による。
- 3) 櫻井久之 2006「鍵手文の盾 一文様から見た石上神宮鉄盾の出現背景―」『大阪歴史博物館 研究紀要』第5号 財団法人大阪市文化財協会
- 4) 橋本達也 1999「盾の系譜」『国家形成の考古学―大阪大学考古学研究室10周年記念論集―』大阪大学考古学研究室

## VI. まとめ

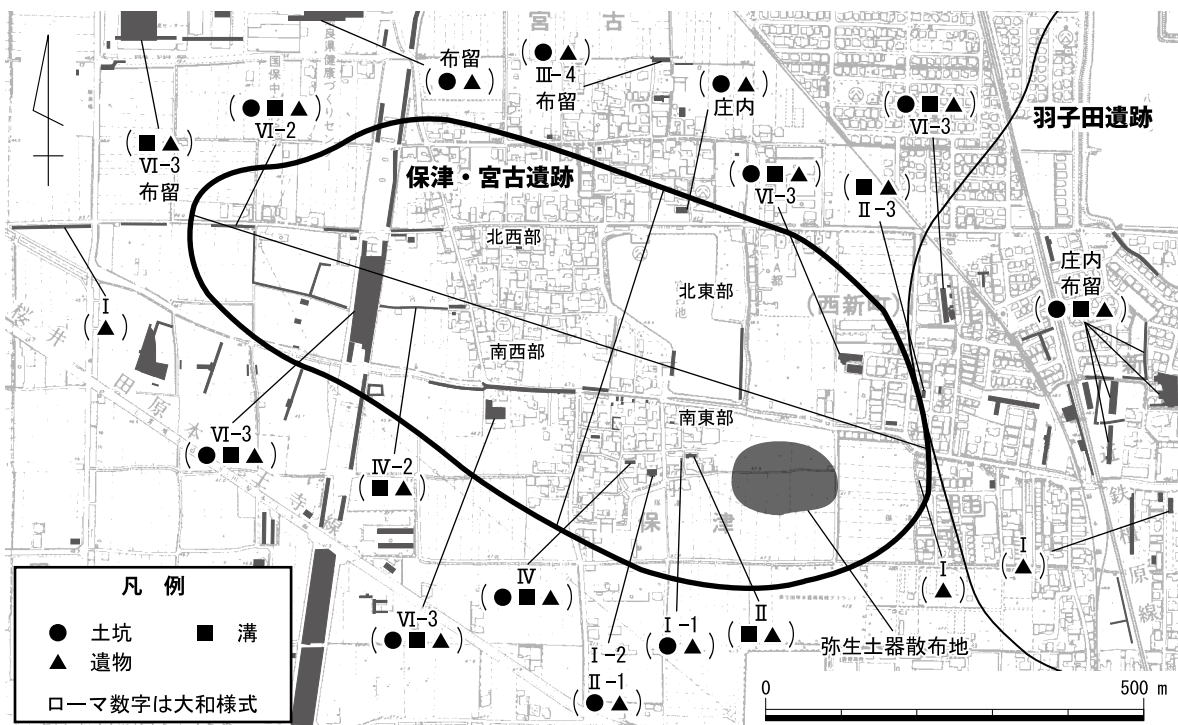
### 1. 保津・宮古遺跡の弥生から古墳時代集落と常楽寺推定地

今回の発掘調査では、小規模な調査ながら古墳時代初頭の井戸と江戸時代の井戸等を検出したので、これらの成果をもとに現時点での遺跡の動向を整理しておく。近年、保津・宮古遺跡の発掘調査は増加しつつあるが、このような発掘調査が進展する以前において、保津・宮古遺跡（旧保津遺跡）は、弥生時代の拠点集落として重要な位置を占めていた<sup>1)・2)・3)</sup>。しかし、調査が進展してきた現時点において、弥生集落としてどのように位置づけられるのか、まとめておきたい。

保津・宮古遺跡の範囲については、保津・宮古遺跡地内及びその周辺遺跡での約55件の発掘調査により、逐次、その成果を反映させて遺跡の拡大や分離などをおこない、現在の状況に至った。このことについては、本報告の「II. 3. 保津・宮古遺跡の学史と既往の調査」において詳述したところであるが、このような遺跡範囲の変遷の原因は、第1に保津・宮古遺跡を弥生環濠集落として認識できなかったこと、第2に古墳時代以降の遺跡の性格と範囲が錯綜したことにあろう。このようなことから、まずは弥生集落としての保津・宮古遺跡を検討しておこう。

現在の保津・宮古遺跡は、長軸約1km、短軸約0.5kmの範囲を占有する大遺跡である。その範囲は、南東から北西方向に主軸をもち楕円形を呈している。このような大遺跡であるが、調査面積はごく僅かでその内容は断片しか知ることができない。ここではその僅かな内容について検討し、遺跡の変遷と内容を把握することにしよう。まず、検討するにあたって、楕円形を呈する遺跡の主軸に対して4分割し、南東部・北東部・南西部・北西部と地区割をし、遺構遺物の状況を説明しよう（第31図）。南東部地区は、現在の保津集落から南東方向の範囲で、羽子田遺跡に接する。ただし、現在の行政上でこの範囲を限っているだけであるので、後述するように弥生遺物の分布はさらに南東方向に広がりを見せる。この地区では、弥生時代前期の遺構遺物が検出されている。特に現保津集落内部で実施した第31次調査では、大和第I-1-b様式の土坑と広口壺の完形品が出土しており、集落の営みが前期でも古い段階から始まったことを示している<sup>4)</sup>。弥生時代前期の遺物分布の中心は、この調査地点から南東部にかけての畑地であるようで、羽子田遺跡地内の調査においても前期土器の散布がみられる。ただし、現保津集落内部での発掘調査は7件実施しているが、遺構遺物の分布状況は疎らである。このことは、前期の中心が南東の畑地にあるにしても広範囲を占有するような集落でないことを示している。また、中期から後期にかけても遺構遺物は前期同様、疎らな状況であり、低地部の中期拠点集落にみられるような濃密な遺構遺物の状況とは比較にならない。

北東部と北西部の地区は遺跡主軸の北半部分で、現在の宮古池を挟んで両側に展開する範囲である。この両地区の発掘調査の成果は少ない。中心にある宮古池は、近世以降に掘削された



第31図 保津・宮古遺跡周辺の弥生から古墳時代の遺構・遺物分布図 (S= 1/10,000)

ものであるが、掘削時の状況から判断すれば、弥生から中世に至る遺構遺物の分布はそれほどでもなかったと言えよう。宮古池の南側への拡張は明治23年であり<sup>5)</sup>、松本俊吉氏の報告<sup>6)</sup>で、中世?の井戸が僅かにある程度で、仮に宮古池底に弥生集落等が展開していたならば、唐古池と同じような状況になり、それなりの伝聞が残ったと考えられる。残念ながら地元に残されたのは、弥生時代後期と古墳時代前期の壺2点(本報告II. 3. 第6図)のみである。これらは完形品であることから、井戸への供献土器で偶然、残ったものであろう。また、遺跡北西部にあたる常楽寺推定地第5次調査では、大和第Ⅲ-4様式の土坑2基を検出<sup>7)</sup>しているが、単発的で周辺への展開がみられない。以上のことから弥生集落としての広がり、面的な展開はなかったと考えられる。

南西部の地区は、現保津集落の西端から北西方向に伸びる範囲である。この地区では京奈和自動車道建設に伴う事前調査により3,300㎡の広範囲にわたって発掘調査が実施された<sup>8)</sup>。広範囲の調査であったが、弥生時代の遺構遺物の状況は後期の溝1条、土坑12基のみで大規模な集落が展開した状況ではなかった。ましてや弥生時代前期から中期の状況はほとんどみられないことから、この地区で継続的に集落が営まれたとは言えない。

以上のことから、学史的にも古くから弥生土器が出土する遺跡として認識されてきた保津・宮古遺跡(旧保津遺跡)であるが、各地区の内容を検討すると、拠点集落として認識するにはかなり無理がありそうである。ただし、第Ⅰ様式前半段階から集落が始まる点は注目される。この段階からの集落は、その後、拠点集落に発展する傾向がみられ、この点において保津・宮古遺跡は拠点集落へと発展する要素は有していたといえるだろう。しかし、本遺跡の場合、検

討してきたように中期段階に集落が拡大・充実するような傾向は現時点ではみられない。このことは、奈良盆地低地部で展開する環濠を有するような大規模な拠点集落－唐古・鍵遺跡や平等坊・岩室遺跡、坪井・大福遺跡など－と比較してかなり違和感のあるもので、環濠の有無も含め、中期の集落の展開を確認していく必要がある。

集落の中心部分は遺跡の南東部地区で、後期後半段階にはその周辺部にも散在的に展開していったと推察される。このような状況は、奈良盆地の後期後半の集落の動向と同様であるので、その一連の展開として理解して良いであろう。集落の継続性についても遺構・遺物の分布に偏りがみられることから、時代ごとの遺構・遺物の推移をみて集落の変遷をとらえることが今後の課題になろう。

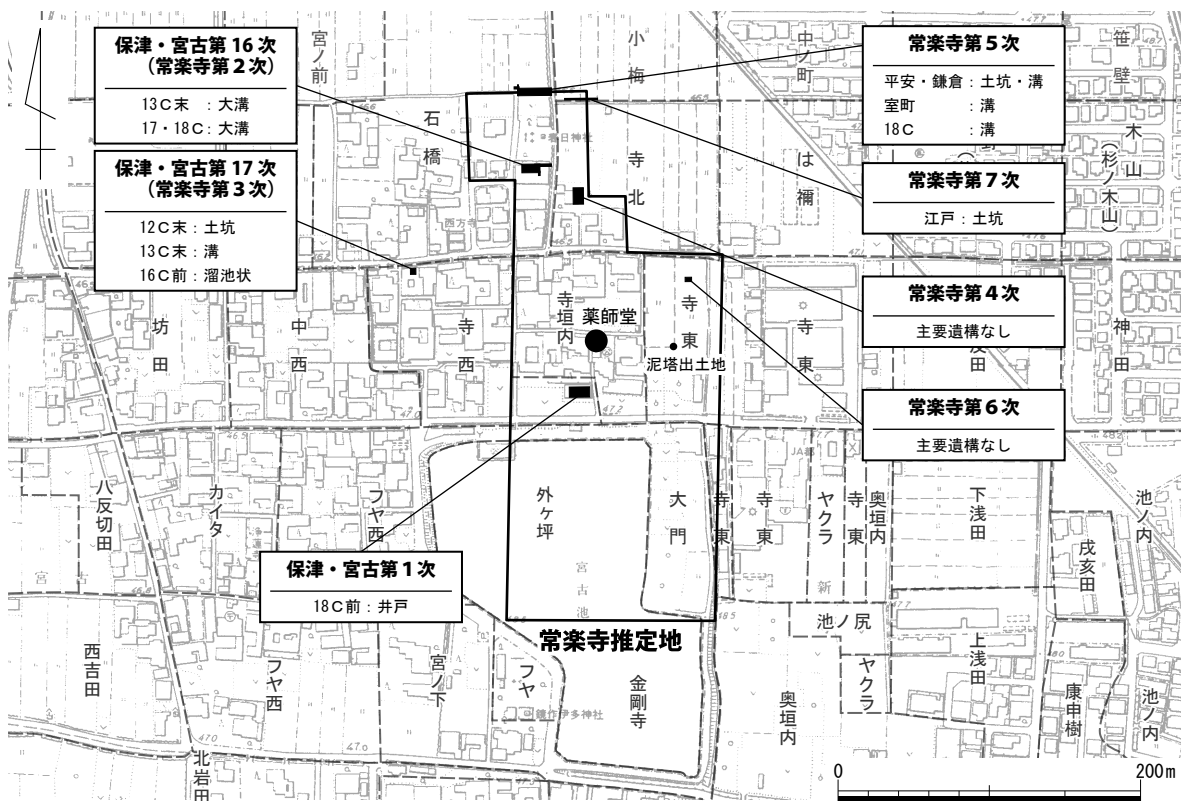
第2番目として古墳時代前期の集落の展開を検討しておく。今回の調査では庄内期の井戸を検出したわけであるが、この時期の遺構遺物は把握されておらず、集落動向は今のところみえない。次期の布留期になると前述、常楽寺推定地第5次調査で土坑2基を検出、また、京奈和自動車道建設地の調査やさらに北西部にあたる保津・宮古遺跡第3・4・8次調査（現宮古北遺跡）でも散在的ではあるが、土坑・溝を検出している。特に第3次調査では集落を区画するような2条の溝を検出しており、この地区を中心に展開している可能性がある<sup>9)</sup>。

一方、南東部側では隣接する羽子田遺跡で庄内期から布留期にかけてかなりの密度で遺構が分布している。古墳時代集落としてのまとまりは、保津・宮古遺跡より羽子田遺跡にあるらしい。したがって、保津・宮古遺跡における遺構分布は羽子田遺跡の周辺部に展開していたような状況であったと考えられよう。

第3番目に常楽寺推定地について検討しよう。常楽寺がどのような建物配置で構成されていたかは不明であるが、以下、3点について現状で把握できる。1. 文献では室町時代の『三箇院家抄』にその名が見える<sup>10)</sup>。2. 小字「寺垣内」内に所在する薬師堂に9世紀末の薬師如来坐像が安置されている<sup>11)</sup>。3. 薬師堂の東50mに宝篋印塔を祀った塚が存在した（現在は移設）<sup>12)</sup>。また、その塚からは泥塔が出土している。

今回の調査地は薬師堂の南30mにあたり、発掘調査では江戸時代の井戸1基を検出した。この井戸が常楽寺に帰属するものかどうかについては、判断しがたい。ただし、井戸から出土した遺物の中に多数の瓦が含まれていた。これら瓦は15世紀前半頃を古相とし、16～17世紀代のものと推定される<sup>13)</sup>。これら中世から近世にかけての瓦は、その出土位置からして常楽寺に由来する可能性が高いであろう。とすれば、室町時代から江戸にかけて何らかの建物が調査地周辺に存在し、江戸時代後半にはその一部が取り壊されるか一部修復された可能性がでてくるであろう。このことは、文献で示されていた常楽寺の時代と合致することになるが、その上限と下限については現時点では明らかにできない。ただし、上記3の塚の存在から考古学的には鎌倉時代まで遡る可能性がある。

このほかに薬師堂を中心とした100mほどの範囲にあたる常楽寺推定地周辺での発掘調査を検討しておこう。本報告の第1次調査のほかに6ヶ所の調査がある。それらの成果をまとめた



第32図 常楽寺推定地の遺構・遺物分布図 (S=1/5,000)

のが第32図である。これらの調査で常楽寺との関わりを積極的に示す遺構遺物は検出されていない。薬師堂の北北西125mの保津・宮古遺跡第16次調査（常楽寺推定地第2次）では13世紀末の東西大溝と江戸時代の溝を検出している<sup>14)</sup>。近世大溝は北側に隣接する春日神社との関連が想定されるが、13世紀の溝は常楽寺に関連する可能性もあるだろう。さらに北50mにあたる常楽寺推定地第5次調査では平安時代から鎌倉時代、室町時代、江戸時代の3期にわたる溝が検出されている<sup>15)</sup>。北側に隣接する宮古石橋遺跡（中世居館？）との関連を示す溝や常楽寺推定地の北限を示す溝とも推定されるが、積極的に寺域を示すものではない。

また、薬師堂の北西125mの保津・宮古遺跡第17次調査（常楽寺推定地第3次）では、12世紀末の土坑・13世紀末の溝・16世紀前半の溜池状遺構が検出されている<sup>16)</sup>。これらの遺構も常楽寺関連を示すかどうかは判断できない。

以上のことから、常楽寺の建立が9世紀末の薬師如来坐像まで遡る考古資料の出土はみていない。むしろ、筋違道沿いの特に西側においてはかなりの密度で古代の遺構遺物が検出されているのに対し、東側の現宮古集落内（常楽寺推定地）では古代の遺構遺物がなく、空白地帯であった可能性がある。常楽寺を含めた周辺では12世紀頃から何らかの遺構が見られるようになり、室町時代以降はかなりの密度で遺構が展開するようである。おそらく常楽寺もこれらと連動するように寺院が展開していったと考えてよからう。ただし、江戸時代の状況は、薬師堂のみを残すような状態で現宮古集落の景観にかなりちかひものと推定され、かなり衰微した状況であったと推察される。

## 2. 出土遺物について

今回の発掘調査で特筆すべき遺物は、古墳時代初頭の井戸中層から一括出土した木製盾や曲柄平鍬、又鍬、箠である。まず、これら遺物がほぼ完形で出土したことからその性格について考える必要がある。井戸中層からの出土であったので、清水を汲み上げるような井戸機能がほぼ停止した状態であったと考えられる。また、井戸を廃棄するための儀礼とするには、木製品を投棄後も滞水状態を示す粘土層の堆積があり、意識的な埋め土はみられないことからこれも否定的に考えられよう。したがって、井戸との関連で考えるより、たまたま投棄した場所が井戸であって、その性格はこれら一括遺物に求められよう。

木製盾は、塗彩は認められないものの整然と並んだ多数の小孔から糸（紐）による文様が想定されるものである。このような小孔は弥生時代中期以降の木製盾にも認められることから、弥生時代以来の系譜で考えて良さそうである。しかし、弥生時代の盾は並行する小孔の間隔が粗いのに対し、この盾は1 cmほどの緻密な間隔になり、その間には上下対称の凸状文様帯（矩形対称文・鍵手文）を構成するという特徴を有している<sup>17)・18)</sup>。このような文様構成をとる盾は古墳時代以降にみられるものであり、本盾はその出現期にあたると考えられることからその系譜を考える上で重要な位置を占めている。

また、盾とともに出土した他の遺物も注目される。箠（籠）の呪力や盾の辟邪<sup>19)</sup>、農具で構成される遺物群は、除魔の機能をもたせたものであり、農耕儀礼に伴う遺物の一括廃棄の可能性があるだろう。

これら遺物の所属時期であるが、上層から完形・半完形の土器8点が出土している。これら土器は、在地の土器で庄内式甕を伴っていないことから編年的な位置づけが難しいところもあるが、高坏や小形鉢から庄内式の新しい時期に所属すると考えられよう。また、伊勢湾系土器が一定量含まれており<sup>20)</sup>、本地域周辺との動向も今後、注意していく必要があるだろう。

### 註

- 1) 石野博信 1973「大和の弥生時代」『橿原考古学研究所紀要』第二冊
- 2) 寺澤薫 1979「大和弥生社会の展開とその特質－初期ヤマト政権成立史の再検討－」『橿原考古学研究所論集』第四
- 3) 藤田三郎 1999「奈良盆地における弥生遺跡の実態」『考古学に学ぶ－遺構と遺物－』同志社大学考古学シリーズⅦ
- 4) 清水琢哉 2004「保津・宮古遺跡第31次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報13 2003年度』田原本町教育委員会
- 5) 宮本誠 1984「田原本の溜池」『田原本の歴史』第3号 田原本町
- 6) 松本俊吉 1939「宮古池の事ども」『磯城』第2巻第4号
- 7) 奥谷知日朗 2006「常楽寺推定地第5次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報15 2005年度』田原本町教育委員会
- 8) 橋本裕行 2009『保津・宮古遺跡第10・11次調査報告』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第104冊
- 9) 今尾文昭・藤田三郎 2003『保津・宮古遺跡第3次発掘調査報告』奈良県文化財調査報告書第100集 奈良県立橿原考古学研究所

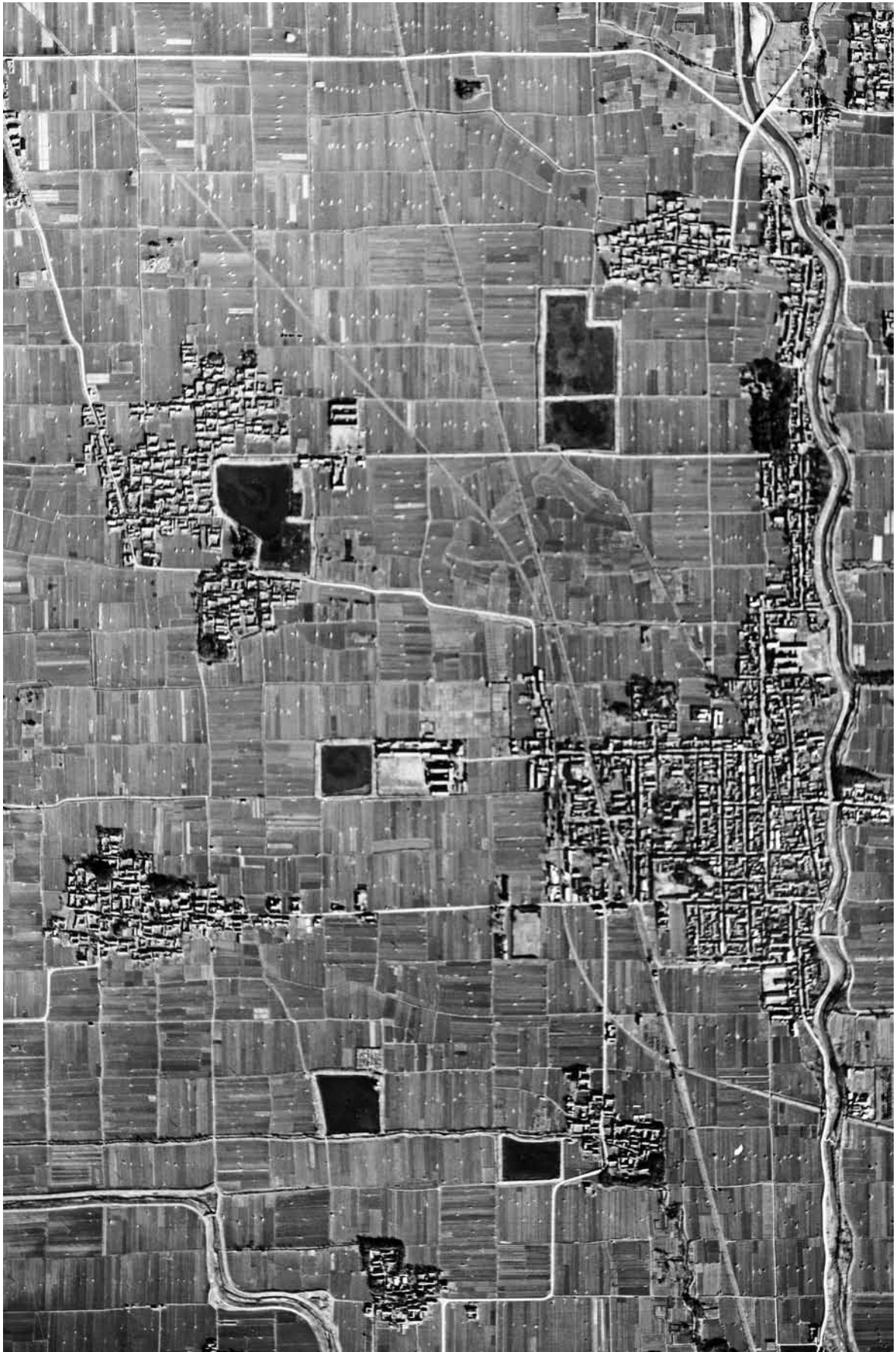
- 10) 田原本町史編さん委員会 1986『田原本町史 資料編第2巻』
- 11) 田原本町教育委員会 1984『田原本町の佛像』
- 12) 野淵龍潜 1893『大和國古墳墓取調書』
- 13) 毛利光俊彦・佐川正俊・花谷浩 1992「法隆寺の至寶 瓦」『昭和資財帳15』
- 14) 清水琢哉 1997「保津・宮古遺跡第16次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報6 1996年度』田原本町教育委員会
- 15) 奥谷知日朗 2006「常楽寺推定地第5次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報15 2005年度』田原本町教育委員会
- 16) 豆谷和之 1997「保津・宮古遺跡第17次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報6 1996年度』田原本町教育委員会
- 17) 橋本達也 1999「盾の系譜」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室編
- 18) 櫻井久之 2006「鍵手文の盾」『大阪歴史博物館 研究紀要 第5号』財団法人 大阪市文化財協会
- 19) 辰巳和弘 1992『埴輪と絵画の古代学』白水社
- 20) 富山大学准教授 次山淳氏のご教示。





# 図 版





1. 上空から見た遺跡全景1 写真上が北（1948年撮影）  
※この写真は、米軍撮影（国土地理院所有）の空中写真を拡大加工したものである。



1. 上空から見た遺跡全景2 写真上が北 (2005年撮影)



1. 北西上空から見た遺跡全景3 (2005年撮影)



2. 北西上空から見た遺跡近景 (2005年撮影)



1. 調査前の状況



2. 土坑調査風景



3. 調査後の状況



1. 調査区全景・完掘状況（西から）



2. 調査区全景・完掘状況（東から）





1. 遺構検出状況  
(西から)



2. SK-101検出状況  
(南から)



1. SK-101上層上位遺物  
出土状況1 (南から)



2. SK-101上層上位遺物  
出土状況2 (南から)



3. SK-101西壁土層断面  
(東から)



1. SK-101中層遺物出土状況1（南から）



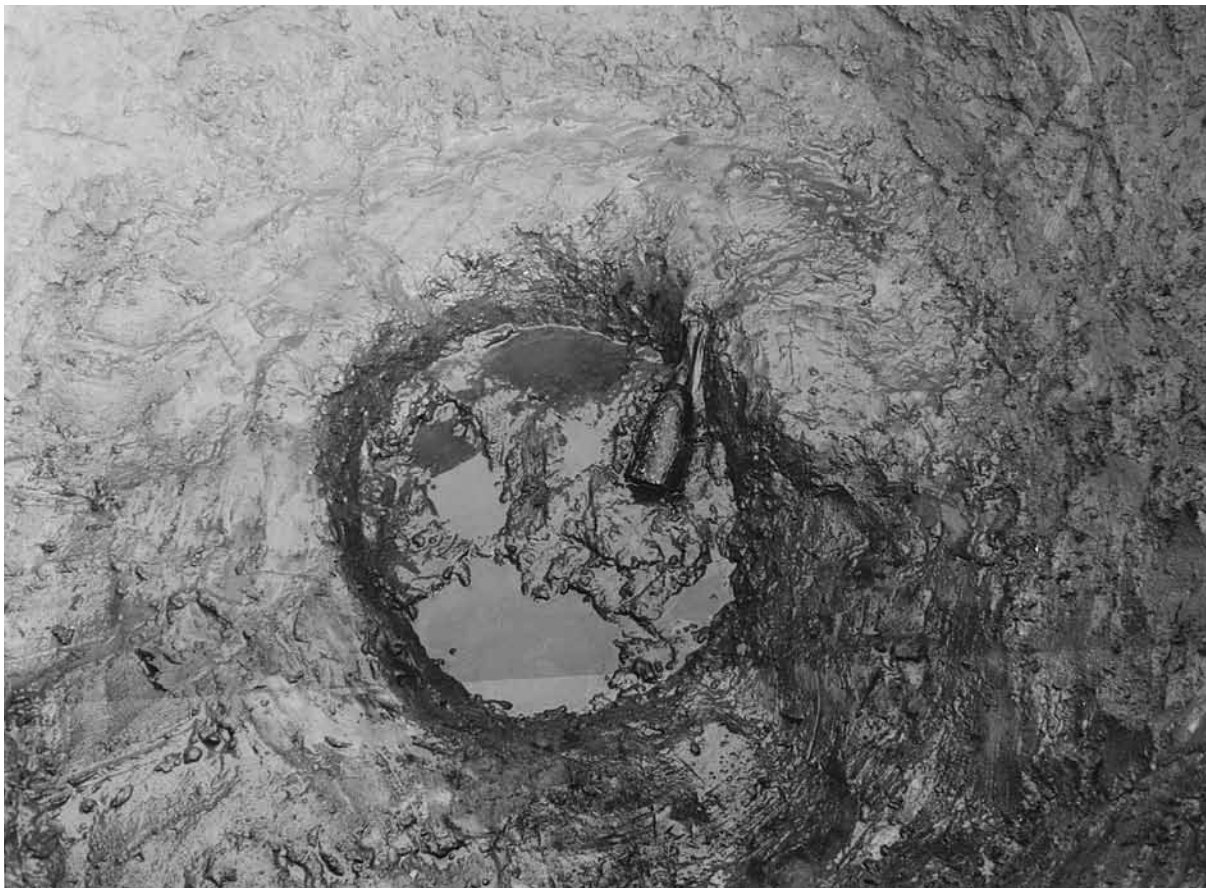
2. SK-101中層遺物出土状況2（東から）



1. SK-101中層遺物出土状況1（南から）



2. SK-101中層遺物出土状況2（南から）



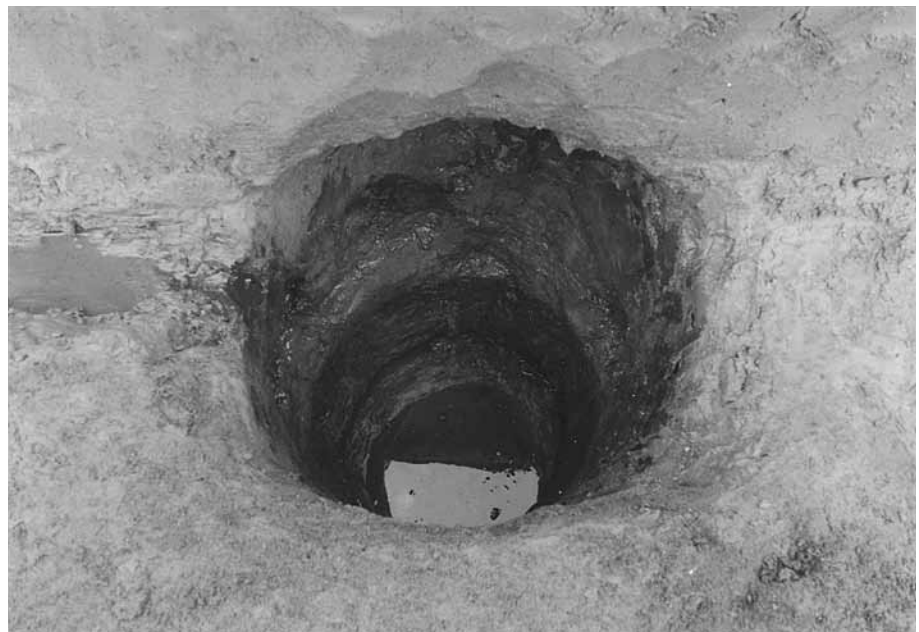
1. SK-101最下層上位遺物出土状況（南から）



2. SK-101完掘状況（南から）



1. SK-102完掘状況  
(北から)



2. SK-01完掘状況  
(南から)



3. SD-101・101W完掘状況  
(北東から)

図版12  
遺物1  
土器1 (SK-101)



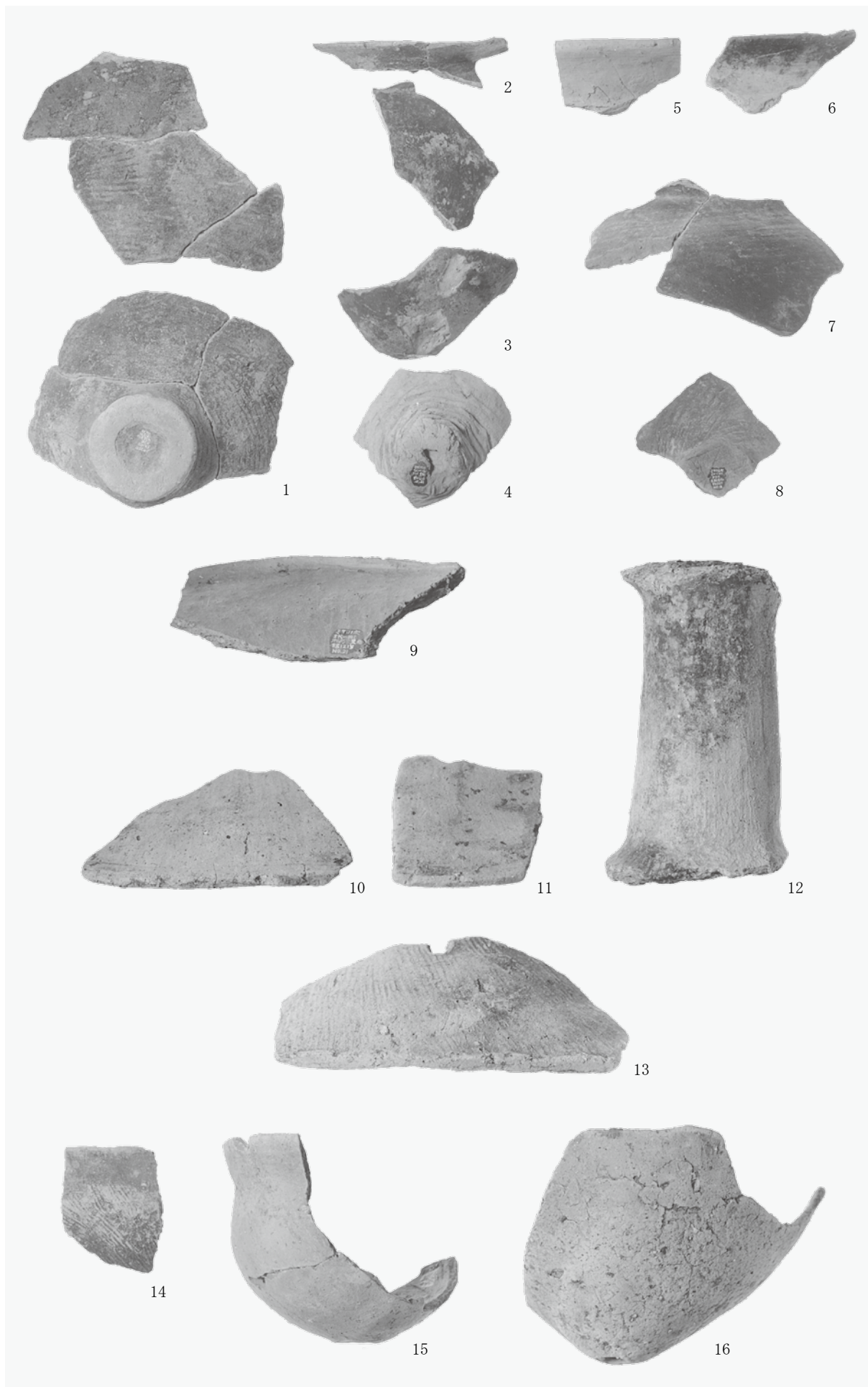
1・3 : SK-101中層、2・4 : SK-101上層上位、5 : SK-101上層下位



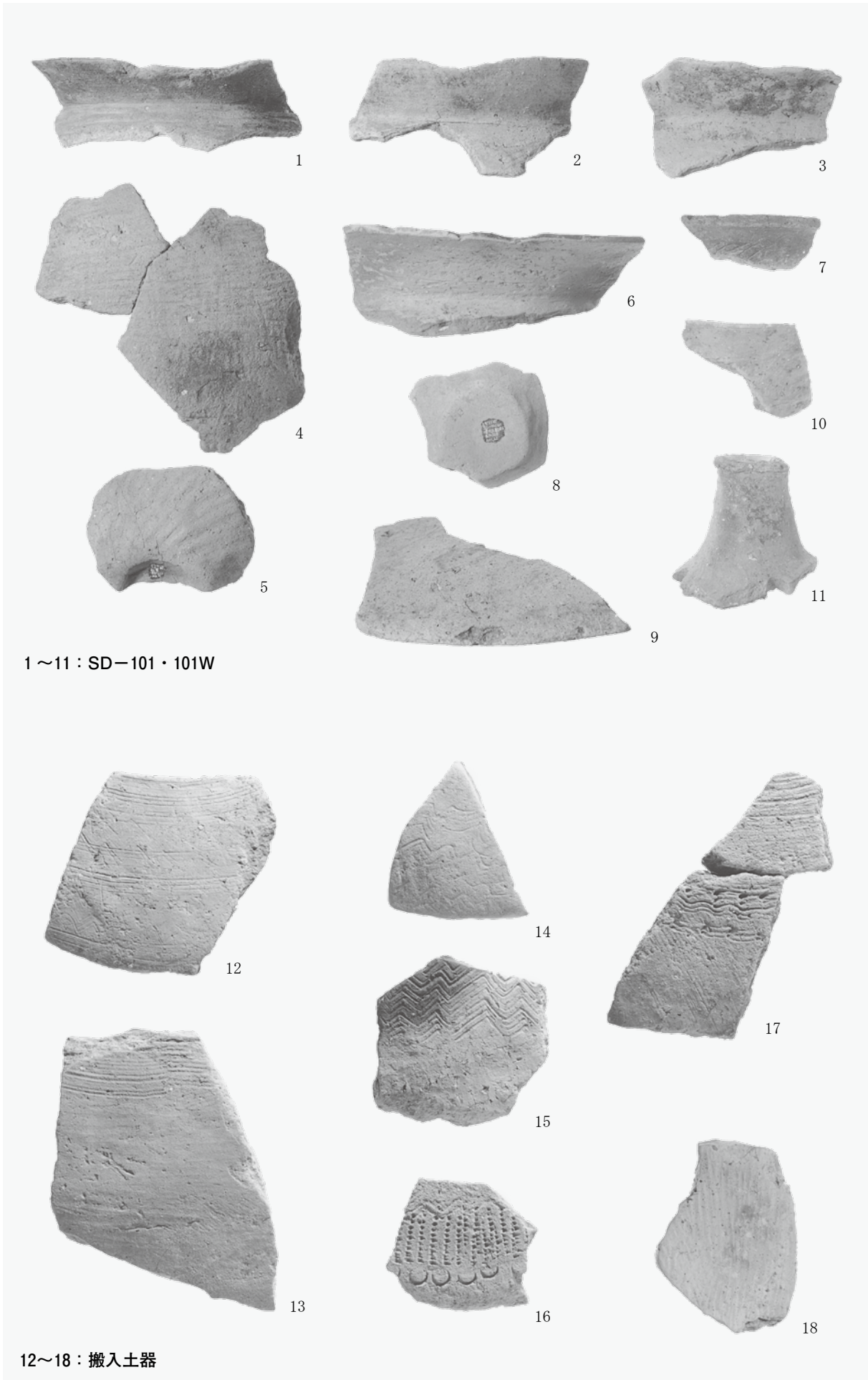
1・3～7：SK-101上層上位、2：SK-101上層下位



図版14  
遺物3  
土器3 (SK-101)



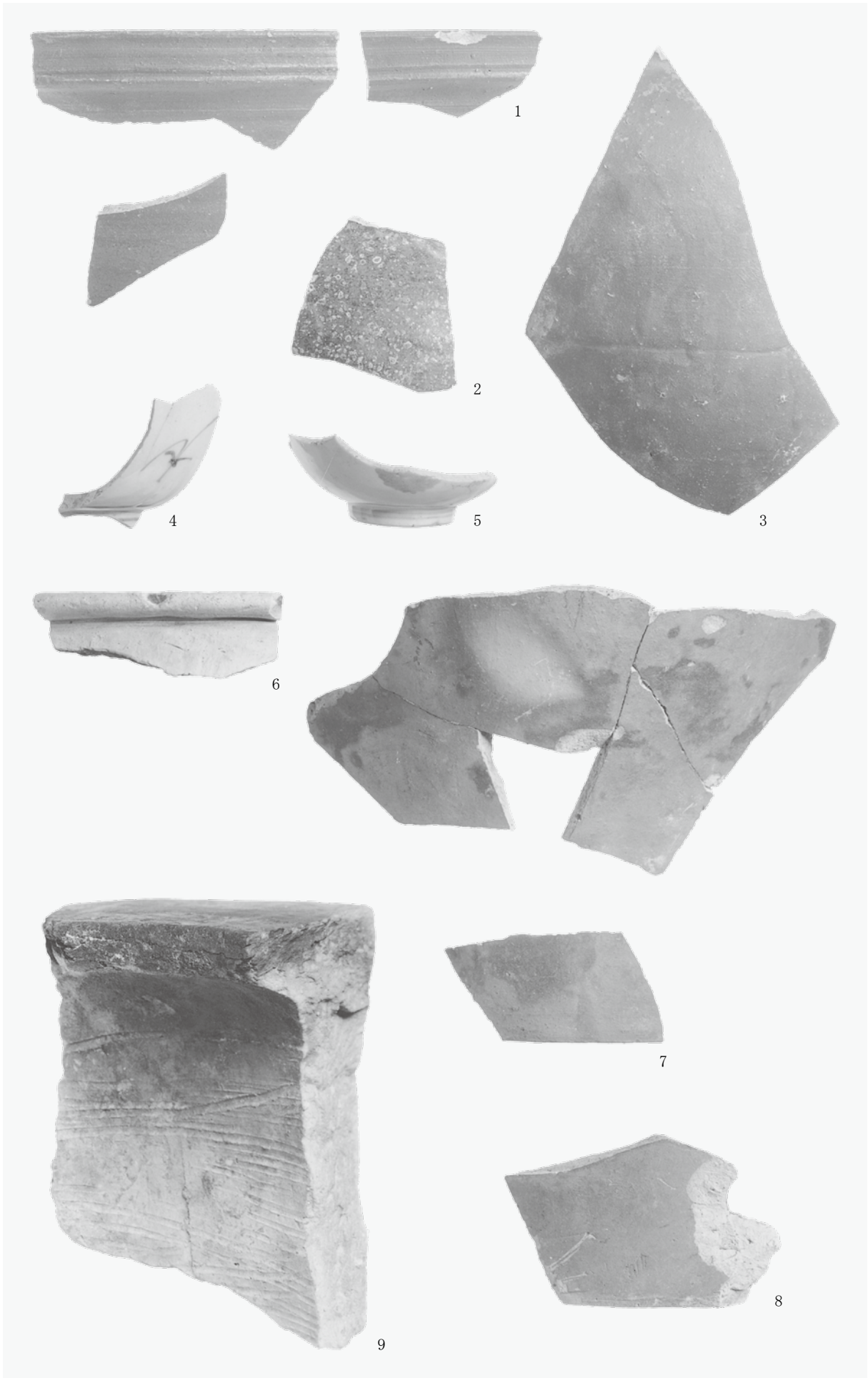
1・2・7・8・14・15：SK-101上層下位、4・9：SK-101下層、3・5・12：SK-101最下層上位、  
6：SK-101上層中位、10・11・13・16：SK-101上層上位



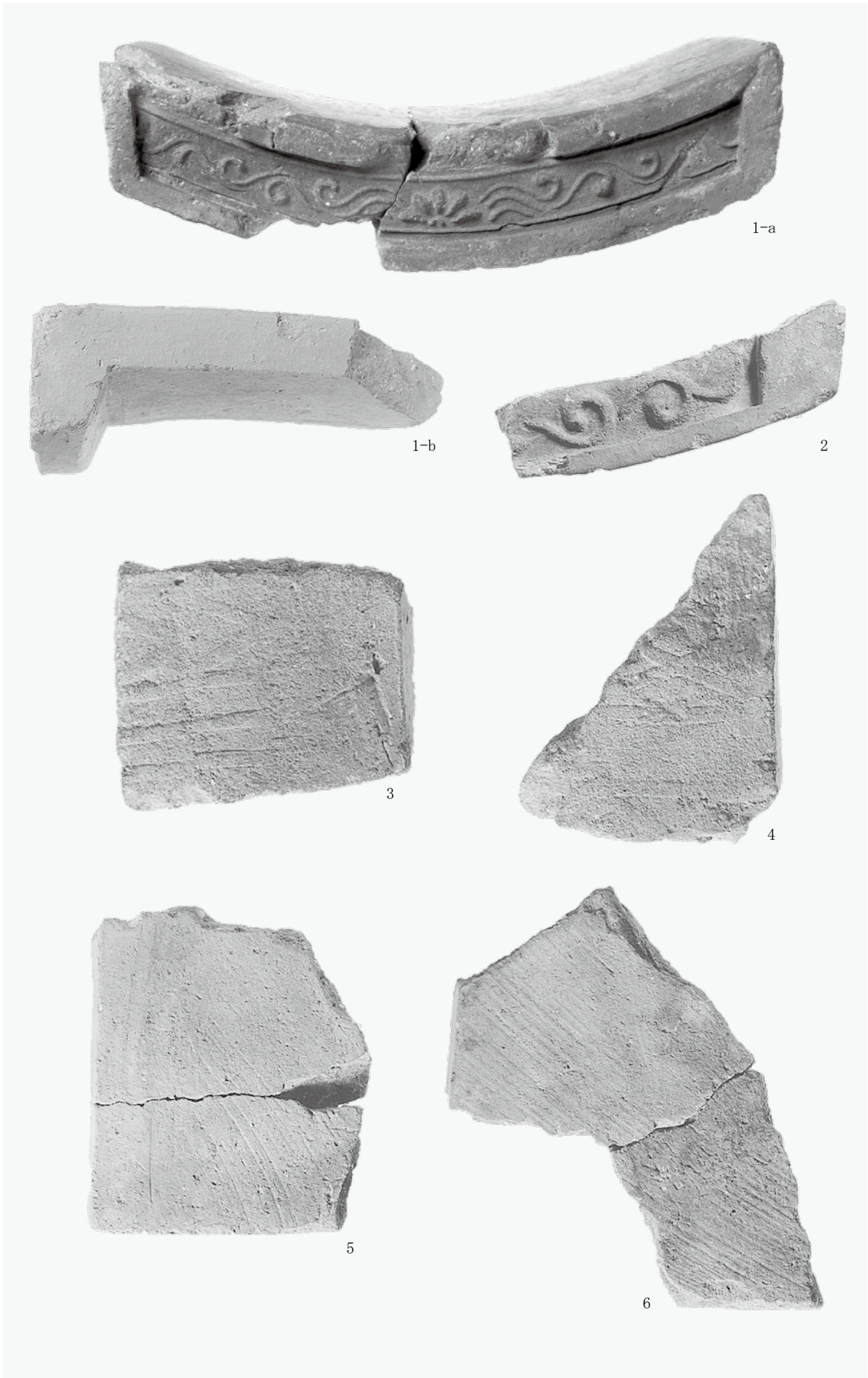
1～11：SD-101・101W

12～18：搬入土器

1・2・4・5・7・9・10：SD-101第1層、3・6・8・11・17：SD-101W第1層、12・14：SK-101上層上位、  
18：SK-101上層中位、13・16：SK-101上層下位、15：SK-101中層



1～6 : SK-01上層



1～6 : SK-01上層

図版18  
遺物7  
瓦2 (平瓦)



1



2

1～2 : SK-01上層



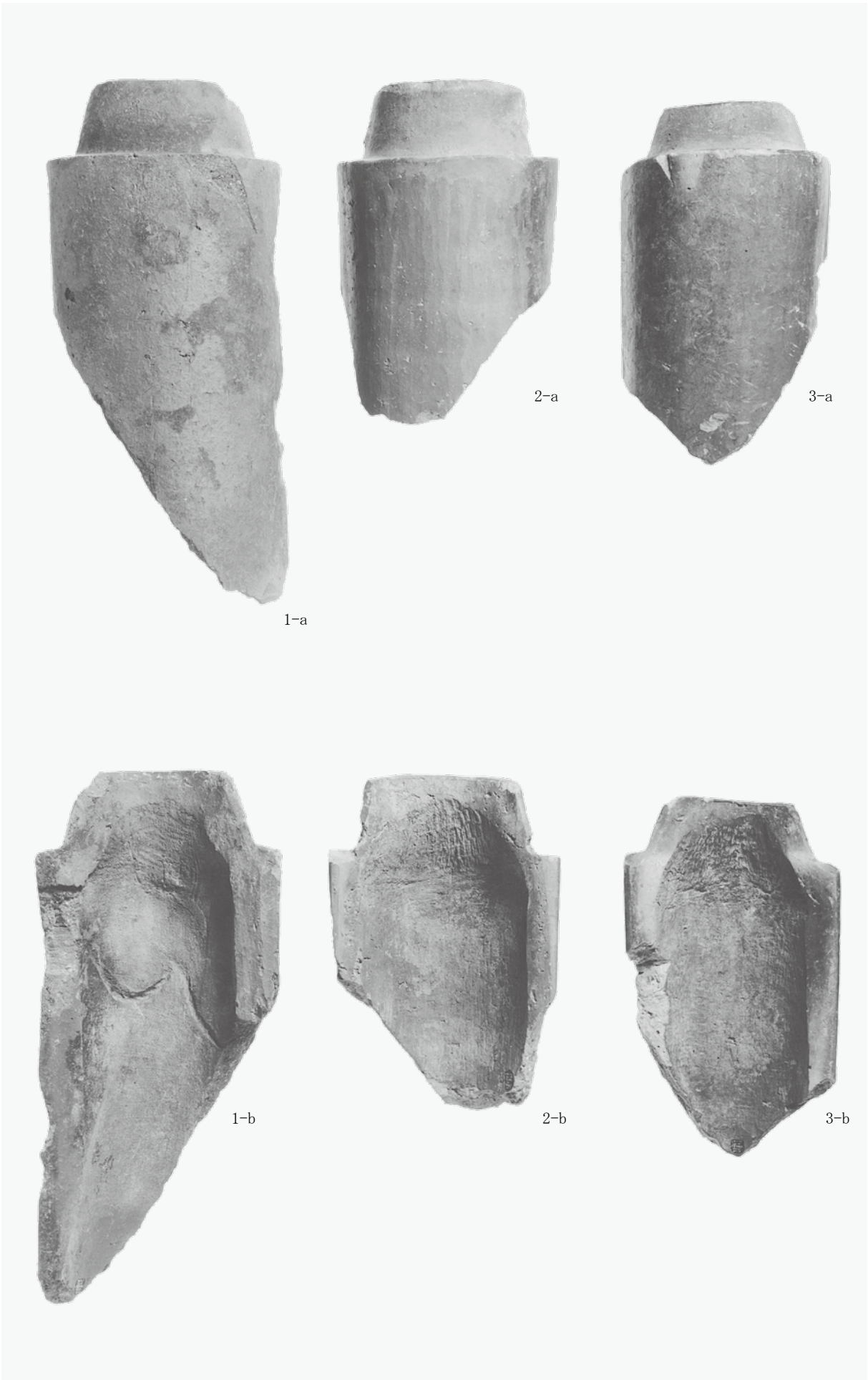
1



2

1～2 : SK-01上層

図版20  
遺物9  
瓦4  
(丸瓦)



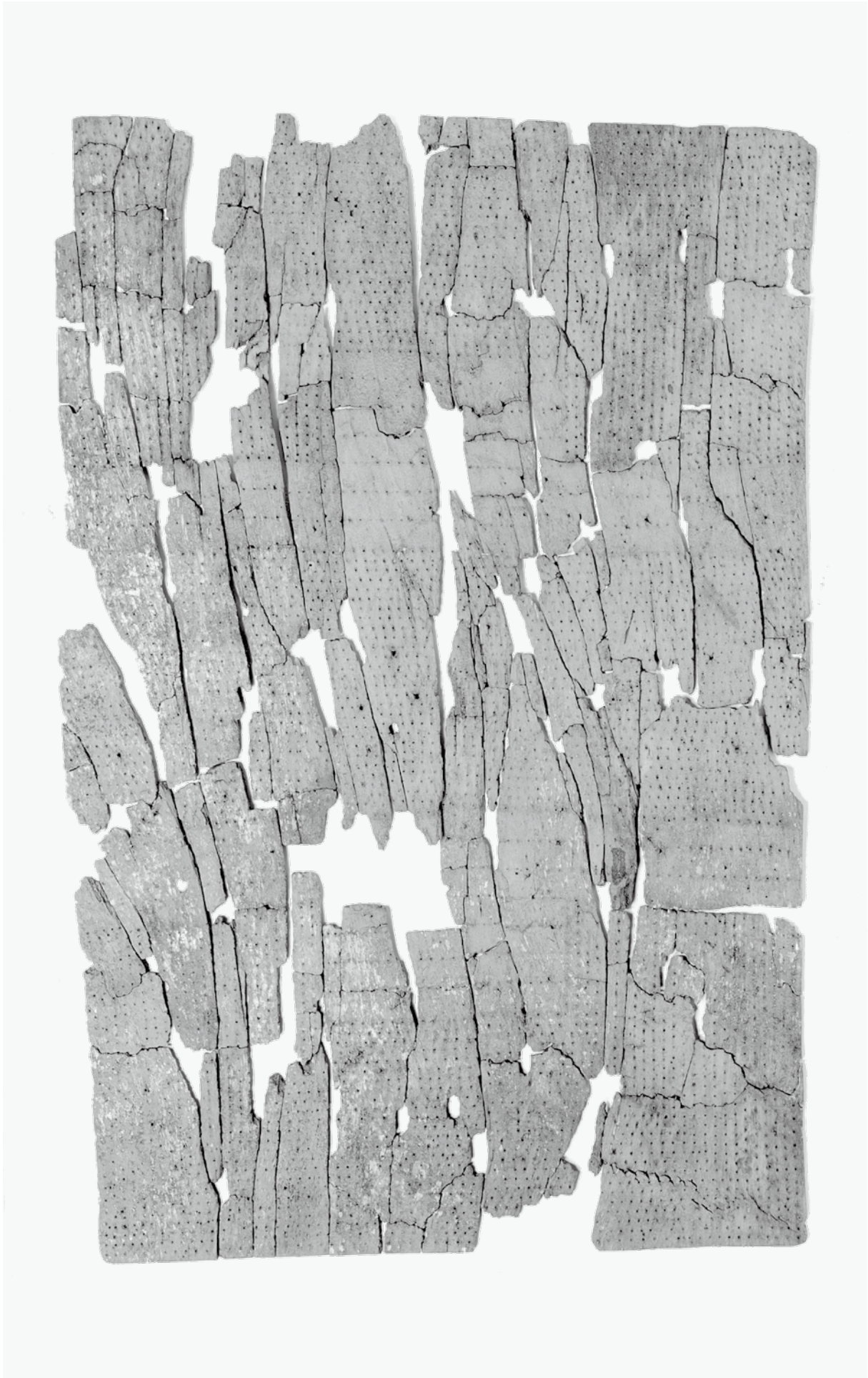
1～3 : SK-01上層



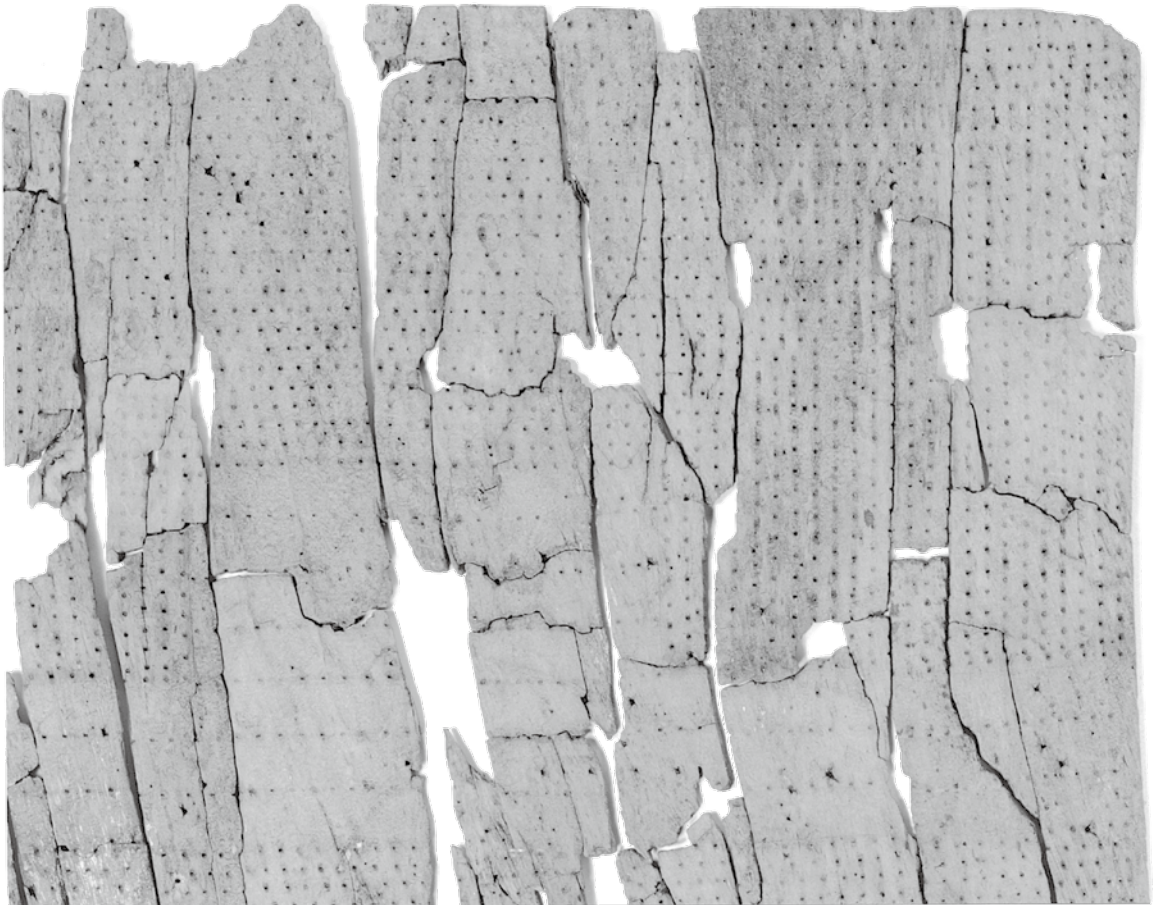




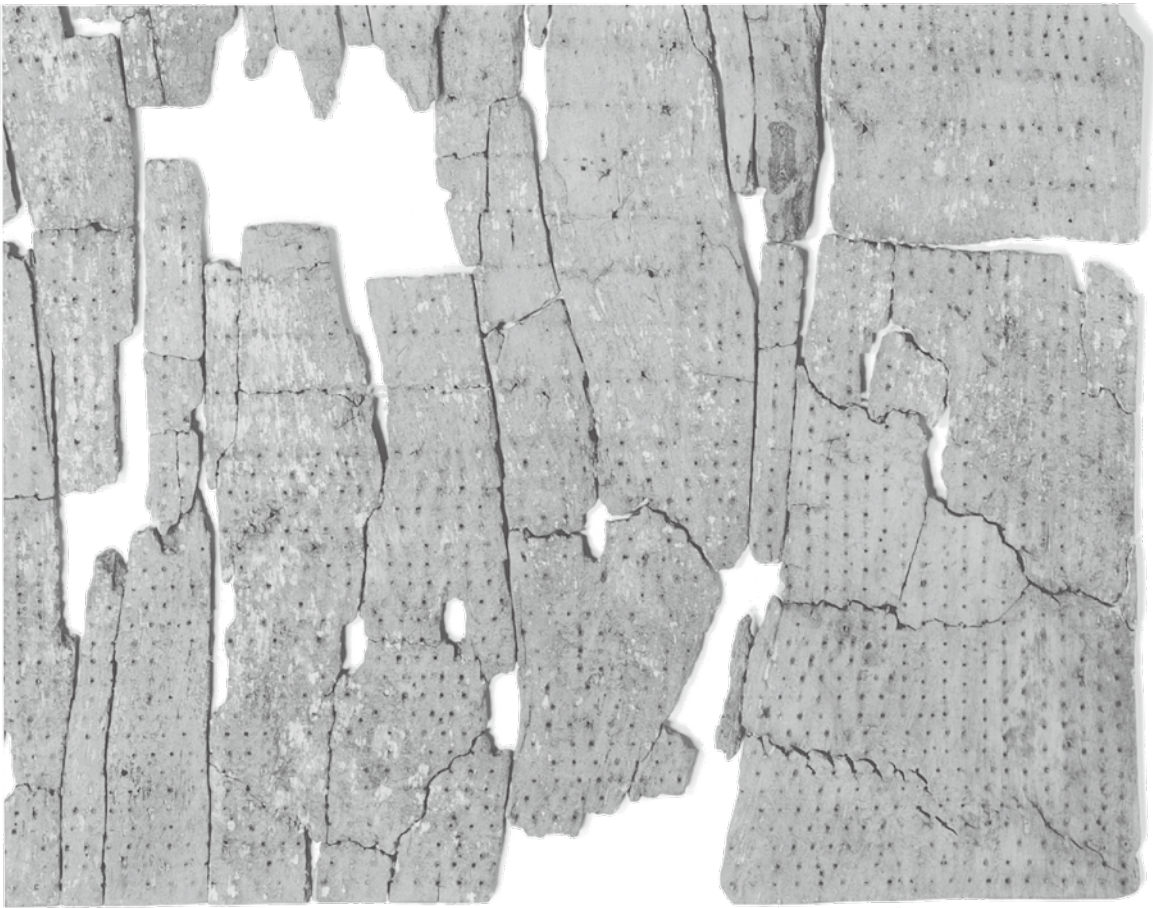
1. 木製盾 (A面处理前) : SK-101中層



1. 木製盾 (B面処理後) : SK-101中層

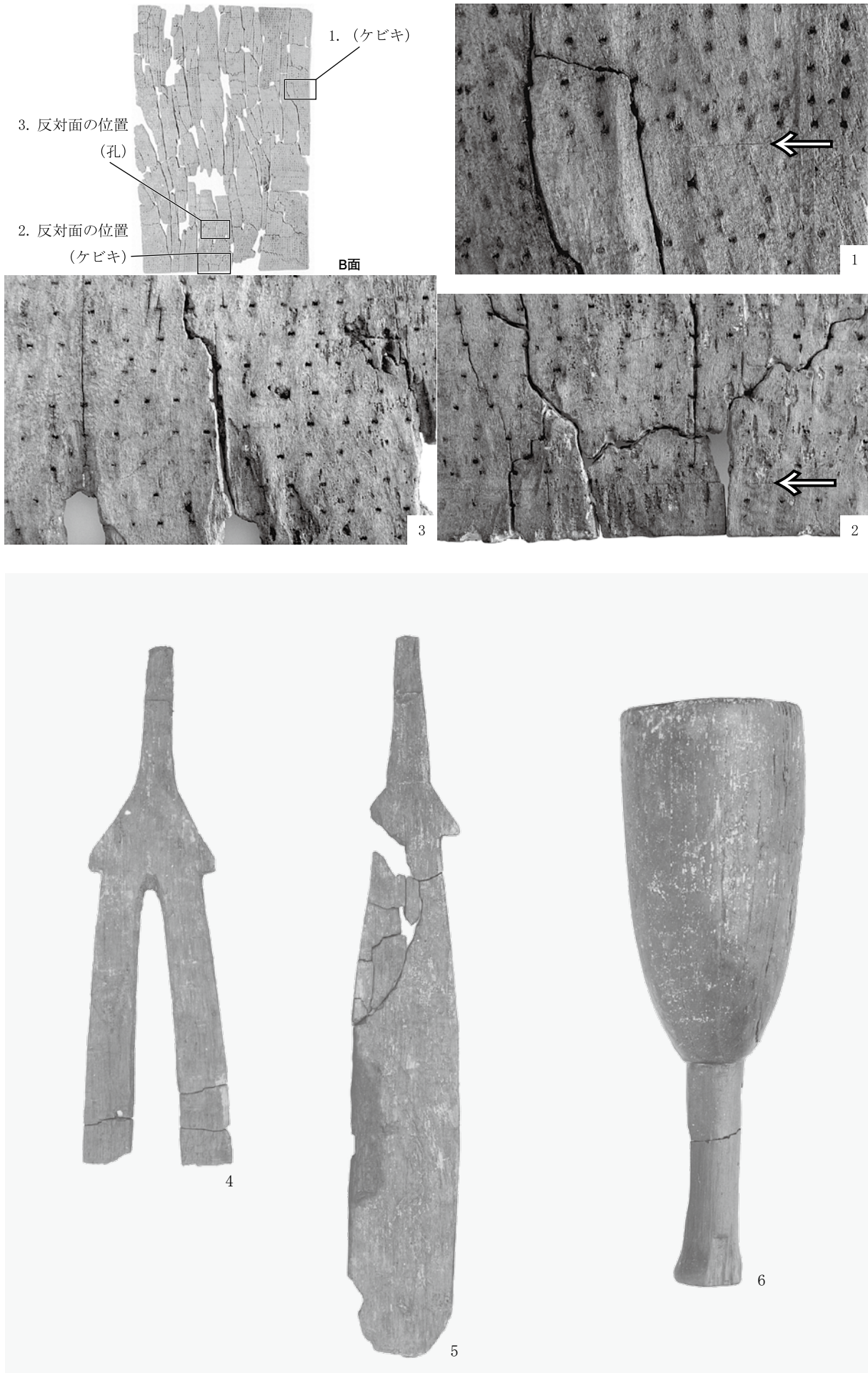


1

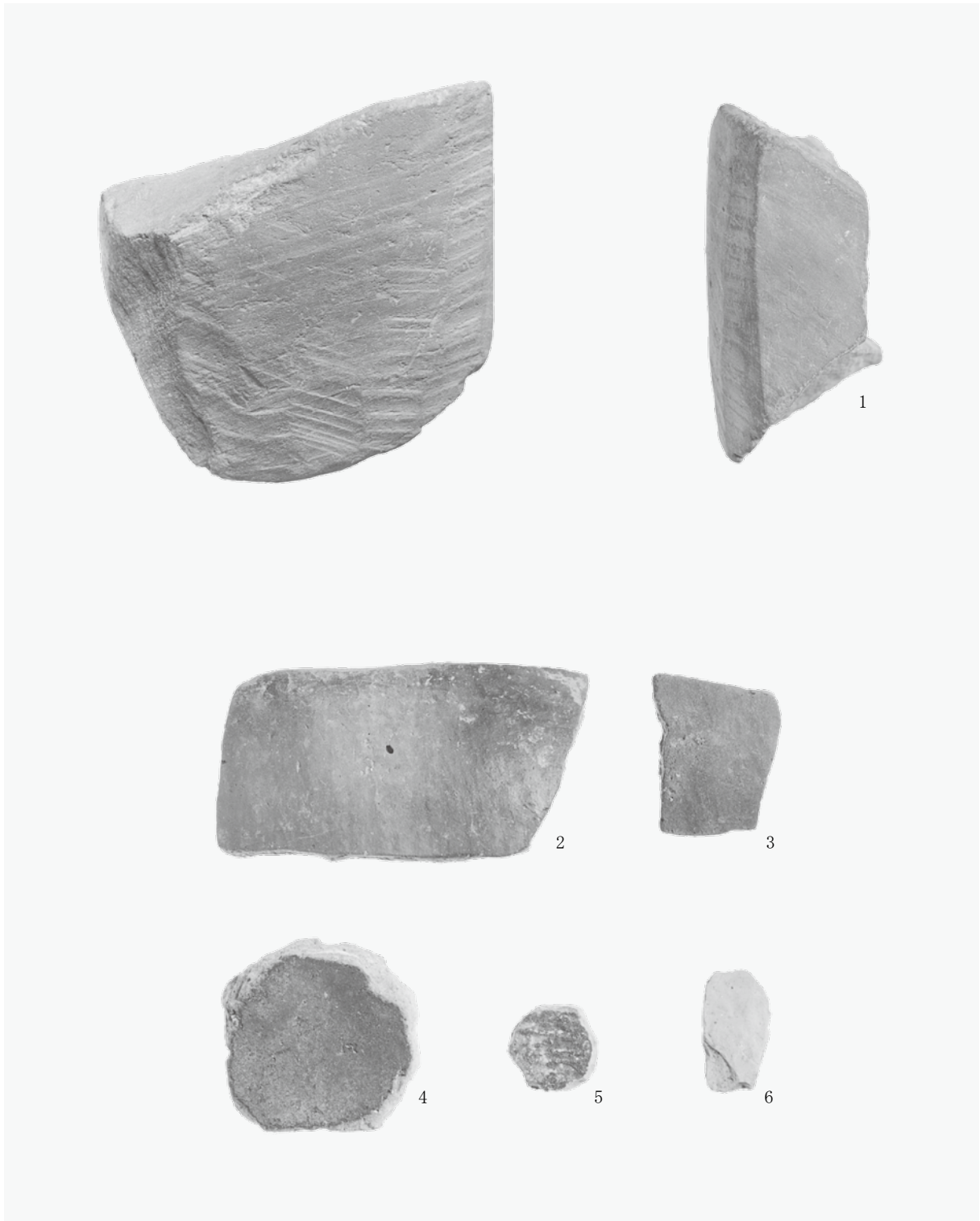


2

1. 木製盾 (B面右上部分 処理後) : SK-101中層、2. 木製盾 (B面右下部分 処理後) : SK-101中層



1. 木製盾 (B面右上部分 処理後) : SK-101中層、 2. 木製盾 (B面右下部分 処理後) : SK-101中層、  
 3. 木製盾 (A面右上部分 処理後) : SK-101中層、 4. 曲柄又鋏 : SK-101中層、 5. 曲柄平鋏 : SK-101中層、  
 6. 横槌 : SK-101最下層上位



1. 石製品：SK-01上層、2・3. 加工土器片：SK-101上層中位・下位、4. 加工円板：SK-01上層、  
5. 加工円板：SK-101上層上位、6. 砥石：SK-01上層

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ほつ・みやこいせき だい1じはっくつちようさほうこくしよ							
書名	保津・宮古遺跡 第1次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	田原本町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第6集							
編著者名	西岡成晃・藤田三郎							
執筆者名	清水琢哉・藤田三郎							
発行機関	田原本町教育委員会							
所在地	〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町大字阪手348番1 TEL.0744-32-4404							
発行年月日	西暦2013年3月29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほつ・みやこ 保津・宮古 遺跡	な ー けん 奈良県 し ー ぐん 磯城郡 た わ ら も と ち ょ う 田原本町 お お あ ぎ み や こ 大字宮古 こ あ ぎ て ら に し 小字寺西  257番4・ 258番4	293636	11-C- 0033(県) 34(町)	34° 33' 37.5"	135° 46' 59.5"	1988.12.09 ~ 1988.12.17	38㎡	農業用倉 庫の建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
保津・宮古遺跡	集落跡  寺院跡	古墳時代  江戸時代	土坑(井戸) 溝 土坑(井戸)		古式土師器・木製盾・曲柄 又鍬・曲柄平鍬・横槌 国産陶磁器・土師器羽釜・ 瓦質土器・瓦・文字瓦		古墳時代初頭 の完形の木製 盾が出土	

田原本町文化財調査報告書 第6集

保津・宮古遺跡  
第1次発掘調査報告書

平成25年3月29日

編集・発行／田原本町教育委員会  
奈良県磯城郡田原本町大字阪手348-1

印刷・製本／株式会社 明新社  
奈良県奈良市南京終町3丁目464番地